KEEP PUNK ALIVE & STRONG! VOL.20

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy

LONDON PUNK NOW

ESKORBUJO

Punk Rock 2015 JAPAN

TOM AND BOOT BOYS

フィリピン・パンク・シーンの
アクティヴィズムについて

脳不安 釧路パンク·ロック1981

HELLSAKURA



BEER BELLY

NEKROMANTIK BATTALION

MUTANT ITCH

KORROSIVE Ⓐ



YOUNG PUNKS GO FOR IT!!

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE KEEP PUNK ALIVE & STRONG! VOL.20

CONTENTS VOL.20

P03 RECONSIDERATION VS BEER BELLY
P06 MUTANT ITCH
P09 KORROSIVE
P11 TOM AND BOOT BOYS
P16 NO FUN KUSHIRO PUNK ROCK 1981
P23 ESKORBUTO
P27 LONDON PUNK NOW
P29 SPLIT VEINS
P32 SNOB
P35 PUNK ROCK 2015 JAPAN
P39 CRIS ETNIKO BANDIDO INFOSHOP
P43 HELLSAKURA
P45 LASHING SPEED DEMONS
P47 ES GIBT KEIN WERT
P48 EDITOR'S NOTES





YOUNG PUNKS GO FOR IT!!

皆々様のおかげで、今号をもちましてEL ZINEはvol.20を迎えることができました(でもvol.0から始めたので21冊目なんですけどね…)。vol.20の巻頭はどうするか?候補は色々とあったのですが、ここはやはり、パンクの未来を背負って立つ、お若い方に飾って頂こう!というわけで、日本からはRECONSIDERATIONのゆうすけさん(22)、BEER BELLYのきづくさん(25)、アメリカからはMUTANT ITCHのMitchell(23)、KORROSIVEのChris(24)にご登場頂き、"YOUNG PUNKS GO FOR IT!!"としてお送りしたいと思います。
(※もちろんそのあとには、オールド・パンクス:TOM AND BOOT BOYSのインタヴューが続くよ)

そう、槇みちるも歌ったように、「若いってすばらしい」のです(…この例えが既に古い)。



RECONSIDERATION vs BEER BELLY

まずは、POGO77 RECORDSからリリースされた1st 7インチが話題を攫った新進気鋭のノイズ・コア・バンド:RECONSIDERATIONのゆうすけさんと、既に幣誌ではお馴染みの感もある(??)ポゴ・パンク・バンド:BEER BELLYのきづくさんによる対談です。
加齢臭ゼロのフレッシュな会話をご堪能くださいませ〜!!

[11月14日　新宿歌舞伎町かっぱ]

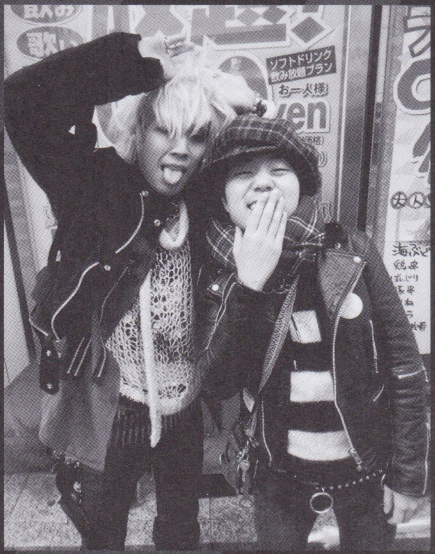
■同じ号に載るロンドンのSPLIT VEINSが、好きな日本のバンドにBEER BELLYを挙げてて。海外のバンドからちょいちょい名前が挙がるようになってて、BEER BELLYすごいなぁと(笑)。
きづく「マジですか?嬉しいなぁ」
■シングルは11月中に発売?
き「その予定なんですけど、デザインとかにトラブルがあって、11月の本当ギリギリ(月末)になりますね」
■ジャケのデザイン、いいですよね。21世紀とは思えない(笑)。
き「ブート感がありますよね(笑)。知り合いのベルトっていう、神奈川に住んでいる外国人の友達が、"BEER BELLY好き"ってよくライヴに来てくれて。"デザインできるかな?"って頼んだら、"いいよ"と」
■シングルはどんな仕上がりに?
き「何も変わらず(笑)。7インチのときより速くなりました。そんくらいかな(笑)」
■なんでタイトルが『BEER BELLY's LAST SINGLE』なんですか?
き「本当に"LAST"なわけじゃなくて、TOY DOLLSが最後じゃないのに"OUR LAST TOUR?"ってツアーをやっていたり、COCKNEY REJECTSでいう"GREATEST HITS〜"的な、ふざけた感じでやってみようと。結構、"解散するの?"って言われたり(笑)」
■あ、でもTOY DOLLS好きなんですね。
き「好きですね〜。でも3枚目のアルバムまでくらいしか持ってないんですけど(笑)」
■(VA『DO YOU WANNA BE A PUNK ROCKER?』のBEER BELLYのブックレッ

YOUNG PUNKS GO FOR IT!!



ト の)デザインがTOY DOLLS風ですもんね。
き「前任ベースのまいちゃんが描いてくれて(笑)」
(ここでゆうすけさんが登場)
ゆ「こういうインタヴューってどうすればいいの?(きづくさんに向かって)お前一回やったんだろう(笑)」
き「聞かれたことを答えればいいから(笑)」
■前回は今村さん(TOM AND BOOT BOYS/POGO77 RECORDS)と話してもらったんですけど(vol.16に掲載)、あのときは緊張していましたよね。
き「超緊張して喋れなくて。山路さんがトイレに行っている間に、"お前ちゃんと喋れよ"ってノリ(今村)さんに普通に怒られて」
ゆ「普通に怒られたんだ(笑)」
き「THE DEFECTIVES(イタリアのポゴ・パンク・バンド)とのツアーはどうだった?って聞かれたけど、あんまり答えられなくて…」
■今日は気兼ねなく喋ってください(笑)。きづくさんはパンクの入り口がブルーハーツでしたが、ゆうすけさんは?
ゆ「パンクっつーのが分からないでPISTOLSとかCLASHとかは聴いてて。TSUTAYAとかにあるから」
き「あー、俺もTSUTAYAで借りたわ」
ゆ「けど、"なんか違うな"っていうのはあったんですけど(笑)、そのまま適当に過ごしていて。他の音楽、NIRVANAみたいなグランジをやっていたんですけど、もっと激しいのを聴こうと思って、そのときは激しい音楽と言ったらパンクかメタルしか頭になくて、(ディスク)ユニオンに行ってパンクのコーナーでたまたまジャケ買いしたのがDISORDERのアルバム(『Under The Scalpel Blade/One Day Son All This Will Be Yourz』CD)とCHAOS UKのセカンド・アルバムだったんです。それが本当の入り口かな、と」
■それは何歳くらいのとき?
ゆ「高二くらい?最初、DISORDERはコンポが壊れていると思って、3回くらい聴き直して。違うコンポを試して(笑)。コンポにCDを入れてトラック1って表示されたら、"シー"って鳴りだして、"壊れているんじゃね?"って。他のコンポでも"シー"って鳴るから、"これはこういうやつだ"って(笑)。それからずっと聴いてて好きになっていって」
■テキトーにジャケ買いで、たまたま?
ゆ「そのときマーチンの14ホールを履いてて、DISORDERはCD、レコードで聴くなんて発想がなかったから、CDで買ったんですけど、ジャケがマーチンにDISORDERって描いてあって。それで買ったんです(笑)。そのときにもし俺がOi!とかスキンズのを買っていたら、違う方向に進んでいた。坊主になっていたかも(笑)」
■そこから一気にノイズ・コア?
ゆ「じゃ、ないんです(笑)。RECONSIDERATIONの前にクラスト・バンドをやっていて。DISORDERとCHAOS UKしか聴いていないときに、(下北沢のパンク・ショップ)KILLERSでメンバー募集の紙を見て、連絡して、それが18歳のとき。最初、何をやっているのか全然分からなくて、自分が何を弾いているのかも」
き「ベースだったんだっけ?」
ゆ「ベースで入って。そこから色々教えてもらって、スウェーデン(のハードコア)とか聴いて、ハタチくらいでもう一回CHAOS UKを聴いたら、"コッチのほうがいいな"って(笑)。それからずっとノイズ・コアで」
■RECONSIDERATIONを結成したのは何年ですか?
き「(BEER BELLYと)一緒くらいじゃない?」
ゆ「俺らは2013年だよ。まぁ、大体一緒か(笑)」
■結成はゆうすけさんが主導的に?
ゆ「俺とギターのナオキさん、バンド(ネーム)だとSAVEXっていうんですけど…、SAVEXのリップクリームを塗ってばかりいるからなんですけど(笑)。その2人で"音源だけのノイズ・コアのバンドをやろう"と話していて。…で、KALTBRUCHING ACIDEATHの企画に誘われて、"じゃあドラムを入れよう"と3人になって。最初は俺がベースも弾いてて」
き「その企画ってどこでやってたっけ?」
ゆ「EARTHDOMで。一年間くらい3人だったのかな。"ベースを弾きながら歌なんて歌えないから、もうイヤだ!"って入れたベースがまさかの元SHIT FACEDで(笑)」
■元SHIT FACED?誰ですか?
ゆ「YOSSY THE VINCENTって名前なんですけど(笑)」
き「かずうさん(元SHIT FACED/現BITTER SWEET GENERATION)に聞いたら、"あ、いたね"くらいだった(笑)」
ゆ「そうそう、一瞬だったみたい。STAGNATIONにもいたみたいで」
■じゃあ、日本のノイズ・コアはいつぐらいから聴いていたんですか?
ゆ「CONFUSEとかGAIって定番じゃないですか。だから、それはクラスト・バンドをやっていたとき、入ってすぐに教えてもらって。CONFUSEとGAIは知ってて、"ノイズ・コアってこういうやつなんだな"って感じで。EXPOSE 82で火がついたのかな。デモ・テープを聴いて"ヤバイ!"と思って、それから7インチを買って、そこからノイズ・コアを探していったら色々出てきて、ノイズ・コアほど奥が深いものはないんじゃないかと思って(笑)。ノイズ・コアって一言で言っても色んな種類があって、CONFUSEとGAIでも最早違うし。…で、日本のノイズ・コアはいつからだろ(笑)?多分2、3年前くらいからです」
■CHAOS CHANNELとか?
ゆ「カオチャンは…19歳で初めて聴きました(笑)。クラスト・バンドをやりながらも聴いていましたけど、そういう音じゃなかったので」
き「企画でカオチャン呼んでいたよね?」
ゆ「それはRECONSIDERATIONでね、超好きだったから。最初はやっぱり、みんなが知っているようなバンドしか聴いていなかったですね。CONFUSEとかGAI、これが一番聴いていたかな。クラストって"オーオー"言いますよね。初めて聴いたCONFUSEが"Fuckin' Lovers"だったんですけど、クラストみたいに"オーオー"言っているのかと思ったら、"ちゃんと歌ってる!"ってなって。ノイズ・コアってポップなんだなって。今、CONFUSEを聴いてもポップだとは思わないけど(笑)」
■このRECONSIDERATIONってバンド名は?
き「あ、俺も気になる」
ゆ「ナオキさんが"これどう?"って言ってきて。"再び考える"みたいな意味、らしいけど…。"あ、いいすよ"って、決まった(笑)」
き「ナオキさん的にはなんかあったんだろうね」
ゆ「ノリでいいっすねって言っちゃって、それで決まっちゃいましたね(笑)。バンド名が長いって言われますけど、俺も長いなぁって(笑)」
■これまでの音源は7インチとオムニバスとテープ?
ゆ「一番最初に出したテープがあって、そのときは素性を明かさないでやったけど速攻でバレて。あと、ライヴ限定で30本くらい作ったのも一本あって。それに単独(7インチ)、オムニバス、KILLERSから出したカセット。カセットも30本とかだったのを、今村さんに言われて数を増やしたり。元々ライヴのときに配るだけのテープだったんだけど、それがセカンド・デモ・テープ扱いされるようになって、音質もクソだし、内容もクソだし、なのにヤフオクで何千円にもなってて申し訳ない気持ちが」
き「7インチもヤフオクですごい値段があがっているんでしょ?一時期、一万円になったり」
ゆ「俺はどうでもいいんだけど。枚数が少ないだけだし(笑)。出した音源としては5本で、正式(音源)は7インチとオムニバスだけです。テープは気が向いたときに焼こうと思っていて(笑)。面倒臭くて、心が折れそうになる。2本やったらもういいかなって」
き「一番最初のライヴのとき、ノリさんに100

本バラまけって言われて、100本を独りで焼いたよ」
ゆ「自分のバンドが嫌いになるよね、聴き過ぎて(笑)」
き「CDみたいにすぐ焼ければいいんだけど」
ゆ「KILLERSから出したテープも50本だったんだけど、隠しトラックとかで13曲くらい入れているから、一本焼くのに20分くらいかかって、泣きそうになった」
■今後予定している音源は?
ゆ「今村さんからセカンドの話しは来ていたんですけど、まだバンドが出せる状態じゃないので、もうちょいあとになっちゃうかな〜と。自分たちの好きなバンドとだったらスプリットでもいいし、テープを気まぐれで焼くかもしれないけど、納得できるものができれば今村さんにお願いして。正式音源はやっぱり音もいいし」
き「初めての単独をPOGO77から出しているから、"RECONSIDERATIONいいなぁ〜"っていう。超うらやましいと思いながらも、BEER BELLYは自主でやってやろうと」
ゆ「じゃあ、きづくのところから出してよ(笑)。俺は自分で7インチ作るとか絶対に無理だから。最初はソノシートを出したかったんだけどね、今は丸に(カット)できないみたいだから」
き「自分で切らないといけないんでしょ?」
ゆ「どうする?ミスって曲のところまで切っちゃったら(笑)」
き「怖いよね。四角のままでいいじゃん」
ゆ「イヤだよ、四角が回っていたら格好悪くない(笑)?自分のバンドじゃなきゃいいけど」
き「俺は逆に四角がいいけどな。四角が回っていたらいいじゃん」
ゆ「あと、俺らはCONFUSEとかGAIだから(影響があるから)、丸いソノシートがいいね」
■世代的に、データ配信とかは興味ないんですか?
き「あ〜、ダウンロード・コードとか」
ゆ「パンクで?」
き「7インチで出して、そこにダウンロード・コードがついてて、とか」
■書いてあるURLからMP3をダウンロードしてね、というやつですね。
ゆ「へー。いいね。やろうとは思わないけど(笑)。それがあるとスマホで聴けるんですね」
き「あとは、レコードと一緒に同内容のCDを入れて、とか」
ゆ「いやだなー」
■そこはアナログのフォーマットに拘りたい?
ゆ「自分が買うときに、ちょっとイヤだなって思っちゃう。LPで聴きたい。…と言いつつ、今住んでいる家にレコード・プレーヤーないけど(笑)。実家に帰って聴いたりしてて(笑)。彼女と一緒に住んでいるので、彼女の許しが出れば家に持っていくんですけど。レコードで聴くと、CDと違いますしね。レコードの音の方が好きかな。CDはクリアだよね、こもらなくて」
き「特にノイズ・コアだとね」
ゆ「キレイなほうがいいんだけど、キレイ過ぎるとダメっていう(笑)」
■同世代のバンドで、いいなと思うのはいますか?
き&ゆ「KALTBRUCHING ACIDEATH(笑)」
■どんなバンドですか?
ゆ「メタル・クラスト?前に俺がやっていたバンドを見て、"こんなバンドをやりたい"って始めたみたいで。全然違うけど(笑)。重い音ですね」
き「けど格好良いよね」
■音源は出してます?
ゆ「今度デモ・テープを出すみたいで。年々格好良くなっていますね」
き「メンバーは昨日の(BEER BELLYの)ライヴにも来てくれて、"みんなKALTBRUCHING ACIDEATHってバンド名を覚えてくれないんだよ"って(笑)」
ゆ「同世代だとブルチン(KALTBRUCHING〜の略)くらいだよね」
き「同世代だと気になって聴くよね。ライヴを見たりして格好良いな〜って」
■きづくさんが24歳?
き「25になりました。しっかりしないと」
ゆ「わたくし22です(笑)」
■そのくらいの歳だと、周りでもパンクを辞めていく人なんて出てきません?
ゆ「"こいつはいなくなるだろうなぁ"って奴がいなくなると、してやったりですけど(笑)」
■してやったりって(笑)。
ゆ「やっぱりいなくなったか!って」
き「BEER BELLYなんてすぐにいなくなると思われているだろうから」
ゆ「アベさん(BEER BELLYのドラム)は風前のともしび感があるけど(笑)」
き「アベさんが一番やる気あるんだよ」
ゆ「アスカ(ex BEER BELLY/現ASUKA AND THE BUM SERVANTS)ときづくは残ると前から思っていた。消えると悲しいけど、"消えるな"と思っていた人が消えると"当たった!"って(笑)。かと言って、俺がずっといるかも分からないし(笑)。イヤになったら辞めちゃうかもしれないけど、でも辞める辞めないの問題じゃないけどね。辞められる気がしないから、ノイズ・コアは」
き「ポゴ・パンクは危ういよね、辞めてクラストに流れるから(笑)」
ゆ「名前がBEER BELLYなのにクラストになっちゃうの(笑)」
■BEER BELLYで、突然アニマル・ライツとか歌い出すのは止めてくださいね(笑)。
き「そういうのは分かんないから歌わないです(笑)」
■今後パンク・シーンをこうしたいとかはありますか?
き「ないです(笑)」
ゆ「楽しければいいから。今はカッパンクとか、今村さんとかが大きい企画を開いてくれているから、面白いと思うけど、もしそれがなくなっちゃったときには、"なんかやらないとな"という気持ちはあるけど。RECONSIDERATIONを始めてからは結構面白いかな〜。でも俺が変えてやる感はないよね」
き「だからダメなんだってノリさんに怒られるよ(笑)」
ゆ「でも、ブルチンとBEER BELLYとRECONSIDERATIONでスプリットとかね」
き「それは出したいね、3バンドで」
■じゃあ、変な質問ですけど、20年後にパンクをやっていると思いますか?ちょうど今の、今村さんくらいの年齢になりますけど。
ゆ「このまんまいくと、居続けるとは思うけど、今村さんみたいにはなっていないと思います(笑)。できないと思います、先陣を切れない。人についていくのが楽だから(笑)。変な話し、カオチャンのニラさんみたいなポジション、あのバンドのあの人!みたいな感じで、バンドが続いていたら万々歳。でも今は想像ができないかなぁ…」
き「20年後、俺は45か、ヤバいな。結婚はしてたいなー(笑)。あ、パンク関係なかった(笑)」
■それでは最後に、何か読者さんに言いたいことがあれば。
き「シングルが出ているので買ってください。頑張りました」
ゆ「ライヴ呼んでください。あとBEER BELLYのCD買ってあげてください(笑)」





YOUNG PUNKS GO FOR IT!!続きましては、TOM AND BOOT BOYSの西海岸ツアーをサポートした、カリフォルニア州フレズノのノイズ・コア・バンド:MUTANT ITCHのドラムにして、レーベル&ディストロ:Dark Raidsを主宰しているMitchell(↑写真右)、ピチピチの23歳であります!
今号P.11でT&BBの今村さんが"メール一通からでも誠実さが分かる"と言っていますが、本当にMitchellからのメールは丁寧でして、"Sir"なんて使うパンクス、僕は初めてです(汗)。パンクを辞める・辞めないはその人の自由ですが、今後10〜20年とフレズノのシーンを担ってもらいたいナイス・ガイなのでした。T&BBと彼女(↑写真左)に対する愛情が伝わってくるインタヴューをドウゾ!

■まずはT&BBとのツアーはどうでしたか?印象を聞かせてください。
「ツアーはすごくうまくいったよ。マーチャンダイズもたくさん売れて、みんなT&BBを見られて喜んでいたしね。T&BBのみんなもカリフォルニアを楽しんでもらえていたらいいんだけど。彼らは僕が今までに出会った人たちの中でも最高の人たちだったよ。今では彼らを友人と呼ぶことができてとても幸せだし、再会するのが待ち切れないね(望むべきはすぐにでも)。僕たちは合計3つのショーを企画したんだ。LA、フレズノ、そしてオークランド。どのギグも素晴らしかったし、オフの日にはサンフランシスコに行って、イカした洞窟で岩に登ったりビールを飲んだりしたよ」
■どうしてあのツアーを企画したの?どんなキッカケがあったのですか?
「T&BBのことは何年も前から大好きだったし、2014年の東海岸ツアーでも彼らを見たんだ。それで、"どうして西海岸に彼らを招かないんだ"って僕は考えた。T&BBやPogo77のレコード/テープをDark Raidsに卸してもらうため、既にノリとは連絡を取り合っていたしね。それでノリに打診してみたんだ。彼は喜んでくれたみたいだから、友人のHuman Double Face RecordsのRichardや僕の彼女のKelseyに相談して、準備を始めたんだ。全てがピタッとハマったのさ」
■MUTANT ITCHについても聞かせてもらえますか?
「MUTANT ITCHは2014年の1月に結成したんだ。メンバーとは友達でずっとバンドをやる話しをしていてね。過去にもバンドはやっていたんだよ。2012年の後半だったか、2013年のはじめ頃にね。GurpaulとPhil、僕、それに今のCHAOS TRIBE(フレズノ)のメンバーなんかと一緒にさ。そのバンドはSUFFER DAMAGEといって、GESSのデモからバンド名を拝借したんだ。すぐに止めちゃったんだけど、Gurpaulの彼女のErikaをベースに迎えて、MUTANT ITCHとして今度はマジでバンドを始めたってわけ、ハハハ」
■MUTANT ITCHは日本のノイズ・コア、DUST NOISEやSCREAMING NOISEなどからの影響があるんですよね?どうやって知ったんですか?
「DUST NOISEとSCREAMING NOISEは僕が16歳のときに、年上の友人に教えてもらったんだ。色んな国のパンクを知っている人でね、LEBENDEN TOTENやDISORDER、CONFUSEなんかも教えてもらった。あっという間にのめり込んだよ。当時の僕はストリート・パンクばかり聴いていたから、この強烈且つロウでノイジーなサウンドは僕にとって"新しい"タイプのパンクだったんだ。こういったバンドの存在を知った僕は、アメリカ中のディストロをチェックして、彼らのブートレ



グ・テープを探しまわったし、テープをたくさんの人とトレードしたよ。その頃にはNERVE SKADEやPERDITION、AGHASTがツアーに来ていたから、10代の僕がそれまで体感したことのないロウ・ノイズ・パンクのライヴを見ることができたんだ」

■パンクを聴くキッカケって、やっぱりRANCIDやBAD RELIGIONみたいなバンドでしたか?

「僕は子供の頃スケボーの大ファンだったんだ。親戚の子供たちもみんなやっていたしね。それでパンク・ソングが流れるスケボーのビデオを見るようになった。MISFITSやSEX PISTOLS、BLACK FLAG、RAMONESといったバンドに興味を抱いたね。僕は10歳くらいだったかな。誤解しないでほしいんだけど、子供の頃、僕はBAD RELIGIONもRANCIDも好きだった。けど、BAD RELIGIONの方がずっと好きだったかな。「No Control」は今でも大好きなパンクのアルバムだよ(秘密だけどね、ハハハ!)。アンダーグラウンドなパンク・ムーヴメントに接していると、そういったバンドは今やかけ離れた存在だね。僕がパンクに夢中になったのって、MISFITSの77-83年、彼らがまだオリジナル・ラインナップだった頃の影響が大きいかな。10歳だったときには、そのヘヴィなサウンドにホラーをテーマにした曲が大好きだったし、最高にクールに思えたんだ。それでパンクにのめり込んだんだよ」

■作曲するときに、大切にしていることは?

「うーん、一番大切なことはベースとドラムのサウンドで絶えず惹きつけるってことかな!つまんない曲は作りたくないしね!ヴォーカルとギターはイイ感じだから、Erikaと僕はビートをキープするために頑張らないとね!」

■T&BBとのスプリット7"がMUTANT ITCHとしては初のヴィニール音源ですか?デモ・テープの頃よりもポゴ・パンクの要素が濃くなったように思うのですが。

「うん、T&BBとのスプリットがヴィニールでの初めてのリリースさ。1曲目は"Chaos In My Mind"というノイズ・コアだけど、2曲目の"Pussy Cat"はGAIよりもSWANKYSのスタイルを意識したんだよ、ハハハ!T&BBとのスプリットが出せるなんてすごく光栄なことだから、どこかT&BBっぽい曲にもしたかったんだよね。面白いアイデアだと思えたんだ。"Pussy Cat"をプレイするのは最高だよ!T&BBも気に入ってくれるといいね、ハハハ!」

■Dark Raidsというレーベル兼ディストロもやっていますよね?

「ディストロとしてのDark Raidsを始めたのが2013年。地元の友達やテープのトレードをしていた人たちに、レコードやテープを売っていたんだ。それから2本ほどテープをリリースしたら好評だった。それでもっと多くのレコードやテープを扱うようになって、ツアー・バンドのためにマーチャンダイズを用意したりもね。この数年、とても順調さ!自分たちが手掛けたもの、その全てが大好きだし、今後やることも楽しみだよ」

■では、Dark Raidsの信念とは?

「自分たちが聴きたいと感じたレコードをリリースするのが好きなんだ。Keep Punk Alive & Strong! Keep Hardcore Alive & Strong!」

■今のフレズノとカリフォルニアのパンク・シーンについても色々教えてください。スパイキー・パンクスやクラスティーズは大勢いるのでしょうか?

「フレズノは大きな都市で、カリフォルニア州の真ん中に位置しているんだ。セントラル・バレー(カリフォルニア州中央部)では最大の都市だし、フレズノには大規模なパンク・シーンが80年代にはあったんだ。CAPITOL PUNISHMENTやNBJといったバンドは、今ではアメリカン・ハードコア・パンクの歴史におけるクラシックになっているよね。同様に、90年代にはすごく強固なパンクとOi!のシーンが、僕の知る限りあったんだ。12歳か13歳の子供のとき、僕はフレズノで企画されるショーが気になるようになっていった。2005年のことだね。あの頃のシーンは新たなキッズで盛り上がっていたし、ショーの度に新たな顔ぶれが並んでいたよ。だけど数年を経て、シーンはかなり縮小してしまった。たくさんのスパイキー・パンクスやクラスティーズがいたんだけど、今ではバンドをやっていたりショーを企画している何人かでパンク・シーンは構成されている。

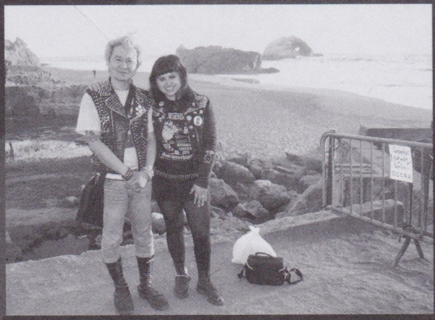












シーンに昔の面影はないね。実際、僕が企画した"All Punk's Go For It"はT&BBのツアーの2日目で、16バンドが出演したパンク・フェスだったんだけど、地元からのお客さんはそれほど多くはなかった。400人くらいの人たちがこのイヴェントに来てくれたけど、80パーセント以上は街の外からのお客さんだった。ありがたいことに、西海岸中の人たちが応えてくれたおかげで、あの日のギグはツアーの中でも最高のものになったのさ!今のカリフォルニアで好きなバンドはKORROSIVEにPIG DNA、共にオークランドのバンドだね。あとはSSYNDROM(サクラメント)、LAのFUNDAMENTAL、THE DARK、TOZCOS、それにFUMIGADOS。あとはBED BUGS(メントーン)。みんな素晴らしい人たちだし、イカした音楽をやっているよ!お気に入りのレーベルはLAのSilenzio StaticoとCrepusculo Negro、オークランドのShithammerとManic Noiseかな。チェックすべきショップはEast 7th St.とMusica Para La Destrukcionだね。どちらもLAのDIYなパンク・スポットだよ。会場だけど、カリフォルニアだとハウス・ショーが盛んで、サクラメントではCasa De Chaosというイカれたギグが企画されているんだ。ハウスや地下室でのショーは南カリフォルニアのあちこちで企画されているよ。それに小さなバーでのギグも多いかな。MUTANT ITCHでは、2015年の10月に、キチンとした会場でギグをやったんだけど、SUBHUMANSと一緒だったんだよ。そんな場所でやるなんて妙な感じだったけど、僕らのノイジーな楽器が凄まじい音を出したせいで、会場のサウンド担当者は完全に困惑していたね、ハハハ!カリフォルニアは訪れたり、ショーやバンド、ショップ、パンク・カルチャーをチェックするには最高の場所だよ。オークランドとLAのパンク・シーンはファンタスティックだしね!多くの人たちが活動的なことには驚かされるし、機会があれば是非ともカリフォルニア・パンク・シーンをチェックしてもらいたいよ」

■東海岸には行ったことがありますか?西海岸と東海岸のパンク・シーンに違いを感じたりしますか?

「東海岸に行ったことがあるのは一度だけなんだ。2015年4月のNew York's Alrightを見にね。だけどMUTANT ITCHとVIDEO FILTH(ボストン)で2016年に東海岸ツアーをしようと計画中なんだ。西海岸と東海岸のシーンにはたしかに違いがあるね。ただなんて表現すればいいのか分からないな。それに僕はほとんどブルックリンの一部の地域にいただけだしさ。また行ってみて、もっと探索してみたいね!僕が滞在したのは僅かな時間だったけど、それでも体験したことのないカルチャーと景色に溢れていて面白かったからさ」

■今後の予定と目標を聞かせてください。

「予定としては、新しい場所を訪れたり、もっと旅行がしたいね。それと僕が大好きな素晴らしい音楽をリリースし続けたいし、友達と一緒にもっと演奏しまくりたい。目標はすぐにでも日本へ、MUTANT ITCHでツアーすることさ!とても楽しいだろうし、興奮するね!」

■インタヴューさせてくれてありがとう。最後に、日本の読者にメッセージを。

「ケンジ、インタヴューの機会をありがとう。それにT&BBのツアーで、全てのマーチャンダイズをシルク・スクリーンでプリントしてくれた、僕の愛すべき彼女であるKelseyにも感謝したい。あとはHDFのRichard、僕のバンド仲間たち、物販を手伝ってくれたVictoria、KORROSIVE、SYMPTOM、もちろんT&BBにも感謝しているよ!日本のオーディエンスのみんなとは、MUTANT ITCHのツアーで会えたらいいね!ハハハ!」





KORROSIVE

YOUNG PUNKS GO FOR IT!!

ラストはPOIKKEUSやTOM AND BOOT BOYSとも共演を果たしている、カリフォルニア州オークランド発のSuomi 82ハードコア・バンド:KORROSIVEのヴォーカルにして、レーベル:Shithammerを主宰しているChris、溌溂とした24歳でございます! KORROSIVEは今年APPENDIXとのツアーも敢行し、来年には日本のKAFKA、そしてCRUDE S.S.(!!)とのツアーも予定しているようで、その精力的な活動は頼もしい限り。スカンジ系が好きな方はゼヒともチェックして頂きたいバンド&人物なのであります。

■まずは、TOM AND BOOT BOYSとのツアーはどうでしたか?

「どのショーも最高に狂っていたぜ。多くの人たちがT&BBを見に来たから、ものすごい人混みの中での演奏はしんどそうだったね。けど、俺がカリフォルニアでプレイしたショーの中でも、あのツアーはベストなものだったな。T&BBのみんなは素晴らしい人たちだったし、知りあえて嬉しかったよ。ツアーの企画者であるMitchellとKelseyもグレートさ。西海岸におけるベストなパンクスなんじゃないかな。ツアーに関われて嬉しかったぜ」

■KORROSIVEはどのようにして結成されたの?過去にやっていたバンドはありますか?

「KORROSIVEは元々Kyleと俺によるレコーディング・プロジェクトだったんだ。フィンランドのクラシックなハードコアに影響された曲を作るというアイデアがあってね。俺がヴォーカルとギター、Kyleはドラムを担当していた。この状態はベースにHenryを迎え入れるまでの一年弱、続いたんだ。俺たちのアン・オフィシャルな初のギグは、SYYOVATAVAというバンド名で行なわれた。"Corrosive"(※蝕む)をフィンランド語で言うとこうなるのさ。その年の後半になると、Kyleは東海岸に引っ越しちまったんだ。ベイ・エリアじゃ仕事も見つからないし、家賃も高いからってね。それで俺は長年の友人であるJeffyにドラムを頼んだ。Jeffyが加入してからの、俺たちの初のショーは2014年の9月15日、サンフランシスコで日本のPOIKKEUSとの共演だった。そしてこのラインナップで、デモ曲をレコーディングしたんだ。2015年の3月になるとKyleが再加入してきた。だけど今度はギターとしてね。俺たちは西海岸をAPPENDIX、MORPHEMEと一緒にツアーして廻り、それが終わるとすぐに6曲ほどレコーディングした。2曲は「The Kaaos B Sides」ソノシートに、4曲は7インチとして、2016年のはじめにDistort Reality Recordsからリリースされるぜ。それから2015年7月にはフィンランドで4回ほどギグをしたんだ。APPENDIXと一緒にね。フィンランド・ツアーは4人編成でやったんだけど、帰国後にKyleはまた東海岸に住むためバンドを抜けたから、俺たちはKevinをギターとして誘った。でもKyleがまた2015年9月に戻って来て、そしてT&BBとツアーをしたのさ。このツアーで初めてKORROSIVEは5人編成でプレイしたんだ。KORROSIVEのメンバー全員、もっと若かった頃に別のバンドをやっていて、俺はSIDE EFFECTSってバンドを長年やっていた。他のメンバーも俺も常に新しいプロジェクトに取り掛かっているぜ」

■そう、APPENDIXとスプリットをリリースしていますよね。あなたがAPPENDIXにオファーしたのですか?

「KORROSIVEがAPPENDIXと一緒に西海岸をツアーしたときに、俺たちが頼んだんだ。元々はレース・カット(※ソノシートのようなもの)の7インチでリリースして、KORROSIVEは新曲を2曲、APPENDIXは再録曲を2曲収録した。75枚プレスで、これは3回のショーで完売したよ。ツアーのあとには、このスプリットをテープで再発したんだ」

■「The Kaaos B Sides」はソノシートで出していますよね?ヴィニール、ソノシート、テープ、CD、MP3だと、どれが一番好きですか?

「レース・カットの次の段階として、俺たちはソノシートを選んだんだ。スカンジナビアへのツアーに向けて何か特別なことがしたかったし、ソノシートはレコード・コレクションするにしても、俺たちの作品カタログを飾る上でも、良い付加価値になると思ったのさ。個人的にはヴィニールかカセット・テープが好きだよ。MP3は外出先や新しいバンドをインターネットでチェックするにはいいけど、それほど興味



APPENDIX と KORROSIVE

はないな。CDなんかには一切興味がないね」

■"Isolation"という曲はかなりSHITLICKERSの"War System"っぽかったんですが、オマージュですか?やはり80年代のフィンランドとスウェーデンのハードコアから大きな影響を受けているのでしょうか?

「"Isolation"で"War System"を意識したってことはないな。"Isolation"はKAAOSの"Sun Valinta"のオマージュなんだ。KORROSIVEは様々なハードコア、その第一波から影響を受けている。UK82、アメリカン・ハードコア、初期スカンジナビア・ハードコア、そしてもちろんフィンランド・ハードコアからの影響は大きいよ。バンドで言うと、特にKAAOS、MELLAKKA、VARAUS、RIISTETYT、BASTARDS、DISARM、ULTRA VIOLENT、そしてDISCHARGEだね」

■では、クラシックなカリフォルニアのパンクはどうですか?BLACK FLAG、CIRCLE JERKS、DEAD KENNEDY'S、ADOLESCENTS、T.S.O.L.辺りは好きですか?

「そういったバンドがカリフォルニアのパンク・シーンを発展させるのに特別な役割を果たしたことは否定できない。だけど俺の好きなカリフォルニアの初期のバンドはCRUCIFIX、GERMS、ICONOCLAST、DIATRIBEだな」

■フィンランドでショーをやっていますよね。フィンランド・パンク・シーンを体験してみて、何か驚きはありましたか?

「そう!APPENDIXが連れて行ってくれたんだ。フィンランドで4回、スウェーデンで1回ショーをやったんだけど、APPENDIXのメンバーがすごくもてなしてくれたんだ。彼らは自宅に招いてくれて、家族にまで紹介してくれた。そして彼らの昔の姿を収めたパンクなフォト・アルバムを見せてくれたんだよ。RIISTETYTと共演したのも興奮したよ。Henryと俺はステージに招かれて、彼らと一緒に"Mieletöntä Väkivaltaa"を演奏したんだ。アルバム「Skitsofrenia」に入っている曲だよ。どのパンクスもみんないい奴らで、特にSOTATILAのJukkaと遊んだことや、Propaganda Recordsのオーナーと会えたのが嬉しかったな。Mika(APPENDIXのヴォーカル)は彼のホーム・スタジオに連れて行ってくれたし、Ahti(APPENDIXのギター)と一緒にフィンランドの田舎で数日を過ごせたのも良かった。彼の奥さんのTinaや、Tinaのお母さんが朝食を用意してくれて、川沿いの酪農場で食べたりしてね。ATV(四輪バギー)や馬に乗って、新鮮な牛乳を飲んだりと、それまでのツアーでは味わったことのない体験だった。APPENDIXのメンバーと彼らの家族は、俺が出会った人たちの中でも、最も親切で心の温かい人たちだったよ。それにストックホルムではPunx 44フェスにも出演したんだけど、みんな俺たちのサウンドを受け入れてくれた。ショーもイカれていたぜ。スウェーデンのみんなも良くしてくれたし、友達のAdamは郊外の湖へスイミングに連れて行ってくれたんだ。見渡す限りのスカンジナビアの空が美しかったな。いつの日か、絶対あそこに戻るつもりさ」

■KORROSIVEのメンバーは1984として日本でショーをしましたよね。Sothiraから誘いがあったのですか?

「俺はずっとCRUCIFIXの大ファンだし、以前にやっていたバンドではカヴァーもしていたんだ。何回かの練習を経て、Sothiraからの誘いがあってね。それから、「Dehumanization」リリースから30周年を記念したショーについて俺たちは話し始めたんだ。考えがまとまってきたので、Jimmyも参加することになり、そこにKORROSIVEのHenry、あとはNat



eが加わった。以前からお互いのことはベイ・エリアのシーンを通して知っていたし、一緒にやることによって素晴らしい化学反応が起こったんだ。そのアニバーサリー・ショーは2014年のManic Relapse Vol.2と、それから南カリフォルニア、そして日本で行なわれたのさ。

*R.I.P Drew Bernstein(CRUCIFIXのオリジナル・ツアー・ギタリストでLip Service Clothingのオーナー)」

■Shithammerはあなたのレーベルですか?

「Shithammerは自分のバンドをリリースするために始めたんだけど、テープやレコードをトレードしていくうちに、ディストロへと発展していった。Kyleが手伝ってくれるようになってからは、パッチやテープ、ヴィニールを多く手掛けるようになったよ。この数年で、APPENDIXやSIDE EFFECTS、SADIST、DERAS KRIG、ASPECTS OF WAR、SSYNDROM、PARADOX、KORROSIVEとかをリリースすることができた。今後のリリースもチェックしてくれよな!shithammer.bandcamp.com」

■このレーベル名の由来は?

「人生はクソ(shit)だし、世界もクソだ。生まれ落ちた瞬間から、俺たちは絶えず自分たちの墓にハンマーを叩き付けているんだよ」

■オークランド~カリフォルニアのシーンについても聞かせてください。

「数多くのスクワット・ハウスや倉庫の会場、ハウス・ショーなんかでこの都市は知られていたんだ。残念ながら今では減少してしまっている。追いやられて他の地域に移転せざるを得なかったりね。でも、経済的に転落してもオークランドとベイ・エリアのシーンは強固なままさ。パンク・カルチャーは何十年とこの都市に根づいているし、俺たちのコミュニティにはたくさんの人たちが関わっているからね。ここのパンク・シーンには多くの異なる年齢層とサブ・ジャンルが存在していて、バンドやギグ、パンクスが足りないってことはないね。チェックすべきバンドはRULETA RUSA、SSYNDROM、ISOTOPE、PIG DNA、TORSO、FEMMA COFFIN、MUTANT ITCH、FUNDAMENTAL、WAR TRIBE、REMNANTS、STINK WARDかな。ディストロやレーベル、ショップならMMM Discos、Dark Raids、Night Rider、East 7th Punks、Inciting Incident、Market Zero、他にも色々あるけどね。ベイ・エリア周辺のレコード屋ならThrill House、1234 Go!、Econo Jams。あとPDXのAseptic Zineは読んでおくべきさ」

■今後の予定は?

「KORROSIVEで日本ツアーかな!?年明けに4曲入りの7インチをDistort Reality Recordsからリリースして4月には西海岸をスウェーデンのCRUDE S.S.と、日本のKAFKAとツアーするんだ。5月にはMORPHEMEと東海岸のツアーもする。もっとレコードやテープを出して、ツアーして友達を作って良い時間を過ごしたいね!」

■最後に読者にメッセージをお願い!

「EL ZINEに載れて光栄だよ。カッパンクで出会った友人たちにも挨拶をしたいね。KatsutaにNori(LIFE)、Destroy Kappa、So Matsumoto、MayukaにSuda。それにNoriとT&BB、MinamiとPOIKKEUSのみんなにもね。そして、俺の"日本の兄弟"であるMotoと彼のバンド、KAFKAにも。俺と会ったりつるんだり、助けてくれたみんなにも、たくさんの愛と感謝を捧げるよ。

*世界は腐敗しまくっている。クソまみれだ。Never give in and always respect your self. Fuck the system, fight back!」



TOM AND BOOT BOYS

去年のアメリカ東海岸ツアーに続き、今年の9月には西海岸ツアーを敢行してきた我らがTOM AND BOOT BOYS!今回はツアーの詳細と、新たにリリースされた音源集について、メンバー全員:今村(Vo&Gu)、三好(Ba)、Taka-44(Dr)にお話しを伺ってきました!
アンダーグラウンドなパンク・シーンの中でも、特定のスタイルが流行ったり、また廃れたりもしますが、TOMは20年間頑なにTOMのまま。その"変わらない"姿勢こそが、最大の魅力なんじゃないのかなと改めて思った次第です。　[10月17日　新宿歌舞伎町かっぱ]

■ほんじゃ、まずは今回のツアーの経緯からお願いします。
今「去年、東海岸をやって、メンバーには"次は西海岸に行こう"って言ってたんだっけ?」
T「西からも結構呼ばれていて」
今「西の3、4人からオファーがあって。Pogo77をやっていると、西海岸へは結構ディストロで卸しているんですよ。常時200枚くらい。それで行かないのもアレですから、行ってみようと。今年の3月くらいからちゃんと動いて。(オーガナイザーを)"どの人にしようかな?"と思っていて」
三「悩んでいたもんね」
今「そう、結構大きなレーベルから(音源を)出しているバンドからも誘われたし、真ん中くらいのバンドとか、小さいバンドとか、色々あって、"どうしようかな?"と思っていて。それでいつも思っているのは、ヘッドライナーはTOMで、対バンは言い方は悪いですけど、小さなバンド。それでやりたいというのがTOMの考えなので。大きなフェスに出たりとかじゃなくてね。僕はそういうのは逆にNGなので。おこがましいけど、TOMで小さいバンドを注目させてあげられるような。且つ"誠実な方とやりたい"というのがあって、Mitchellくん(MUTANT ITCH/Dark Raids)をチョイスしたんです。Mitchellくんはここ3年くらいPogo77のディストロをしてくれてて、メール一通からでも誠実さが分かるから。彼からも"来ないか?"と誘われていたので、"君でお願いします"と」
■日程はどっちが主導で?
今「日程は、僕たちサラリーマン・パンクスなので(笑)。東海岸は2日だけライヴをやって、次の日に帰国したんですよ。これはさすがに、…ね」
T「しんどかったですよね、もうちょっとゆっくりしたかったし」
今「だから今回は、3回ライヴの1日オフで日程を組んでくれと頼んで。秋のシルバー・ウィークが2人は休みやすいから、飛行機代もそこまで高くなかったし。ちょい高いくらいで」
■やっぱり髪って黒くした方が、入国は安全なんですか?
今「どうなんだろう…。小心者だから黒にして

るけどあんまり関係ない気も最近したり」

T「スプレーで黒にして」

今「気持ち悪いでしょ?"あんた誰?"ってなる(笑)」

■そう、黒髪に違和感が(笑)。この写真は、とりあえず入国して一杯飲んで?



T「これは乗り換えの中国ですね。飛行機代が安いから、中国経由で。北京ですね」

今「Takaくんは中国でライヴやっているもんね。(メンバーだった)THE ERECTiONS.で。THE STAR CLUBと対バンしてて」

■へー!!

T「北京と上海で、面白かったですけどね」

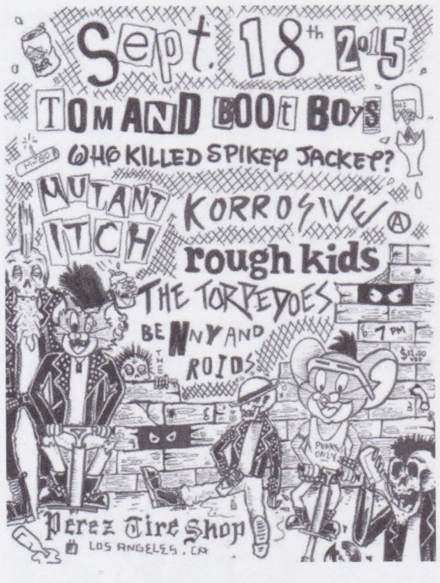
今「でもTHE ERECTiONS.のメンバーの誰も、THE STAR CLUBをあまり知らないっていう(笑)。Nakachin(THE ERECTiONS.)がちょっと知っているくらいで」

T「中国の人も、日本のバンドはあんまり知らない感じでしたね。知っていても俺ら系じゃないバンドで」

■ハイスタとか?

T「うん、そういうのは知ってたけど。今、来日しているSMZBのドラムがやってた別のバンドとは対バンしましたけどね」

■なるほど〜。ツアーなんですが、初日は野外?



三「タイヤ屋さんのガレージで」

今「聞いたら、友達がそこで働いてて、オーナーがパンクスに優しいってことで解放してくれたみたい。500〜600人は入る広さで」



T「お客さんがパンパンでしたよ」

今「そう、でもステージが小さいの」

T「それは元々ステージじゃなくて、アンプを置くスペースで。他のバンドはステージのない場所でやっていたけど(TOMはステージ上でやって)」

今「人がグワー!って来ちゃって、演奏にならなくて」

三「人が押し寄せ過ぎて立っていられないくらい。けど初日が一番ポゴ系のパンクスが来ていて」



■(当初予定していた)WHO KILLED SPIKEY JACKET?は出なかったんですよね。

今「代わりにSYMPTOMが出たんだけど。キャンセルになった理由は、バンド内でトラブルがあって、ベースのElieとドラムのMarkが辞めちゃったから。でもその2人はツアーに来ていましたけどね、それは嬉しかったです。SYMPTOMはMarkがドラムを叩いていて。(出演するのも)ツアー開始の2日前に決まったみたいで。わざわざボストンから来てくれて」

三好「Elieは何もやっていないのに来たのが偉かったよね」

■物販で売っているこのレコードは何ですか?



※「Stupid And Naked〜」の再発盤でした

今「東海岸でもそうでしたけど、僕はイヤらしいから、ツアーに合わせてリリースを集中させるんですよ。向こうのオーガナイザーにちょっとでもお返しになるように、プラス、リリースすれば注目が集まるから、ツアーの宣伝になるし。今回は3つか4つ同時にリリースして」

■TOMの音源集とWKSJ?とのスプリット、MUTANT ITCHとのスプリット?

今「あとTOMのEP「Stupid And Naked Punks Are Running In My House」がソールド・アウトなので、その再発を。僕たちは曲が短いので、全部一枚の7インチに入っちゃうんですけど(笑)、それをバラして出しました。3つのレーベルから出ていて、まずはMUTANT ITCHのMitchellくんのDark Raids。それに東海岸のときにも60枚限定とかで出してくれたHuman Double Face。(主宰者の)Richardはマニアックなオッサンで、100枚以下の少数プレスが好きな人で。あと、すごいレコード・コレクターの人がやっているFear Of War。イタリアとかUKとか、超マニアックな作品を再プレスする人。何故かそこにTOMが混ざっている(笑)。その3人が出してくれて。で、Richardが40歳で、彼が今回のツアーの大ボス。Mitchellくんが実行部隊みたいな感じで。僕はMitchellくんにオファーしたけど、彼は22〜23歳くらいで若いので、相談役としてまとめるのがRichard。あと、WKSJ?とのスプリットにはTHE STAR CLUBの"Ha"(のカヴァー)を入れました(笑)。ヒカゲさんにも許可をもらって。"Ha"はジャスラックを通っていなかったみたいで、"いいよ"って。2人はTHE STAR CLUBをあまり知らないけど、僕がやりたくて。"Ha"はハードコア・パンクな曲だから、TOMでもできるかなって。日本語で初めて歌いました(笑)」

三「日本語に聞こえないけどね(笑)」

今「MUTANT ITCHとのスプリットはまだ出ていないんですけど、テスト・プレス盤を30枚だったかな?先に販売して。何故かと言うと、プレスにまわしても今、レコードの工場がすごく混んでいるから、早くて4ヵ月、普通で6ヵ月くらいかかるんですよね。それで間に合わなくて、テスト・プレスを先に出して。もうちょいしたら正式にリリースされると思うんですけど。僕が日本で250枚流して、アメリカでも250枚という感じで」

■分かりました。で、初日が終わって。この写真は2日目の朝、誰かのお母さんですか?

今「これはMitchellくんの家で、彼のお母さん。フレズノに移動して」

■2日目も野外?これは入り待ちというか、列ができている状態?

T「そうです、普段はスケート・パークで。お昼くらいから始まって。でもド田舎で周りには何もなくて」



今「今日はちゃんと演奏ができるぞ!って思っていたんだけど…」

三「ここでやりたいな!っていう場所だったよね」

今「ツアーの3ヶ所のうち、メインっぽく考えていたんだと思う。Mitchellくんの地元だし」

■今村さん、取材を受けていますけど、これは何かテレビとかの?



三「ラジオじゃないの?」

T「ネットの番組じゃないのかな」

今「僕も何だか分からないけど。自己紹介したくらいで、詳しいことを聞かれたわけじゃないですよ」

■対バンですが、このバンドは?


POGO VOMIT

今「これはPOGO VOMIT。2人は好きそうだね、典型的な90年代のポゴ・パンクで。TシャツもTHE EJECTEDだし」

三「(THE EJECTEDの)"East End Kids"をやっていたよね」

今「もうさすがに飽きたけど(笑)。"曲を変えてよ"って」

T「俺らもやりましたけどね、初日に(笑)」


Mitchellくんのお母さん↑


↑入り待ちのお客さん

今「え、やったっけ?」

一同「(笑)」

■この女の子がヴォーカルのバンドは?


CLASS SYSTEM

今「このバンドは女の子ヴォーカルのOi!だったよね。CLASS SYSTEM。色々いいバンドもいましたけどね。SSYNDROMはヴォーカルが格好良いスパイキーで昔のGBHとかCONFLICTみたいな髪型。年齢を聞いたらやっぱり僕と同じくらいで、オールド・スタイルでしたね。EELとかも出ていて」

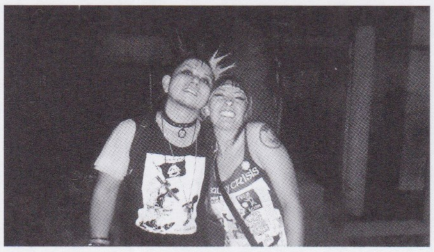
■CHAOS TRIBEってバンドは?

今「ノイズコアだけど、STAGNATIONに近いのかな〜。ノイズコアだけど、もっとノイズみたいな。どのバンドも物販をちゃんと並べていたけど、みんなデモ・テープで、CDRは1バンドくらいかな。1/50とか、ナンバリングしていて。"50本でナンバリングって…"と思いますけどね(笑)。流行っているんでしょうね、なんせナンバリング。MUTANT ITCHも1stテープの3rdエディションが出ていて、(ナンバリングが)1/9とか。9本だよ、やりすぎ感があるよね、意味が分からない(笑)。話しはズレますけど、アメリカのパンクスは本当にCDを買わない。THE ERECTiONS.(のCD)はアメリカに流したのは10枚とかだし」

■何でですかね?日本だけですよね、CD買うの。

今「日本も10年後は変わると思いますけどね。やっぱりCDは安く作れるっていうのが、アレなんですかね、分かんないけど。でもデジタル・ダウンロードはアメリカでは出るんですよね」

■この子はバンドの人ですか?REALITY CRISISのTシャツ着て、LAUGHIN' NOSEの刺青してますけど。



今「あー、EELのスタッフの子ですね。バンドやっているのかな、分かんないですけど。ツアー中ずっといたよね」

■そうして2日目が終了して?



T「いや、途中で警察が来ちゃって、急遽撤収して。それで土壇場で違う場所を決めて。小屋みたいな」

■それでこの写真だと屋根があるんですね。



今「TOMとKORROSIVEとEELは広い会場から撤収して。"結局、俺たちは狭いところか…"って(笑)」

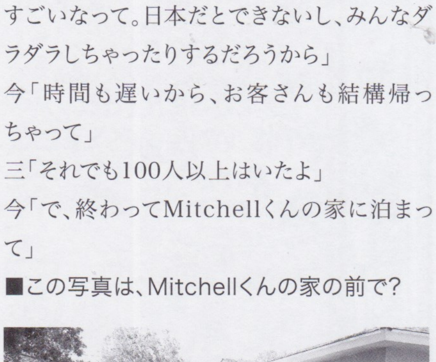
T「緊急事態でも、すぐに対応してくれたのがすごいなって。日本だとできないし、みんなダラダラしちゃったりするだろうから」

今「時間も遅いから、お客さんも結構帰っちゃって」

三「それでも100人以上はいたよ」

今「で、終わってMitchellくんの家に泊まって」

■この写真は、Mitchellくんの家の前で?



今「彼のお父さんとお母さんが本当にいい人で。僕のウンコまみれのズボンも洗ってくれたし」

■漏らしたんですか(笑)。

今「1日目ですよ」

三「1日目、俺とTakaはMitchellの家で寝たんだけど、(今村さんは)Elieの車の中で寝てたんだよね」

今「男4人で寝ていて。3回漏らして。お腹が痛くなっちゃって。アメリカってトイレないから、道でしたり。まぁ、余談ですけど」

三「Elieが"ちょっと臭かった…"って言ってた」

■(笑)。じゃあ、3日目に。このバンドは?




SYMPTOM


WAR TRIBE

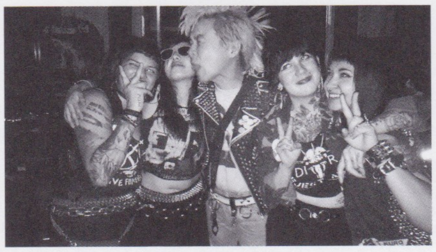

KORROSIVE

今「これがSYMPTOM。1stリリースの頃はいわゆるクラストだけど、今のサウンドはメタル・クラストでしたね。Markのドラムがパンクなので、メタル・クラストだけどパンクスでもいける音だと思います」

T「こっちのバンドはWAR TRIBEといって、メチャクチャ格好良かったですね。ハードなOi!パンクで。ドラムが女の子でヴォーカルだけスキンヘッド。こっちがKORROSIVE」

■で、これがMUTANT ITCHと。あとはご機嫌な今村さん(笑)。


MUTANT ITCH



今「楽しかったね〜。でも全員彼氏いるけどね。カリフォルニアは10代の頃にTOMを聴いてた人がそのまま生き残って、20代後半とか30代になってて。そんなお客さんが多かったですね」

■三好さんも抱っこして(笑)。



三「あ!俺、Elieを抱っこしたんだ(笑)」

今「三好くんはこういう人柄だから。みんなと仲良くできて、はしゃげる人だからね」

■これはライヴ後の打ち上げ、パーティーみたいな?



今「3日目のライヴが終わって、誰かの家でホーム・パーティーみたいな。40人くらいいたかな。何時間か経って、家の女の子が"もういい加減帰ってくれ"ってなって、解散になった」

T「俺が思ったのは、そういうときも"うん、分かった"ってすぐに帰るのが偉いなって。日本だとダラダラする人が絶対いるじゃないですか」

■そして翌朝?



今「これはKORROSIVEのヴォーカルのChrisの家の前か」

■最終日は観光?

今「元々、遊園地に行く予定だったのが月曜日でお休みで。結局、サンフランシスコに遊びに連れて行ってもらって」

■街に行って海岸に行って?





今「みんなで遊んで。(海で)三好くんが入っちゃいけないところに入って行って。すごい高い崖とかを登っていたよね。僕とTakaはそれを見ていて。三好くんは元気に、楽しそうにしていたよね。"うらやましいよ、その性格が"っ

て思ったよ」

■今村さんは独りで体育座りしてましたよね。



今「もうお父さん無理って(笑)」

T「そういう場面は至るところでありました」

今「そうだな、"みんなが楽しければいいかな"って。この何十人の中で、僕が一番年上ですからね。企画側にいるから、ツアーが無事に終わるまで、みんなが楽しんでくれればいいなと見ていましたよ。…なんて、僕っぽくないですけどね」

三「今回感じたのは、地道なPogo77のディストロというか…。PISTOL JOKEのTシャツを着ていたら、知っている人が結構多かったから」

今「僕が(アメリカにディストロで)100本くらい流したからね」

三「それで知っている人が多いってのがすごいよね」

T「地道な活動が実を結んでいるというか。TOMとは関係ないけど、Pogo77でやっていることが実を結んでいるのかなって。いいバンドを紹介しているのが評価されているのかなって」

今「マメなディストリビューションって大事だなって思いますよ。アンダーグラウンドの人ってパンクを辞めないから。チャラチャラってした人は聴くのをすぐ辞めちゃうけど、アングラでちゃんとやっていれば長く残っていくから」

■では、ツアーの一番の思い出を。

三「全体的に良かったけど、最終日に海辺で遊んだのが楽しかったなって」

今「そこかよ(笑)」

T「感じたことは、若い人たちのパワーがすごいなって。一緒に廻ってくれた人たちも俺たちより若くて、そういう人たちが主導になっていっぱい動いてくれて。"やるぞ!"ってなったときに、みんなでバッ!っとやるのがすごいなって感じましたね。日本だと、文化の違いとか人の違いがあるから難しいのかもしれないけど。日本も頑張らなくちゃいけないなと思いました」

■Takaさんはお酒を飲まないから、酔ってダラダラしている人を見ると腹が立つんじゃないですか?

T「それもありますけど」

今「僕、よく怒られているもん(笑)」

T「酔っぱらっているはずでも、頑張っている姿がすごいなって。好きなことに、すごく頑張るのが伝わってきた」

今「僕は地味な意見ですけど、一緒に廻ってくれたバンドとも付き合いが古いから、初めて会えたのも良かったし。Mitchellくんが22〜23歳なのに、"よくやるなー"って。あの頃の僕は、"ドランク・パンク!"ってセックスしまくってましたからね、レーベルはあんまりやらないで。だから、あんなによくやれるなって。Mitchellくんとは今後10年、20年と付き合っていくだろうなって思いましたね。ライヴは初日が面白かったですね。有名なバンドも出ないのに500〜600人も来てくれて。TOMがもうちょっと、ちゃんと演奏できればな…、というのが心残りでしたね」

T「あれはやれる状況じゃなかった」

今「もうトイレがすごいんだもん。僕が"ウンチ!ウンチ!"ってなっているときに、500人以上が来ているのにトイレが一個だけだよ。中は真っ暗でドアを開けたら異臭が酷くて。足を踏み入れると、"ビチャッ!ビチャッ!"って。でもウンチしたいから、ズボンをおろしたら床がもうビチャビチャなの」

一同「(笑)」

今「鍵はかからないし、僕がしていたら女の子が入ってきて、"キャー!"って(笑)。次の日の朝、掃除が大変だったろうなって、それが一番の思い出かな(笑)」

■ちなみに、西海岸と東海岸の違いは感じましたか?

三「NYは結構、東京に雰囲気が似ていて。派手な人は少ないし黒い格好の人が多い」

今「クレイジーじゃない、ちゃんと文化としてパンクを聴く人が多いのかなって。ボストンだとまた違ってクレイジーだけど。で、カリフォルニアは人が若いし、辞めても無限にドンドン湧いてくる感じ。残る人は残るし。NYは東京で、カリフォルニアはクレイジー。(日本からだと)東海岸より西海岸のほうが近いし、ボストンには友達も多いけど、西がいいなって。気候も暖かいし、やりやすいよね」

■鋲ジャン率も高いですよね。

今「ポゴ・パンクの第三次(ブーム)ですからね。90年代初期に第一次があって、2000年代に第二次があって。今が第三次。D-Beatが減ってきて。周期があるから、パンクの中でも流行り廃りがあって。単純なビートに戻ってきているバンドが多い」

■ちょっと音源集の話しもしましょうか。まずはDark Raidsから出て。

今「それはツアーに合わせて。さっきも言ったけどツアーを派手にしたいから、リリースを集中させて。Dark Raidsから、ここ10年間のTOMの完全コンプリートをテープで出させてもらって。Pogo77から出すのは、イヤらしいんだけど録り直した"Too Drunk To Play"を1曲追加して」

■それはいつぐらいに?

今「11月下旬に出したいんだけど、(デザインを担当している)Takaくんどう?」

T「頑張ります」

今「僕が出したかったのもあるけど、Takaくんと三好くんが入って10年くらいだから、記念というか。あとPogo77のカタログ・ナンバーが77になるんですよ。やっぱり77はTOMが良かったんで。タイミング的にもね。…まぁ、実際は77がTOMになるよう見計らっていましたけどね(笑)。77で違うバンドじゃ変だしね。20代の頃から、Pogo77の77はTOMを出すんだって言っていましたから」

■しかし、カタログ・ナンバーがまさか本当に77まで行くとは…。

今「昔は思わなかったですよ。あのドランク・パンクスのセックス・パンクスだったのが」

三「でも、今でもセックス・パンクスだよね(笑)」

今「CDのあとにLPも出すんですけど、LPは時間がかかるので。海外プレスでのんびり出そうかなと。CDの半年後くらいに」

■Pogo77からLPって初めてですよね?

今「何故かと言うと、(レーベル直販だと)送料無料じゃないですか。だけど2000円とかにはしたくないし…、とかね。梱包も大変だし、躊躇していたけど、TOMなら出そうかなと。だからSoくん(HARDCORE SURVIVES)とか、"LPをよく出すな〜"って見てますけどね」

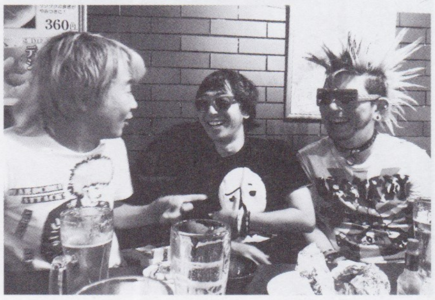
■最後に、2016年のTOMの抱負を。

今「疲れたよ、もう僕たち。ちょっとやり過ぎたから…。どうですか、Takaくん?」

T「何をどうするとかじゃなくて、いつものTOMをやれればいいと思います。いつも通りのことを、いつも通りにやるのが大事だと思います」

三「結果的に何だか忙しくなりそうだけどね」

今「20年前に見たお客さんが今のTOMを見ても、"TOMって変わらないな"って思ってくれたら良いと思います。それだけですね、変わらないでいたいです」





脳不安

釧路パンク・ロック 1981

TEXT:東　陽一

メンバーそれぞれバンドに対する想いや感想は当然違うと思いますが、それを踏まえた上で、あくまでも私の個人目線で記させて頂きます。

1981年釧路市、パンク・バンド脳不安のヴォーカル小元孝裕(タッカ)は私の1つ上のいとこ。小さい頃から遊んでいた2人ですが、住んでいる町が違った為それほど頻繁に会う事は出来ませんでした。それでも身内の付き合い等がある時にはじっちゃん・ばっちゃんの家で会う事が出来ました。2人でいると何をやっても楽しく、身内からは「あんた達2人はいつもニヤニヤしているわね」と言われたものです。確かに、幼少期からの楽しかった事を振り返るとほとんどがタッカと一緒です。

何事にも興味を抱き研究熱心だった私達は、小学生の頃お互い大きくなったり小さくなったりするチンコを見せ合い触り合い(!)ながら「チンコってなんなんだべな」と話し合ったなんて事もありました(笑)。

ある日、探検ごっこで発見したプラスチック製の野菜のミニチュアの裏面に付いている磁石をカッターナイフで取ろうとしていた時の事。ナイフが野菜のミニチュアから外れタッカの手をスッパリ切り裂き大量の血液が飛び出したのです。私の着ていた服にも血液は飛び散り、私は驚きで一言も発する事が出来ませんでしたが、タッカはお母さんに包帯を巻いてもらっている最中も、病院に向かう車内でもなぜか笑っていました。あの時の笑いについて、いつか聞いてみたいと思っていましたが、いまだ聞く事が出来ないままです。

そんな関係(どんな関係?笑)の私達でしたが、お互い住んでいる町が離れているという理由から中学時代の3年間は殆ど会う機会がありませんでした。

当時の私は、大貫憲章氏がディスク・ジョッキーを務めていたNHKのラジオ番組「若いこだま」やその他のラジオ番組から聴こえてくるパンク・ロックにすっかり夢中になり、「RAMONES・RICHARD HELL・PISTOLS・DAMNED…。早く家に帰ってパンク・ロックが聴きたい」。毎日毎日そう思いながら過ごしていました。

その後高校に進学、1年生の冬休みには久々にタッカが遊びに来ました。1981年1月、その時私は15歳の高校1年生。相変わらずパンク漬けの状態。私より1つ年上のタッカは高校2年生のはずでしたが、1度受験に失敗し、私と同じ高校1年生。さらに私の家から2〜3キロ離れているところに、一人で下宿暮らししている事を知り、「釧路に居るのなら、これからはちょくちょく遊びに行くよ」とワクワクする私。しかし私以上にワクワクしたのはタッカの様で、私が中学1〜2年の頃から買い集めていた、パンクのレコードを手に取りジックリ眺めてから「ヨイチ(小さい頃からタッカは私の事をヨウイチではなくヨイチと呼んでいた)パンク聴いてんだぁ〜、これどんなのよ?聴いてもいい?」と999やLURKERS等たくさんのレコードを1枚1枚興味深そうに聴き入っていました。そんな中、SAINTSの1stアルバムを聴きながら「すげぇ!すげぇ!」とタッカが何度も言うので、「ふふっ…そうだろ、こんなにすごいパンクのレコード持ってる俺ってスゴイだろ」と少し良い気分になっていると、タッカが「コイツの右手すげぇデケェ!」とクリス・ベイリーを指さしたのです。その右手、見てみると確かにデカイ。隣の人の1.5倍はあろうかと思われる彼の右手を見ながら私達は「野球のグローブはいてんじゃね?」とか「畳、何枚持てるべな?」なんて言いながらゲラゲラ笑った事を今でも覚えています。元々、歌謡曲〜ロックまで幅広く聴いていたタッカですが、通っていた高校が音楽活動に積極的だったという環境もあり、ポップス〜パンクまで幅広く興味を持った様です。それに比べ私の通っていた高校は釧路市内でも1番ランクが低く、生徒は

普通の不良学生が過半数を占め、音楽活動とは無縁の環境の中、一人ポツンとアタマの中だけでパンクの世界を広げていました。

しばらくして、その年の5月、タッカから突然電話が入ります。内容は、高校受験失敗後に通っていた予備校でロックを好きな友達と知り合い一緒にバンドを始めた事。さらに「実はベースがちょっと合わないからヨイチ、ベースやってくれないか。次の練習の日にちと曲はまたあとで連絡するわ」というものでした。タッカは、冬休みに遊びに来た時、私がお年玉を貯めてベースを購入していたのをシッカリ見ていたのです。電話を切った後、「これって、釧路で初めてのバンドなのかなぁ。でも自分がやるならパンクしかやりたくない。ベースかぁ、持っているだけで触った事ないな…。それに音を出す所(スタジオ)なんてあるのかなぁ…」等々一人で色々考えました。この頃の私はNHKと11PMで観たRAMONESに魅了され、ジョニー・ラモーン風の長髪にライダースの革ジャンを着込み、一人RAMONES気分を満喫していました。

バンドに参加する不安とタッカの下宿に行ってみたいという興味から、数日後タッカの下宿に行き2回程スタジオに入った時のテープを聴かせてもらいました。「むむっ…、結構上手い(汗)」。ただ、その中にAEROSMITHの曲もあったので「パンクじゃないならやらない」と伝えました。もちろんAEROSMITHが嫌いだったという訳ではありません。むしろ好きでしたが、心の中では「俺、こんな難しい曲弾けねぇ…」というのが本音。その後、すぐにタッカから、PILやCLASH、PISTOLS等のパンクのみの選曲という知らせと同時に、"あせってナイフ"(オリジナル曲)のテープを渡されました。そして釧路にもバンドがある事と練習スタジオの場所を教えてもらい、さらに「スタジオ入りは1週間後だから」と伝えられました。

「あと1週間か…」。それまで伸ばしていたジョニー・ラモーン風の長髪をシド・ヴィシャス風に切り準備万端。「これでパンク・ロックが出来る」と思い、当日スタジオに入りました。が…当然弾ける訳がありません。ちゃんとコピーしていないのですから。どこを押さえたら良いのかも分からず、さらには、チューニングすら出来ない始末、練習スタジオであるべきところがベース教室になっていました。つまり私は肝心のベースの練習がおろそかになっていたのです。当然、ドラムにリズムを合わせる事も出来ません。「俺、何しに来たんだっけ?だめだな、こりゃ」と思いましたが、その時初顔合わせのギターの沼沢は「まぁ、次までにちゃんと覚えてくれば良いんでか」と言ってくれ、さらにドラムの内藤も「俺もリズムが狂うからね」なんてかばってくれました。特にタッカからは「ヨイチ良かったぞ」なんて言ってもらい「良い人達だぁ」と思い、それからの私は、ある程度は弾ける様になりたいと思い一生懸命ベースを練習しました。

ここでメンバー紹介を少々。ギターの沼沢満とは練習スタジオで初めて会いました。当時沼沢は17歳(?)の高校2年生。タッカが同じ予備校で知り合った男。ギターを背中に背負ってバイクでスタジオに到着した沼沢はとても同じ高2には見えず、こっそりタッカに「あの人なんの仕事してんのよ?」と聞いた程です。さらに、しばらくすると、今度は自動車を運転してスタジオに来たり、私の家まで遊びに来ていた事から、今でも一体アイツは何歳なのか、一体なんなのか、さっぱり分かりません。だけど、幅広い音楽を聴いてきてそれらを吸収してきた沼沢のギターは最初から本当に凄かったと思います。ただし、これは沼沢という男と一緒にバンドで曲作りの作業をしていないと分からないかもしれません。リリースされた7インチの録音も素晴らしいですが、7インチに比べ約1.5倍フリーキーさを増す練習スタジオでの沼沢のギター。あんなのはパンク/ニューウェーブ/オルタナ等ジャンルに関わらず、私の知る限りどんなレコードでも聴いた事がありません。当時、沼沢のギターを「キチガイが笑っている様な音」と称した人がいましたが、「上手いことを言うなぁ」と今更ながら感心します。

ドラムの内藤研一も練習スタジオで初めて会いました。タッカと同じ高校に通う17歳の高校3年生。沼沢とは家が近所で幼なじみ。人懐こく性格の良い内藤は、ドラムという立場だけでなく、バンドの人間関係形成においても重要な位置にいたと思います。特に脳不安は曲作りの現場ではドラムに対する要望がとても多いバンドだったので、内藤の技術だけでなく性格そのものがサウンドを支えていたとも言えます。

前記の通りヴォーカルの小元孝裕/タッカは私のいとこで高校2年の17歳。ユーモア溢れる会話が魅力ですが、沼沢と絡むと周りから「ついて行けない」と陰で言われる程ブッ飛んでいる時もありましたし、お互い冗談を言いあっているうちに、どちらかがカチンときてちょっとしたケンカになる時もありました(笑)。ライヴではステージ度胸もあり、バンドのフロントマンとして本当に素晴らしい存在でした。同じ血が流れているからなのか、私とはモノの捉え方考え方、さらに面白い事面白くない事がとてもよく似ていたので、バンドや身内の話をしても、2人の間で意見が食い違う事はまずありませんでした。

当時、メンバーが共通して聴いていたのは、国内盤でリリースされるパンク/ニューウェーブ周辺のレコードが中心でしたが、強く印象に残っているのは国内発売されたばかりのラフ・トレード関連の作品です。個人的には、NHK-FMの番組で芹沢のえさんが静かで落ち着いた口調で"そっ"と紹介されていた、ラフ・トレード関連の音源を聴いた事がきっかけです。どの作品も刺激的でしたが、特にPOP GROUPのベースには衝撃を受けました。STRANGLERSのジャン・ジャック・バーネルと同等に、私は強く影響を受けました。同時期リリースされたラフ・トレードのコンピレーション・アルバム「Clear Cut」は今でもたまに聴きたくなる私の人生にとってとても大切な1枚。JOSEF KやGIRLS AT OUR BEST、DELTA 5にTHIS HEAT…もう、間違いなく私個人の殿堂入りです。当時、私達は日本のバンドはあまり聴いていませんでしたが、そんな中メンバー全員好きだったのが、日曜朝のコンテスト番組で見たSKINです。デビュー・アルバム「SKINLESS-SKIN」、そしてセカンド・アルバム「ZUN ZUN」。彼らの2枚のアルバムは今聴いても十分聴き入る事が出来るし、当時のあの頃の気持ちに戻してくれる大切な宝物です。

また、今振り返ると当時音楽雑誌に掲載されていたパンクの人達のインタヴュー記事からは生きる為の大切な事を学びました。シドみたいに前向きのつもりがマイナスの方向に向かっていたというタイプもありましたが、私の基本的なパンク精神はSTRANGLERSのメンバーの一言一句を読み取り、自分なりにまとめていました。今になって当時のノートを読み返すと本当に恥ずかしいくらい自分勝手





脳不安

な解釈ですが、「まず、どんな自分になりたいか、どんな人生にしたいか、を決めてから好きな事をやる、すると行動はおのずとその方向に向かっていく。じゃないと、その時その時、好きな事、面白い事をやっていたら、どこかで"あれ?俺の人生ってこんなはずだったっけ?"と思うような場所に自分の身を置いてしまう事になる。ダメになっていくのがパンクではない、自分の人生をいかに良いものにしていくかがパンク的行動。そして図太いほど自分らしく自分の人生を生きる事」と受け止めていました。今年50歳になった私ですが、果たしてその教えの効果が出ているのかどうかは分かりませんが、自信も経験も無いにも関わらず、34年経過した脳不安の音源をリリースしてしまうあきらめの悪い自分を作ってくれたのは、間違いなく当時音楽雑誌に掲載されていたSTRANGLERSのメンバー達のインタヴュー記事からの(悪い?笑)影響なのです。



　脳不安のライヴ活動は確か月1回のペースでした。1981年、まだまだパンクが珍しかった頃ですから、人気は別にして地元釧路では多少話題になっていたと思います。当時、ただ単にステージに立つ機会を得るという目的だけで脳不安はヤマハ主催のコンテストに出場しました。驚く事に脳不安は釧路大会を無事通過(!)。数週間後には全道大会で札幌まで行きました。結果は全国大会出場とはなりませんでしたが、後でヤマハの人から聞いたのは「ステージ上から客席に向かってマイク・スタンドを蹴飛ばしたのが悪かった。それでも審査員の小倉エージさんは一押しだった。あれが無かったら脳不安は間違いなく全国大会に行けたのに…」という話でした。当時は「あ、そうなんだ」程度でした。だって、マイク・スタンドごとマイクを客席に蹴飛ばしたのは私ですから、弁解のしようも、後悔のしようもありません。でも今は、他のメンバーの気持ちを考えるととても申し訳なく思うし、私自身とても残念です。

　そんな脳不安、当時はメンバーから女の子とデートをしたとか、彼女が出来たといった女性に関する話は一切聞いた事がありませんでした。たまに、酒を飲んでいる時にタッカから気になる女の子がいるといった話を聞かされる程度で、ただひたすら4人の男達が日々ニヤニヤ・ケタケタ笑いながらも真面目に音楽を作っていたバンドだったと思います。

　ここまでの記述では、メンバー全員ノンビリした感じに受け止められるかもしれませんが、心の中には常に不満や苛立ちが充満していました。ある夏の日の午後、タッカの下宿に遊びに行っていると、外から若い男女のカップルらしい2人の楽しそうな会話や笑い声が聞こえてきたのです。お察しの方もいらっしゃるかもしれませんが、もうそれが面白くないのです。今では「なんも、そんな事で…」と思いますが、当時はそういうのもシャクに触ったのです。「バカカップル野郎が…」、どちらともなくそんな会話を交わし、タッカが愛用していたマランツの大型ラジカセにKILLING JOKEの2ndアルバムをセットし、窓を開けバカカップルのいる方向にスピーカーを向ける。「よし、セット完了だ」。あとはヴォリュームを最大にし…スイッチ・オン！数分後…「ビーコーズ!!」、誰も求めていない空間に向かってKILLING JOKEが大音量で叫びます。「ざまあみろ」。窓枠の下に低く身をかがめた私達は、まるで土のうに隠れる陸軍兵士の様な姿勢で曲が終わるのを待ちます。曲が終わりそーっと外を見ると、バカカップルの姿はありません。「おぉ…」。敵を撤退させ平和を手にした私達は、ようやく冷静さを取り戻しました。脳不安の初期衝動の源には、もしかしたら女性に対するフラストレーションもあったのかもしれません(笑)。

　前記した様に、私の通っていた高校は市内でも1番の不良高校でした。脳不安当時、私は2年生でしたがライヴの日程が決まると、告知の為3年生の教室まで行かなければなりませんでした。その日も、何かの用事で3年生の教室に行き、いつも話をしている女子を教室の中から呼んでもらおうと廊下で声をかけた女子の顔を見てビックリしました。SLITSのギターにそっくりなのです(当時は本気でそう思っていた)!それ以来、私の心はSLITS女子のモノ、休み時間の度に会いに行っていました。しかし、厳しい上下関係の風習に加え、2年のくせに3年の女子に会いに来ている。しかも一般的な不良学生から見ると得体の知れないジャンルだった私はすっかり先輩男子から嫌われてしまい、女子と廊下で話していても、どこからともなくモノを投げつけられたりと散々でした。それでもSLITS女子に会いに行っていた、冬の寒いある日の事、小柄な先輩男子がニコニコしながら私に話しかけてきました。その先輩男子は岸本さんと言いました。

岸本さん「パンク・バンドやってるんだって?」
私「はい」
岸本さん「そうなんだ、日本のバンドも聴いてるの?」
私「東京ロッカーズとかは少し聴いてますが、外人が多いです」
岸本さん「STALINって知ってる?」
私「いえ、知りません。なんです、それ?」
岸本さん「日本のパンク・バンドで東京ロッカーズとは全然違う感じなんだ。今まで何回か東京まで観に行ってるんだけど凄いよ。こないだ、観に行った時は急に中止になっちゃって、代わりに(STALINの)フィルム・コンサートやったんだけど、それも凄く面白かった。今度一緒に行かない?」
私「(心の中で、"うわぁ〜この人面白いなぁ〜")」
岸本さん「ギターの奴なんか、もぅ2曲目くらいでギター1本ぶっ壊すんだ。ベースはカッコ良い」
私「2曲目で、ギターを壊す??で、その後は??」
岸本さん「また、どっかで壊す時もある。でも、あのバンドのヴォーカルの存在感は本当に凄いよ。すっ裸になるんだ」
私「…でも、ちゃんと演奏してるんですか?なんか、あんまり音楽的じゃない感じがするけど…」
岸本さん「うん、曲もまぁまぁ良いんだ…。で



FOMO=FAVEL



も、キミ、物を投げつけられたり、なんかSTALINのヴォーカルみたいだね(笑)」

この時の会話がキッカケとなりSTALINという名前のバンドを知る事となった私は、それ以降ショッキングなバンドとしてSTALINが掲載されている雑誌等を目にする度、「あ、岸本さんが言ってたバンドだ！」と興味深く見入っていました。今思うとアノ高校で、私以外にもパンク愛聴者が存在していたという驚きとその方に出会えた事に微笑ましい気持ちになると同時に、思い出すたび「録音したテープを貸してもらえば良かったな…」とかなり後悔させられます。今、私は岸本さんにとても会いたいです。

当時、脳不安がよくライヴをやっていたのはミルクキャンディーというライヴハウス。私とタッカは平日でもその気になれば片道1時間掛けて歩きながらミルクキャンディーに行き、厨房でドリンクや料理を作っていた高橋カツヒロさんのところに直行し、下がってきた食べ残しの食料や飲み残しの酒を頂きながら、高橋さんの仕事が終わるのを待つ。そして、仕事が終わると高橋さんの車に乗り込み夜のドライブを楽しんでいました。私より5〜6歳年上の高橋さんは元々ベース・プレイヤーとして音楽の世界に身を置いていた人で、ジャンルに関係なく「自分の好きなモノを好きなだけ聴く、そして弾く」という人でした。その高橋さんが1981年の夏、市内のデパートの最上階にあるフリーマーケットの一画を借り、パンク/ニューウェーブ/オルタナ等のレコードのみ扱うレコード店『AZ(アズ)』を始めました。ひょっとすると脳不安の活動を身近で感じ、宝島に掲載されていたCRASSのインタヴュー記事等を読むうちに、自分も何かしたいという衝動に駆られたのかもしれません。『AZ』の準備期間中、「ヨイチ！良いの入ったぞ！」とTHROBBING GRISTLEの「HEATHEN EARTH」を小脇に抱えサッソウと私の家にやって来た高橋さんは「部屋の明かりを消して真っ暗にして聴くべ」と提案。目を開けても閉じても真っ暗闇の中で聴いた「HEATHEN EARTH」は衝撃的で、「今のパンクはコレなのかもしれない…」と思った程です。

『AZ』の店内には前衛的なBGMが鳴り響き、数々のパンクのレコードや斬新なDUBアルバムに加え、前記したTHROBBING GRISTLEの数々の作品、VANITY RECORDSやBRIAN BRAIN、さらには当時の釧路では本当に珍しかったREMA REMAやWHITE HOUSE等々刺激的なレコードがビシッと並んでおり、学校帰りに立ち寄った際には、お店にポツンと独りたたずむ高橋さんから「今日はヨイチが初めてのお客だよ、ありがとう」なんて言われ居心地が良く、たまに店番を頼まれた時には快く引き受け、店頭に置いてあった阿木譲さん刊行のROCK MAGAZINEに付属されているソノシートを勝手に剥ぎ取り、一人でツラッとして聴いていてもなんの後ろめたさも感じない程自由な空間でした(汗)。しかし、時が経つにつれ、『AZ』はザワザワと人の集まるお店になり、「釧路にもこんなにパンク/オルタナ系の音楽を聴くヤツがいたのか？」と思う程。そこでは新しくバンドを始める者や男女交際を始めるバカども(笑)等々、様々な交流があった様です。『AZ』のスタートの頃にはほぼ毎日顔を出していた私ですが、そうなってくるとなぜか居心地が悪くなり、ピタッと足を運ばなくなるのも脳不安のメンバーなのです。

さて、オリジナル曲も増え充実した活動をしていた脳不安ですが、1981年12月、メンバーでブラブラと町の中を歩いていたある日の事。ちょうど橋の真ん中あたりで、ギターの沼沢から「個人的にも音楽的にも方向性が変化しているのでバンドを抜ける」との話がありました。私は、「脳不安の基本の沼沢がいないんだったら、それは脳不安じゃないから」と解散の道を選ぶ事を伝えました。当然、他のメンバーも同じ考え。そして、翌年の1982年2月、脳不安は解散しました。

1982年4月、沼沢が抜けた後の私達3人は「ギターがいないならいないで仕方ない。これはこれで面白いかも」と、特に新しいギターを探す事もせず、新たなバンドをスタートします。バンド名は『オープン・ザ・アヌス』(笑)。音はPILの「Metal Box」に近い感じで、個人的には結構気に入っていたのですがタッカはギターの加入を希望。しかし、ギターを探している間にドラムの内藤も仕事との兼ね合いからバンドを続けづらい状況になったらしく辞めるとの事。その後、P-MODELやLIZARDのコピー・バンドをやっていたギターの錦織邦永(17歳・高校3年)と辞めた内藤研一の弟の内藤ヒロユキ(16歳・高校2年)をドラムに迎え同年6月『FOMO=FAVEL』として活動開始。ちょっと不思議なバンド名ですが、元は"創る人"という意味のHOMO FABERにタッカがヒネリを加えたモノです。初期の頃は、"ドラムが軸になり、それにベースが絡んで感情を作る、その感情をギターが表現する。ただしコードをかき鳴らす事だけは禁止。ヴォーカルは自由に。あまり周りを気にせず、自分達で考えながら自分達の音楽を作っていく"という感じでした。また、元々レコードや音源の記録好きだった私は、雑誌でピナコテカ・レコード等自主製作盤の世界がある事を知ったのをキッカケに「自分のバンドもレコードで聴きたい」という欲求が湧き、レコードを作る事も計画していました。タッカとも「ライヴで聴いてもらった後、家に帰っても聴きたくなる様なバンドにしたいよな」と話していた事から、タッカも大賛成でした。しかしそのレコード作りも、いざ進めようとするとどこに連絡して良いのか分からず、結局は1歩も前に進まないまま諦めるしかありませんでした。それでも、録音を続けていくうちに46分テープ1本収まる位の曲が揃ったので、カセットテープを製作する事にしました。丁度その頃、錦織と同じ高校で『AZ』にも出入りしていた飯田克明という男が錦織を通じ、タッカの下宿に遊びに来る様になっていました。パンク/ニューウェーブに異常な関心を持ち、「俺、実は脳不安のライヴも観ていたのさぁ〜」と話すこの男。前髪がペタリとおでこに張り付き一見不気味でもある。そんな、彼の家はタッカの下宿から歩いて30分位の所にあり、2階に位置する彼の部屋はとても広く過ごしやすかったので、私達の方から遊びに行く機会がどんどん増えていきました。そして、何より理解のあるご家族が良かった。私は飯田家の素朴なおばあちゃん、職人オーラ全開のお父さん、お酒が大好きなお母さん、そしてかなりの霊感の持ち主と噂される(実際凄い！汗)妹さんが大好きでした。そして、タッカはそんな飯田を「マネージャーにしようか！」と提案してきました。理由は、基本的に良い奴だし一緒に居て楽しい、そして今後録音〜テープ作りを控えているという事に加え、FOMO=FAVELのメンバーの中には、脳不安の頃の沼沢の様に各方面と打合せを出来る者がおらず、ライヴの打合せをしても関係者とトラブルになってしまい活動に支障が出始めていたからです。私は何の迷いもなくタッカ

の提案通り飯田にマネージャーをお願いする事に賛成しました。実際、飯田が関わる様になってからは、各方面との打合せもスムーズに進んでいた様ですし、心配していたテープ作りもスムーズでした。飯田はアルファベットの小さなスタンプを利用しながらジャケットを作り、さらにダビング作業については、飯田の妹さんが所有していた高速でダビング出来るダブル・カセットのラジカセを使わせてもらい作業してくれました。おかげでテープ作りは無事完了!今、振り返ると、飯田克明だけでなく彼のご家族全員に感謝です。そんな、身軽で交渉力もある飯田が、ある日の学校帰り、私の家に遊びに来ました。初めは普通に話をしていたのですが、よくよく見ると飯田の髪型があまりにも普通だったので思い切ってモヒカンにする事にしました。完成後ビミョーな表情を浮かべていた飯田ですが、「似合うよ!似合う!似合う!」と言われているうちにダンディーなポーズで薄ら笑いを浮かべる飯田に笑いが止まりませんでした。その日はそのままバスで帰った飯田ですが、次の日学校に着くなりすぐに先生に呼ばれ坊主にさせられた事を聞いた私は、とても残念な気持ちになりました。

あの頃の私達は、マンション(下宿)で一人暮らしをするタッカの部屋で多くの時間を過ごしました。タッカの部屋はマンションの2階にあり、階段を上る途中に設けられている部屋の窓を"パンパン"と叩くと、少し間を置き、若干不安そうな表情で"そーっ"と窓を開けたタッカがこちらを確認し、「よぉ〜」と少し小さめの声で歓迎してくれたのです。私はよく「警察におびえてるみたいだもな」と笑ってましたが、それがタッカの部屋に遊びに行く時のルールでした。ある日の夜、私と飯田はいつもの様にタッカの部屋に集まり、3人でお金を出し合いサッポロ・ビール大瓶2ℓを買って飲んでいました。飲んでいる時は良かったのですが、飯田が「さっきのおつり」と言いながら"ジャラッ"とポケットから取り出した小銭を3人で分けようとした瞬間、明らかに他の小銭とは違う、鈍く、光り輝かない、不気味なオーラを放つ5円玉を見つけたのです。「げっ!飯田!お前これ人焼いた時のお金だべや!」。タッカが少し大きめの声で言いました。そうです、確かに数枚の小銭の中に1枚だけ、火葬の時に人と一緒に燃やした5円玉が入っていたのです。「飯田!お前これ持ってけよ!俺、いらねぇからな!」。誰よりも怖がりなタッカは、強い口調で飯田に言います。「お前!絶対置いていくなよ!お前のなんだから絶対持ってけよ!絶対だぞ!」。あまりにも強い口調に飯田も、「俺はただお釣りを受け取っただけなのに…でも、まぁ、わかったよ…」みたいな感じになり、安心したタッカは5円玉の事を忘れ大好きなビールを飲みながら皆と楽しい時間を過ごしました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、すでに真夜中。私と飯田は明日の学校の事も考慮しタッカの部屋を出て、それぞれの家に戻りました。それから2〜3日経ち、再び3人でタッカの部屋に集まった時の事。いつもの様にビールを飲みながら話していると、タッカが「ヨイチ、こないだあの後戻ってきたか?」と聞いてきました。私は心当たりがないので「戻ってない」と返答。続いて飯田に「お前、あの後戻ってきたか?」と聞くが「いや」とそっけない返答。私が「なした?」と聞くと、「いやぁ、あの日2人帰った後寝ていたら、窓を"パンパン"って叩く音がしたから2人が戻ってきたのかと思って窓開けたんだけど、誰も居ないから変だなぁと思ってよ。それが何回も続いたからイタズラかと思って、ちょっとアタマにきてたんだよな」との事。何の話なのか分からない私と、なんか変だなと思っているタッカ。すると、ちょうどタッカと私の中間に座っていた飯田の方から"ククククク…"という笑い声が聞こえてきました。「なによ、飯田」。タッカが尋ねます。それでも飯田は"クククク"と笑うだけ。さすがにタッカも飯田の不気味な笑い声から、今話しているこないだの不思議な出来事について「この男は何か知っている」と感づき、「飯田!お前、こないだの5円玉どうした」と疑った口調で聞きますが、飯田は何も答えません。「なぁ、どうしたって!」。徐々に口調は強くなりますが、何度聞かれても飯田は簡単に答えようとはしません。「飯田!おい!お前!」。ますます口調の強くなるタッカの本気具合を察したのか、ニヤニヤしながらも渋々と「実は…」と言いながらおもむろに中腰で立ち上がり、タッカのベッドの枕元に置かれていた、タッカお気に入りの赤い車のプラモデルを手に取り、4つ付いているタイヤの中から1つをグイッと外しました。するとどうでしょう、もう関わる事が無いと思っていた5円玉が不気味な存在感を放ちながら外れたタイヤと一緒にポロンと床に転がり落ちました。クルンクルン回る5円玉。「げっ!飯田、てめぇ!それ、どうしたのよ!おい、早く拾え!拾えってば!」。もはや、こんな不気味な5円玉に触れるのは飯田しかいません。「早く拾えって!」を連呼するタッカと渋々5円玉を拾う飯田。そうです、あの日、飯田は5円玉を持って帰らず私達がトイレに行ったりしているスキをみて、ソッとプラモデルのタイヤを外し、タイヤの取付部分に5円玉をはめ込み、それを隠す様に外側からタイヤを取り付けていたのです。その後、先日の不思議な現象を「多分、このお金返してもらいたくて取りに来たんでないか」と困惑した表情を浮かべながらも楽しそうに語る飯田を「うるせー、もうその話すんな」と怒るタッカ。今、思い出しても笑える本当に楽しい思い出です。

FOMO=FAVELの活動期、釧路には「ジャンルなんて気にせず音楽を楽しもう!釧路の音楽好き集まれ!」といった、まるで安物の大福の様にただ甘ったるいだけのスローガンを掲げ「釧路の音楽シーンは俺達が中心」と言わんばかりの連中がいました。当時の私は(今も?笑)お手手つないでみたいなノリでニコニコしながら楽しそうにバンドをやっている連中が大嫌いだったので、酒を飲んでは「釧路にシーンなんて無いんだ。あんなもん、ただのサークル活動だべや」と、グダまく私の話を「俺に言うなや、ヨイチ〜」と少し笑いながらタッカは聞いてくれたものです。もちろんパンク・バンドは私達しか存在せず、他のバンドとの交流など一切ありませんでした。ただし、ここまで記した後では大変お恥ずかしい話になりますが、実はFOMO=FAVELの初ライヴはこのサークル主催のイヴェントでした(汗)。打合せの際、偉そうな態度で一言目からお金の話をしてくる、腐れサークル共(当時、私は心の中でこう呼んでいた・笑)に敵意を覚えた私は、翌日タッカに「なんか、アイツら面白くねぇ。ニヤニヤしたお祭り気分も気にくわねぇ」。さらに「俺たちの出る日は8月15日。終戦記念日にそんな事(イヴェント)やってて良いのか?祭り気分で浮かれてるアホ共の頭の上に爆弾落としてやっか」と提案。ライヴ当日、その日の為に用意した「8月15日」という曲を必殺技の如く最後に披露し意気揚々と引き揚げる私達に、「良かったです」と声をかけてくれたのは、なんと腐れサークル共(!)。「なんか、ヨイチ言ってた話と違うんでか?」とビミョーな表情のタッカ。私は、まるで効果の無い毒エサをドブネズミに与え逆に太らせてしまった様な、妙に損した気分になったのです…。

私達は当時TAPE-1、TAPE-2と2本のテープを作りました。どちらも基になるマスター・テープは私が作りましたが、それを渡し


FOMO=FAVEL



た後の作業は全て飯田がやってくれました。つい最近、友人の家に遊びに行った際TAPE-1を見せてもらったら、中からタッカ手書きの歌詞カードが出てきたのには驚きました。確かに当時タッカから、「2〜3枚手書きで書いてみたけど面倒くさくなってあとはコピーした」という様な話を聞いた覚えはありますが、見たのは初めてだったので本当に驚きました。TAPE-1は1982年10月にスタジオに入り2マイクで録音した後、私の部屋でコーラス等を加えた音源を中心に私が編集したものを、翌月の11月に販売。TAPE-2は翌年1983年1月、録音スタジオに入り4トラックで録音〜ミックスダウンしたものをそのまま翌月2月に販売しました。どちらも何本作られ何本販売されたのか私には分かりませんが、そんなに多くは無かったはずです。

そして1983年3月、メンバーの就職や進学もありFOMO=FAVELは解散しました。

1991年。私は「最近のパンクってどう思う?今、俺達がパンクだと思う音楽を素直にやろうか」とタッカに持ちかけ、昔からの仲間を集めて木端微塵を結成しました。その時、私が26歳でタッカが27歳。木端微塵はロックを基本としながらも、パンクの匂いを残し、タッカの書く詞は時代背景も鑑みますます深みを増していきました。活動期間中に10曲録音しましたが、私はそのテープを聴く度、「俺が知らないだけかもしれないけど、こんな感じのバンドって他で聴いた事無いよなぁ」といつも思います。バンドは1993年1月まで続きましたが、途中の停止期間を除くと実際の活動期間は約1年半位だったと思います。周囲からの評価も上々でそれなりに手応えのある活動でしたが、このバンドでの残念な思い出は、後半タッカがある人物からの言葉に惑わされ私との関係が悪化した事です。どんな話を聞かされたのか詳しい内容までは分かりませんが、私の事を良く思わない人からの話をそのまま受けとめたタッカがどんどん私から離れていきました。そんな事に嫌気をさした私はバンドを辞め、同時にバンドは解散。その後、タッカと会う事は無く、たとえどこかで会っても話をする事はありませんでした。

しかし、それから数年経過した夏の夜、突然タッカから「久しぶりに会わないか」という連絡がありました。私には断る理由などありませんし、心の底では嬉しいのですから当然すぐに会いました。そこでタッカは「ヨイチ、ごめんな。俺、○○○の話をまともに聞いて、ヨイチの事悪く思ってた。でも最近気づいたんだ、○○○から聞いてた話が作り話でヨイチは本当はそんなんじゃないって」と正直に言ってくれました。でも、その話を聞いた私は「ふ〜ん」というそっけない返事を繰り返しました。本当は勇気を持って全てを話してくれたタッカの気持ちがとても嬉しかったのに。そして、そんな心のわだかまりを解こうとしない私の態度にタッカは「もう元の様には戻れないんだな」と感じたんだと思います。そして、私はこの時の自分の態度をとても後悔する事になります。

結局、タッカと会話を交わしたのはこの時が最後。

2003年8月。突然タッカが亡くなったのです。

葬儀会場に入ると、そこには極普通に祭壇が用意されていました。何度か参列した事のある極普通の葬儀会場。ただ、今まで身内の葬儀の時には必ず姿を見せていたタッカの姿が無い事を除けば。葬儀が始まるまでの待ち時間、「故人がお好きだった曲を流します」というアナウンスの後、流れてきたのはPILの"Death Disco(Swan Lake)"と"Public Image"でした…。タッカの大好きだったジョン・ライドンの「Good-Bye」で曲は締められました。静寂が覆い尽くしシーンとする会場の中で、私は次から次へと出てくる涙を止める事が出来ませんでした。「タッカ、最後に凄いライヴやったな。しかも、大好きなジョン・ライドンに見送ってもらうなんて凄いんでか」。そう心で言いました。そして、いつまでも泣き止まない私を周囲の人は心配してくれました。

葬儀は立ち止まる事無く粛々と進みました。言い方を変えるとリズミカルでもあります。死者は自身の葬儀を行う事は出来ない。つまり自らをあの世に導く事は出来ない。それを出来るのは生きている人間だけ。人は死者を葬る為に生きている。それが、何百万年もの間、途切れる事無く人が存在し続けてきた理由なのだろうか。

葬儀後、奥さんからBGMの件を聞いたら「会場側から故人の気に入っていた曲を…」という要望があり、「それでは」とタッカの車から取り出したCDがたまたまPILだったそうです。私は「タッカ、最後に車で聴いていたのが石川ひとみでなくて良かったね」と少し意地悪に心でつぶやきました。

2012年、久しぶりの飯田からの電話に「よぉ〜」と軽快に出る私。しかし、飯田からの一言目に驚きます。

「錦織が死んだ」

その後、いろいろ聞かされたはずだけど、何を聞いたのか、それについて何て答えたのか覚えていません。ただ、その時「錦織、お前どうしたのよ。何があったのよ」と思った事だけは今も生々しく覚えています。

同年、古くからお付合いさせて頂いているNAT Recordsさんから「FOMO=FAVELをリリースしませんか?」という驚くお誘いを受けました。数年前、ご紹介の気持ち程度で送付させて頂いたCD-Rを聴いて下さっていたのです。初めは、正直半信半疑だった私ですが、何度かご連絡を頂くうちに徐々にその気になり計画を進める事になりました。当初はFOMO=FAVEL+脳不安のカップリングCDの予定でしたが、丁度その頃NAT Recordsさんの20周年と重なり、私も存じ上げていたレーベルHEAVY METAL SUPER STAR(HMSS)さんより、NAT Records 20周年記念盤として「FOMO=FAVEL KUSIRO CITY PUNK ROCK DEMOS 1982-1983」を2014年8月に7"でリリースして頂きました。長年夢見た自分達のバンドのレコードを受け取った日は、嬉しさのあまり職場から真っ直ぐ家に帰る気になれず、生前タッカとよく酒を飲み交わした居酒屋にフラリと立ち寄



FOMO=FAVEL

り、一人で飲みました。「タッカ、錦織、30年以上前の俺達が夢見た俺達のレコードがやっと完成したぞ」。たくさんの写真が掲載された素晴らしいジャケットを見ながら飲んでいると、不思議と一人で飲んでる気がしませんでした。「次々メンバーが減っていく中で、自分が残されているという事はこういう事なのかな」と考えていると、メンバーから「ヨイチよくやった!俺達はヨイチにこういう事をやって欲しいんだ。だってそれは、そっちの世界に残ってるヨイチにしか出来ないべや!」と言われている様な気がしました。

FOMO=FAVELのリリース前後、FOMO=FAVELの音源整理をしていると大量に脳不安のテープが出てきました。「そういえば、脳不安ってちゃんと聴いてなかったな」と思い数本聴きました。私は脳不安を、普通のパンクをやっていたバンドと思っていたのですが、30年以上経過し自分が関わっていた意識も希薄になっている中で改めて聴いた脳不安は、他のパンク・バンドとはかなり違っていました。溢れんばかりの初期衝動を抱えながらも、新しい何かを作りだそうという意識が強く感じられとても新鮮でした。私自身、パンクのレコードをコレクションしている事もあり、ここ数年は再発盤や編集盤で世界各国秘蔵のパンク音源を聴く機会に恵まれていましたが、脳不安みたいなモノは聴いた事がありませんでした。「今、脳不安を聴いてもらいたい」と思いリリースする事に決めました。音源の選択・音量音質の調整・ジャケットのデザイン・盤の仕様、そして資金繰り等を一人で提案模索しながらの製作は大変かつ不安でしたが、製作上特に注意したのは、出来るだけメッセージ性を排除するという事でした。脳不安の雰囲気が伝わる写真と音と歌詞。今、やってるバンドではないのですから「1981年釧路市にこんなパンク・バンドがありました」という事だけで良いのです。ジャケットのデザインについても「いかにも」というパンクっぽさは出来るだけ避け、どれだけ脳不安というバンドを過不足なくレコードに詰め込めるかという事だけを考えました。そして、2015年7月「NO FUN　1981　脳不安　7"　45回転　4曲入り　クリア・ヴィニール　限定250枚」を無事リリースする事が出来ました。実はこの7"には黒盤・黒ジャケというビールの宣伝みたいな(笑)仕様のモノが60枚存在します。その黒盤は販売とは関係なく、先にプレスし当時の関係者にお渡ししようと思っていたのですが、それだとクリア・ヴィニールのプレスが遅れ発売日がタッカの命日に間に合わないという事になり、急遽プレスの順序を変更しました。発売後、黒盤は出来上がってきたのですが、関係者の多くがすでにクリア・ヴィニールを所持していた為NAT Recordsさんにお願いし数枚店頭で取り扱って頂きました。

A-1.あせってナイフ　1981年6月
ヤマハ　2ライン録音
A-2.パブリック・イメージ　1981年6月
ヤマハ　2ライン録音
B-1.だめ　1981年12月
スタジオ・ティーボーン　2マイク録音
B-2.プリティ・ヴェイカント　1981年8月
ヤマハ　2マイク録音

脳不安のリリース後、多くの方からFOMO=FAVELのリリースを求められました。特に地元釧路にいる当時の友人・関係者の多くが、昨年リリースされた7"を入手出来なかった為、何度か要望がありました。そこで保存していた音源の中から5曲厳選し「FOMO=FAVEL　悪魔の報酬　1982　7"　33回転　5曲入り　限定200枚」をリリースする事にしました。制作にあたり注意すべき点は脳不安と同じでしたが、FOMO=FAVELに関してはバンドのイメージ・カラーであった紫をメインに組み立てました。

A-1.悪魔の報酬　1982年10月
スタジオ・キャッツBスタジオ　2マイク録音
A-2.アボリッシュ　1983年1月
スタジオ・キャッツAスタジオ　ライン録音　4トラック
A-3.リズム　1982年8月
サウンド・ハウス　ライン録音　2トラック
B-1.クレイジー・ビート・ノイズ　1982年8月
サウンド・ハウス　ライン録音　2トラック
B-2.ラヴ・ジュース　1982年8月
サウンド・ハウス　ライン録音　2トラック

2015年。今でも、私は年に数回タッカのお墓参りに行きます。それは、決して決めている訳ではなく、気まぐれ半分です。お墓は高台にあり、お墓に眠るのはタッカ一人、本人は寂しいのかもしれませんが、タッカにはノンビリした一人暮らしが似合います。それで良いのです。天気の良い日には青く輝く空が頭上一面に広がり、ピリッとする程空気は澄み、そこは不思議なくらい音がしない。たまに聞こえるのはピチピチ聞こえる鳥のさえずりくらいのもの。そこでタッカが好きだったエビス・ビールをグイッと一口だけ飲む。

故人と接するのは心地よい。お願いごとも後悔の念も、こちらの全てを何も言わず受け止めてくれる気がするから。自分勝手な解釈の上に成り立つ関係である事を理解しながらも、その時ばかりは謙虚な気持ちで、この世には決して存在しない優しさに触れ、その優しさに心を抱いてもらう。でも足りない。その足りなさを埋める為に何度も何度も繰り返しお墓に来るが、やっぱり足りない。足りるわけが無い。

錦織のお墓にはまだ手を合わせていない。場所が北海道では無いというのが大きな理由。職人気質のアイツの性格を思うと、ちゃんと世の中を見て冷静に判断さえしていれば、もっと違った人生があったのにと思う。

沼沢は基本的に優しい。口は悪いが悪意はない。いつどこで会っても沼沢だ。だからホッとする。私は社会に出てから、自分がどんな笑い方をして、どんなモノの考え方をしていたのかも分からなくなるくらい周りに振り回されて不安定な時期があった。そんな時沼沢に会ったらとたんに自分が蘇ってきた。そして不思議と沼沢からは何を言われても平気だ。私の周りで亡くなっている仲間が多い事をからかい、「死神アズマの周りで次は誰が死ぬんだべな」と言われても冗談だと分かる(ひょっとして本気だったりして・汗)。今でもギターを愛す沼沢が近年発表したプライベート作品「月下」は素晴らしい。30年以上経過した今でも神経質で緊張感溢れる沼沢のギターはジャンルを超えて健在。さらに腕前も上達しているからますます手に負えない。厄介なヤツだ(笑)。

マネージャー的存在だった飯田克明は現在、下北沢第二休憩所というバーをやっている。私も、一度行った事があるが、お店の雰囲気が高校時代遊びに行っていた頃のアイツの部屋そのものだったのには驚いた。なので、ここは一つ、宣伝の意を込め「料理もなかなか、さらには、お客さんも良し」と記しておこう(笑)。

私の中では消息不明な内藤兄弟は元気だろうか。どこでどうしているのだろう。また当時のたくさんの友人達はどうしているのだろうか。

私は、今も変わらずここ釧路に住んでいる。まるで皆の帰りを待つ様にね。

そういえば、タッカの最後の詞もこう締めくくられている。

「七色に変わる空、花は一面に、海賊にでもなったつもりで歩き回る。俺はいつでもここにいるよ…」

最後まで読んで下さった方々に感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

メキシコのMASACRE 68(vol.19掲載)に続き、NYのメキシカン・パンクス:Luisがまたヤッてくれました!今度は何と80's スパニッシュ・パンクの至宝、ESKORBUTOのインタヴューです!…スゴイな、Luisのコネクション(汗)。というわけで、Luisによるバイオグラフィーと、ESKORBUTOのオリジナル・メンバーにして唯一の生存者である、ドラマーのPakoへのレアなインタヴューをお楽しみくださいませ!

BIOGRAPHY

ESKORBUTOはサントゥルツィ(スペイン/バスク国の自治体)出身のパンク・バンドだ。結成されたのは1980年のこと。彼らはスペインやラテン・アメリカのパンク・シーンに最も影響を与えたバンドの一つである。

バスク国のサントゥルツィは、鋼鉄工場や左翼派のプロレタ、そしてネルビオン川でも有名な土地である。そして、YosuとJuanmaが出会った場所でもある。音楽に夢中になっていた彼らは、THE DOORS、THE WHO、THE ROLLING STONES、THE RAMONES、NEW YORK DOLLSといったバンドから多大なる影響を受けていた。幾度にも及ぶ対話を経て彼らはバンドの結成を決意する。

ある日、2人がパブでバンド名をどうするか話していた際に、ZARAMAのヴォーカリストのRoberto Mosoは突然彼らにこう言ったのだ。「お前らってビョーキっぽいから、"Eskorbuto(壊血病/※ビタミンC不足で起こる病気)"って名前がピッタリだよ」。彼らはお互いを見やり、「そいつは最高だ。"Eskorbuto"、完璧だね」と言ったのだった。彼らはドラマーを見つける必要があったのだが、その後すぐにPakoと出会うことになる。

最初のショーは学校で、10歳の子供たちを前にして行なわれた。1982年の8月、彼らは1stデモのディストリビューションとインディペンデントなレコード・レーベルを探すために、初めてマドリッドの地を訪れた。そしてこのときに、1stシングル「Mucha policía, poca diversión」をリリースすることになるSpansuls Recordsと彼らは知り合ったのである。

1983年の夏、彼らは新しい音源を片手にマドリッドへと戻ってきたのだが、突如、彼らの人生を変える出来事が起こった。反テロリスト法によって、逮捕されたのだ。彼らに対する支援の声がスペイン全土から届いた。しかし、バスク国から声が挙がることはなかった。このことは、決して消えることのない傷跡を彼らに残したのだった。

失望した彼らは"A la mierda el Pais Vasco"(バスク国、地獄へ落ちろ)という曲を書いた。その曲にプラス3曲を収録した音源は、R.I.Pとのミニ・スプリット「Zona Especial Norte」として発表された。

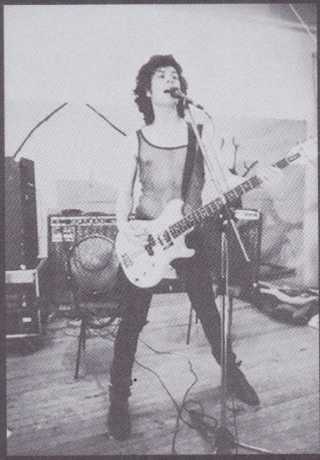
1985年、レコード・レーベルのTwinsが彼らの1st LP「Eskizofrenia」をリリース。このアルバムからは、真にイカれたパンクのエナジーを感じ取ることができるだろう。

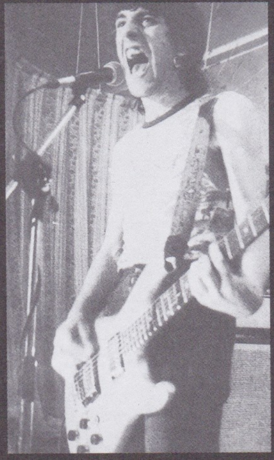
この頃、Jose Mari BlascoはRadical Basque Rockを考案し、また、Soñuaというレーベルを設立した。彼はLA POLLA RECORDSやBARRICADA、HEDZAINAKなどといったバンドのレコーディングを始めると、ESKORBUTOにも加わるよう声をかけた。ESKORBUTOは歓迎されていたのだが、彼らはその誘いを拒絶した。その後、ESKORBUTOはラジオや新聞で検閲の対象となる。そして誰からもショーに誘われなくなるのだが、その間、彼らは新曲や新譜の製作に取り組んでいたのだった。

Soñuaからのオファーを拒否した後も、彼らはインディペンデンスであり続けた。1986年になると、無謀にも彼らはその一年の間に3枚のアルバムをレコーディングすることを請け負った。



TEXT&INTERVIEWED:Luis







このとき、彼らが選んだレーベルはDiscos Suicidasだった。そして25時間で2ndアルバム「Anti-Todo」(Anti-Everything)を録音。このアルバムで彼らは自分たちのアティテュードを示したのだ。その後にはカセット・テープ「Ya no quedan más cojones, Eskorbuto a las elecciones」をリリース。このテープは大いに受け入れられ、あっという間に完売した。1986年の終わりには、もう一つのサプライズを彼らは用意していた。スペインではそれまで誰もしたことのなかった、ライヴ・レコーディングである。サントゥルツィの大学でESKORBUTOは一時間以上にも渡る演奏をし、その結果、ダブルLP「Impuesto Revolucionario」が誕生したのであった。

その後の1987年、彼らにはもう一つ、大望していたプロジェクトがあった。Discos Suicidasから更に別のダブルLPを発表しようとしたのだ。それは「Los demenciales chicos acelerados」というタイトルで、彼らがキーボードを導入した初めての作品になった。このアルバムはよりカオティックでスロー・テンポになったが、同時に怒りに満ち溢れていた。

1988年、彼らは自分たちの手で次のアルバムの流通を行なうべく、自主レーベル(BUTO ESKOR)を立ち上げる。しかしアルバム「Las más macabras de las vidas」のレコーディング時、Juanmaは病気で入院していた。そのため、このアルバムではYosuが曲のほとんどで演奏している。そしてアルバム発表後、YosuとJuanmaの健康状態は悪化の一途をたどる。ヘロイン中毒が深刻度を増していたのだ。

1991年、彼らはメキシコで2回ショーを行なってほしいとの誘いを受ける。しかし、彼らは練習すらままならない状態、しかもショーの2日前にはYosuが入院してしまう。彼の代理はIñaki Speedが務めることになった。彼らがメキシコに到着すると、4000人以上もの人たちが彼らの演奏を待ちわびていた。こんなにもメキシコ、ラテン・アメリカで知られていたとは、メンバー自身にわかに信じられなかった。

しかし、スペインに帰国すると、彼らを気にかける者などどこにもいなかった。

Matraka Diskakが新しいアルバムのレコーディングをオファーしてきた。「Degeneracion」(Degeneration)というタイトルにしようとしたのだが、レコーディングが終盤に差し掛かると、タイトルは「Demasiados Enemigos」(too many enemies)へと変更された。このレコードで彼らは原点回帰したと言えるだろう。"No quiero cambiar"(I don't want to change)や"La mejor banda del mundo"(The best band in the world)といったタイトルの曲がこのアルバムには収録されている。

リリース(1992年5月)から数ヶ月後、ギタリストにしてESKORBUTOの中心人物だったYosuが死んだ。

JuanmaとPakoはバンドを続けることを決意し、新しいレコードに取り掛かるが、運命は、仲の良い2人の友人を離ればなれにはしたくなかったようだ。Yosuの死から5ヶ月、Juanmaが死んだ。彼らはいつも一緒だった、そしてこれからも。Pakoは、彼とJuanmaで作った曲を収録したアルバム「Akí no keda ni Dios」、それから「Kalaña」や「Dekadencia」といった作品も発表するのだが、それはまた、別の物語。

DISCOGRAPHY

- ・Primeros ensayos デモ・テープ (1982)
- ・Mucha policía, poca diversión シングル (Spansuls, 1983)
- ・Jodiéndolo todo デモ・テープ (1983)
- ・Zona Especial Norte スプリットLP with R.I.P (Spansuls, 1984)
- ・Eskizofrenia アルバム (Twins, 1985)
- ・Anti-Todo アルバム (Discos Suicidas, 1986)
- ・Ya no quedan más cojones, Eskorbuto a las elecciones テープ (Discos Suicidas, 1986)
- ・Impuesto Revolucionario ライヴ・レコーディング・ダブルLP (DRO, 1986)
- ・Los demenciales chicos acelerados ダブルLP (Discos Suicidas, 1987/Twins, 1988)
- ・Las más macabras de las vidas アルバム (Buto Eskor, 1988)
- ・Demasiados Enemigos アルバム (Matraka Diskak, 1991)
- ・Akí no keda ni Dios アルバム (Basati Diskak, 1994)
- ・Kalaña アルバム (Discos Suicidas, 1996)
- ・Dekadencia アルバム (Surco, 1998)

INTERVIEW

■最近はどんな活動をしていたの?

「バンドのメンバーが死んだあとに、3枚のアルバムをレコーディングした。「Akí no keda ni Dios」(1994年)、「Kalaña」(1996年)、「Dekadencia」(1998年)だ。「Censurados」(Censored)というシングルも2015年の終わりには出るだろうな。他のレコードのために、まだ12発(曲)ほど抱えているぜ」

■70年代後半のバスク国での生活はどんなものだった?

「あの頃は、独裁政治から民主主義への移行期間だったな。俺たちは若かった。ロックンロールを聴いて、働いて、目一杯に楽しんで、そして俺はドラムを叩いていた。14歳の頃から楽器を触っていた。今じゃ俺も59歳だ。でも時々だが今でも演奏しているよ…」

■ESKORBUTOの初期の頃について、どんなことを覚えているか聞かせてほしい。

「俺たちの初期なんて困難まみれだったが、同時に多くの期待もあった。あの頃は曲を作るのなんて容易にできたしな。俺たちの曲はいつだって、俺たちの生活や俺たちの親の生活のようにロウだった。労働者階級から生み出されたものだったんだよ」

■初めての音源を発表するのは大変だった?

「ESKORBUTOにしてみると、みんなが邪魔をしようとしているようなものだった。何であろうとね。だけど誰一人として俺たちの理想と闘争を止めることはできなかった。俺たちは闘い続けたんだ。たとえ一人になったとしても。1stシングル「Mucha policía, poca diversión」(Too many cops, not enough fun)はマドリッドに住んでいた共産党の支持者がリリースしてくれたんだ。それがSpansuls Recordsで、1983年のことだ」



■リリースのためのレーベルをマドリッドで探していたのに、君たちはどうして拘留されたんだい?

「当時、警察は俺たちの行動を妨げたり、しょっちゅう探しまわったりしていた。たしか一日で3、4回は警察に止められたな。あの日、マドリッドのレーベルに聴かせるため、俺たちはESKORBUTOのテープを何本か持っていた。黒い革ジャンにチェーンとかだったから、俺たちの見た目は普通じゃなかった。その、俺たちの格好がよろしくなかったみたいでね。警察は"Maldito pais"(Damned country)や"ETA"(Basque country and freedom)、"Escupe la bandera"(Spit on the flag)、"Iros a la mierda"(Go to hell)なんてタイトルが書かれたテープを見つけると、警察管区へと俺たちを連行し、そこで何回かテープを聴いていた。俺たちは別の警察管区へと移送され、反テロリスト法に抵触した罪で逮捕されたんだ。36時間ほど拘留されたが、共産党の弁護士、Cristina Almeidaのおかげで釈放された」

■R.I.Pとのスプリットで、ESKORBUTOは"A la mierda el Pais Vasco"(Basque Country, go to hell)という曲を収録しているよね。たくさんの問題を君たちは抱えていたのかな?

「そうだ、俺たちはバスク国から検閲されていた。奴らは俺たちのことを"スペインのマザー・ファッカー"と呼んでいた。だけど、俺たちがスペインにいるときは"バスクのマザー・ファッカー"と言われていたよ。でも気にしちゃいなかった。俺たちはとことんやり続けた。活動期間中を通して、バンドとして100回もショーをやっていなかったから、自由な時間がたくさんあった。それで曲やレコードを作り続けていたんだ。ESKORBUTOは何ものにも頼らなかったのは明らかだし、俺たちはその終わりのときまで変わらないのさ」

■ESKORBUTOはRRV(Radical Basque Rock/Rock Radical Vasco)に決して加わらなかったよね?

「ESKORBUTOは世界で最もラディカルなバンドだ。"ロック"に国なんて関係ない、バスクであってもだ。ロックには国境も政府もない。RRVはロックじゃないし、ラディカルでもなければバスクでもない。単なる商業的な名前だ。RRVなんてクソだぜ」

■RRVの一員になることを拒んだから、ESKORBUTOは検閲されるようになったと思う?

「ESKORBUTOはいつだって検閲されていた。バスクの外でも中でもな。そういうわけで、俺たちはライヴ・レコーディングを何度か行なったんだよ」

■アルバム「Eskizofrenia」の話しをしましょう。どうしてドラム・マシンを使ってレコーディングしたのかな?

「サウンド・エンジニアが生のドラムではろくすっぽレコーディングできなかったんだ。時間はなくなるしちゃんとしたサウンドにはならないしで、遂にそいつがドラム・マシンを使ってアルバムをレコーディングしたらどうかってアイデアを出してきた。俺たちは既にレーベルとアルバムを出す約束をしていたから急いでいたし、もう構わなかった。何よりもレコードを出すことが重要だったんだ。「Eskizofrenia」は1984年にリリースされたよ」

■1984〜1985年頃のショーってどんなものだったの?どのバンドとよくやっていた?

「ESKORBUTOのショーはいつも激しかったし、たくさんの人々が詰めかけた。多くのバンドと共演したが、R.I.Pと一緒にやるのが本当に好きだったよ」

■「Anti-Todo」(anti-everything)はスペインにおけるベストなパンク・アルバムの一

"SOMOS LA BANDA MAS HONRADA QUE HA PISADO EL PLANETA EN MILLONES DE AÑOS"



枚に挙げられているけど、どう思う?当時、あのアルバムを通して何を伝えようとしていたのかな?

「俺たちが言いたかったこと、それは全てが最悪だってことさ」

■どうやってESKORBUTOは唯一無二のサウンドを確立したの?

「ESKORBUTOは偶然の産物さ。偶然、3人の全く異なるミュージシャンがお互いのことを見つけたんだ。探していちゃ、見つけられないものさ。偶然俺たちは一緒になり、そして死が俺たちを分けた。バックグラウンドが異なるミュージシャンが集まってやれば、独特のサウンドになるんだよ。誰にも似せようとはしなかった。俺たちはESKORBUTOで、やっているのはEskizofrenia Rockだ」

■ライヴをよくやっていた1985〜1986年の間は、ESKORBUTOにとってベストな時期だったのかな?

「俺たちにベストな時期なんてなかったよ。あの頃もウンザリしていただけさ。けど、あの数年間、バンドは強固に突き進んでいた。俺たちと比べ物になるバンドはいなかったし、力強く健康的で、全てをぶち壊す力に充ちていたんだ」

■どうして同じ年に何枚ものアルバムを出すことにしたんだい?

「どこに行っても検閲されていたから、音楽を作る時間だけはたっぷりあったのさ」

■「Las más macabras de las vidas」(Macabre Lives)のレコーディングを行なう以前のYosuとJuanmaの健康状態はどんなものだったの?いつから彼らはドラッグにのめり込んでしまったんだい?バンドに与えた影響は?

「YosuとJuanmaはドラッグを決して止めなかった。俺が彼らと出会ったときから、ドップリはまっていたし、会う度に少しずつ、毎日彼らは死へと向かっていたんだ。ある日、俺は独りぼっちになっちまった。1992年のことだ」

■1991年にESKORBUTOはメキシコに招待されたよね。スペイン国外で演奏するのはどんな体験だった?ラテン・アメリカでよく知られている存在だったことは知っていた?

「俺たちのバンドはスペイン語圏、そして世界規模で見ても最も重要なパンク・ロック・バンドの一つだった。パンク・ロックが語られるとき、ESKORBUTOは常に話題にのぼったんだ。インターネットが出現する以前に、俺たちのアルバムは大西洋を渡った。そして、永きに渡り抑圧され続けてきたスペイン語圏の国々は、ESKORBUTOという名の解放運動を目の当たりにしたのさ。大統領も州知事も将軍もマザー・ファッカーも名ばかりに過ぎない。人々が辟易すればするほど、ESKORBUTOはより聴かれるようになるんだ」

■スペインに戻ると、YosuとJuanmaの容態は増々悪化していった。だけど彼らはアルバムのレコーディングを決意したよね。「Demasiados Enemigos」(Too many enemies)のレコーディングに関して、何か覚えている?

「そうだ、日々、彼らは弱っていったが、バンドを放棄することなく死んでいった。「Demasiados Enemigos」のレコーディングは満足できるものではなかったが、少しは期待もされていたんだ。あいつらは、これが自分たちの最後のアルバムになるなんて考えてもいなかっただろう」

■どうしてESKORBUTOには常に数多くの敵が存在していたんだい?君たちの周りで起きていた真実を、君たちが話していたから?

「そうだ、君はこのマザー・ファッカーな国で、正直者ではいられない。音楽だけじゃない、その他全てにおいて、この国は政治的な結びつきによって牛耳られている(誰かと知り合いだから、良い仕事につけるとかな)。俺たちは、そんなコネクションだったり、工場に潜む裏切り者、労働者階級を裏切る無政府主義者、労働者を裏切る労働者階級、神や自分の母親までをも僅かな給金のために裏切る労働者を、焼き尽くしてやろうとしたんだ」

■1992年のESKORBUTOの最後のツアーはどんなものだった?

「ひどい体調で何回かショーをやっただけだ」

■Yosuが死んでも、Juanmaと君はバンドを続けようとした。どんな計画があったの?

「彼がいなくても生き延びる、それが計画だ。神すらいなくとも、ESKORBUTOがそこにはいる。死が分かつまで、俺たちはESKORBUTOなんだ」

■Yosuが死んだ数ヶ月後、Juanmaも死んだ。ESKORBUTOをどうする予定だったの?

「俺が生きている限り、俺はESKORBUTOをやり続けるだけだ」

■先日、Repe Rock FestivalでESKORBUTOのトリビュート・ライヴが行なわれたよね。どう感じた?何曲か"PAKO ESKORBUTO"バンドとして演奏したんだよね?

「ああ、演奏したぜ。最高の気分だった。まるで子供に戻ったような気分だったね」

■どうしてESKORBUTOの曲は今でも聴かれ続けているんだと思う?

「俺たちが未だにウンザリさせられ続けているからだ。ESKORBUTOが曲を作ってから30年経ってもな」

■伝えておきたいESKORBUTOに関する逸話はある?

「何千とあるが、一つとして語る価値なんてないさ。監督が映画の中で俺たちについて語るだろうよ(※ESKORBUTOのドキュメンタリー映画が製作されている)」

■日本の人たちに言いたいことはある?

「俺たちの歌詞が日本語に訳されたとしたら、日本の50パーセントの人たちは賛同し、50パーセントの人たちは反対するだろう。ESKORBUTOに賛同した人たちは死ぬまでそうだろうし、反対した人たちも、死ぬまでそのままなんだろうよ」

"WE ARE THE MOST HONEST BAND TO SET FOOT ON EARTH IN MILLIONS OF YEARS"

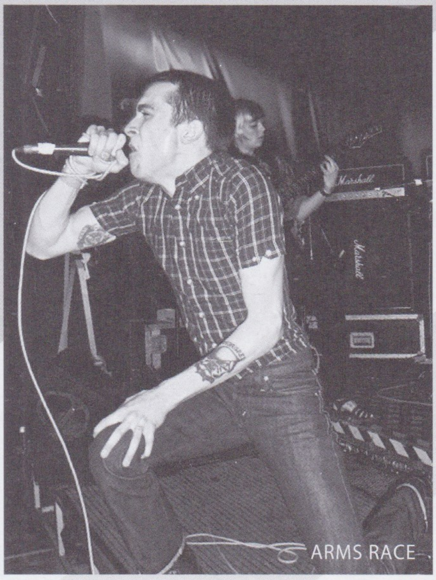
LONDON PUNK NOW

ロンドン・パンクの現状に関する私的考察・推測及び散文

パンクと言えばやっぱりロンドンだ(唐突に)!…というわけで、最近のロンドンが面白い。vol.18に掲載のLa Vida Es Un Musやvol.19のMe Saco Un Ojo(デス・メタルだけど)、またQuality Control HQやStatic Shock、Vetala Productions、ナゼか日本のバンドを多くリリースしているImminent Destructionなどといった新興のレーベルもここ数年、精力的なリリースを続けている。そんなロンドン。

とは言え、どうしても未だに"ロンドン=70's～80'sのバンド"のイメージが強いと思うので、EL ZINEとしましてはここいらで現在進行形のナウくてイケてる(すごい死語だ…)バンドを紹介してみようじゃないか!…と、今のロンドンの極一端に過ぎませんが書いてみます。

まず、猛烈にオススメしたいバンドがARMS RACE。NWOBHC(New Wave Of British Hardcore)を掲げ、初期AGNOSTIC FRONTを彷彿とさせるゴリゴリのスキン・ハードコアが最高に燃える!4SKINSのハードコア・ヴァージョンと言ったら褒め過ぎか?ヴォーカルNickのルックスもカンペキなスキンズ・ファッションだが、紅一点ギターのOlaは、前述のQuality Control HQを主宰しておりARMS RACEも同レーベルよりシングルを発表している。


ARMS RACE

ちなみに、世界的に注目を集めるシーンの常として(PDXやUmeaしかり)、バンド・メンバーの"重複"がロンドンのシーンでも顕著だ。ARMS RACEのメンバーが他に関わっているバンドだけでもOBSTRUCT、SLUR、FLEX、VIOLENT REACTION、STABなどが挙げられる(拠点がロンドンではないバンドもいるが、全部要チェックのバンド)。

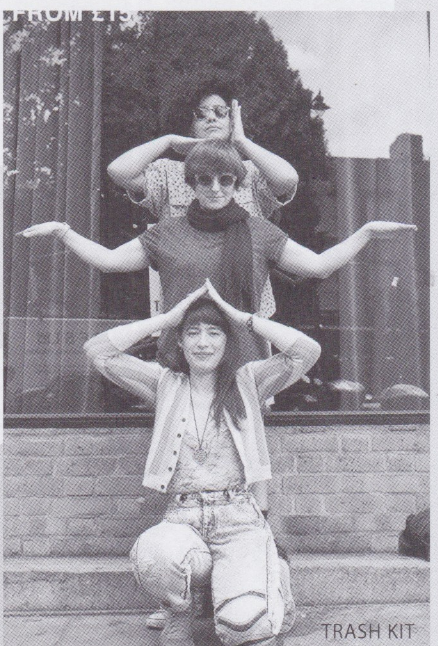

WOOLF

また、WOOLF(vol.12に掲載)を筆頭にアバンギャルドなフェミニスト系バンドが多いことも、現在のロンドンの特徴なのだが、Static Shockから「Punk Is My Boyfriend」という素敵なシングルを発表しているFRAUには、WOOLFとGOOD THROBのメンバーが在籍。そしてGOOD THROBのメンバーは過去にTHE SCEPTRES、THE SHITTY LIMITS(カミソリ・キラー・パンク!)などといったバンドで活動し、現在はSNOB、THE LOVE TRIANGLE、NO(これらも要チェック!)を掛け持っている…という具合だ。また、近年の欧米のバンドはどうも、"レコードを出したので任務完了!"とばかりに1、2年で解散→新バンドをすぐさま結成する傾向がある(ように思う)。そんな流れも、この掛け持ち!掛け持ち!!アンド掛け持ち!!!の状況に拍車をかけているような気がしてならない。…で、このロンドン・パンク人脈を一つずつ読み解いていくのもオツかもしれないが、終わりが見えないし混乱しそうなのでザックリいきます。


FRAU


GOOD THROB

さて、女性がフロントに立つバンド、WOOLF、FRAU、GOOD THROBと来たら(この3バンドはプリミティヴ&アバンギャルドなアナーコ・パンク～ポスト・パンク寄り)、ギリシャ語で歌うEFIALTISも妖艶にしてダークなロウ・パンクで最近頭角を現してきているバンドだ(メンバーはDREGSでも活動中)。また、WOOLFとのスプリットもリリースしているTRASH KITは2009年結成とこの界隈ではキャリアも長く、その無駄を削ぎ落としたポスト・パンク・サウンドはアーティスティックですらある。近い音楽性のバンドにはSHOPPINGというバンドもいるのだ


TRASH KIT

が、案の定TRASH KITとメンバーが重複。この2バンドはセンスの塊の如きソング・ライティング能力を有し、語弊はあるがとってもお洒落なサウンドなので、"最近はパンクに食傷気味で…"といった方にもチャレンジして頂きたい。

ユニークな存在としてはブラック・フェミニスト・パンクを標榜する、2013年結成のBIG JOANIEというバンドがおり、メンバーにはもちろん黒人女性が在籍。ただパンクと言うよりはグランジ寄りの音。ACTUAL CRIMESはワーキング・クラス・フェミニストを掲げているが、Oi!なワケではなくインディー・ロック〜ポスト・パンク。あとフェミニストかどうかは不明だが、La Vida Es Un MusからシングルをリリースしているPRIMETIME



PRIMETIME

も同系色と言っていいバンドだと思う(メンバーがカワイイ)。SAUNA YOUTHも一連の流れにあるポスト・パンク・バンドだ。

ここで、上記のバンドとは恐らく一切の絡みがないであろう女性ヴォーカル・バンドについても言及したい。まずはDYSTERIA。女性ヴォーカルと指摘されても信じられないしゃがれた声のスクリーム。楽曲はNAUSEA直系で、聴いていると90年代のアメリカにタイムスリップできる。そんな彼女/彼らの1stアルバムのタイトルは「Fuck The Future」。21世紀とは思えない直球ぶり…、最高だ!DISGUSTとのジャパン・ツアーを敢行し、MCRからのリリースもあるMEINHOFも今尚健在。不変のD-Beat爆撃を英国〜欧州を主戦場に繰り広げている。

女性ヴォーカルのバンドの話題が続いてしまったので、ここらで野郎のバンドも。DYSTERIA〜MEINHOFの流れでいくと、HELLO BASTARDSもクラスト系のバンド。セルフ・タイトルのアルバムを、幣誌でお馴染みRafaelのKarasu Killer+他10数レーベルの共同リリースで昨年発表している。ただしこのバンドはパワー・ヴァイオレンスの要素が色濃いのも特徴の一つか。ロンドンのパワー・ヴァイオレンスと言えばISOLATION TANKやARMOUR OF CONTEMPTなどといったバンドも重要な存在。



ISOLATION TANK

日本人がつい反応してしまうバンド(名)としては今年の5月に初ライヴを行ったニューカマーのKICHIGAI、そして不協和音ノイズ・パンクのSEMIなんてのもいる(メンバーはGOOD THROB、HUNGER、STREET BEEF、DREGSにも在籍)。現在のNY勢とも共振する狂乱のロウ・サウンドなのだが、SEMIはやっぱり「蝉」なのか、それとも「半分」を意味する英語なのか気になるところ。



SEMI

LVEUMのPacoがドラムを務めるTHE LOWEST FORMは激烈カオティック&ヴァイオレンス・ハードコア。アメリカのIron Lungからアルバムを出しているので、ご存知の方も多いことでしょう。そのLVEUMからのリリースもある、ジャパニーズ・ハードコアmeetsスカンジなNAILBITERは惜しくも解散してしまったのだが、メンバー2人は新たにSPLIT VEINSを結成している。詳細は次項からの彼らのインタヴューをチェックしてもらいたい。SPLIT VEINSのお次には、本稿の前半でチラッと名前が挙がったSNOBのインタヴューを掲載。インタヴューと内容がバッティングしてしまうので触れなかったが、このバンドもバツグンに格好良いシックネス・パンクなのでオススメです。

今のロンドンのパンク・シーンに欠かせないホット・トピックとしては、DIY Space For London(DSFL)の存在が挙げられる。ライヴ会場やレコード・ショップ、カフェ、ミーティング・ルームなどを併設した場所で、ボランティアによって運営されている。機能としてはスクワットのそれに近いと思われるが、2012年から基金を設立し、遂に今年オープンに漕ぎ着けた。すでにロンドン・パンクの中心地になっていると言っても過言ではないだろう。とりあえずロンドンに行ったのなら、足を運んでおくべきだ(多分)。DSFLについてはインタヴューで2バンドともに熱心に語ってくれているので、そちらも参照してもらいたい。

70〜80年代、そして90年代からのベテラン勢。変わらずに地道な活動をずっと続けているバンド、再結成して醜態を曝すフェス・バンドと様々だが、触れたら最後、本当にキリがないので今回はナウでヤングな(ひどい死語だ…)バンドをメインに据えてみた。それでも全体の5パーセントくらいにしか触れられていないと思う(ロンドン、やっぱり大都市なのでバンド数がハンパないです)。…のだが、オッサン・バンドについて最後にチョビットだけ。

COCKNEY REJECTSのMick Geggus、THE CLASHのTerry Chimes、SHAM 69のDave Tregunna、そしてスウェーデンのTHE DIAMOND DOGSのSören "Sulo" KarlssonとDOCENTERNAのIdde Schultzによるバンド、THE CRUNCHは2013年に「Busy Making Noise」というアルバムをリリースしている。期待していいのか、絶望が待ち受けているのか悩ましいメンバー構成だが、今年に入って2ndアルバム「Brand New Brand」をリリースした。ハッキリ言って、"どこかで聴いたことのある"曲のオンパレードでルックスも冴えないが、涙を誘うグッド・メロディーの連続で、懐メロ・パンクとしては最高の出来。長年に渡って積み上げられたキャリアがあるからこその滋味に充ちているのだ。

そう、何事も過去があるからこそ、今がある。ロンドン・パンクも一緒だ。私たちは過去を背負って今を生き、そして未来へと歩み続ける—。

…何か巧いことを言おうとしたけど、全然言えていないままに、本稿を締めさせて頂きたいと思います。謝謝。



THE CRUNCH



Split Veins

ex NAILBITERのCarlos(Vo&Gu/以下C)とGianluca(Ba/以下G)によって結成されたSPLIT VEINS。モロにDEATH SIDEやANTI CIMEXを彷彿とさせるスタイルだったNAILBITERを更に純化させたかのレイジング・ハードコアが強烈だし、あの独特な歌い回しも健在です!2000年からロンドンで活動してきた人たちだけにシーンを幅広く見ているし、含蓄に富んだ話しを色々と聞かせてもらうことができました!

■まずは、どうしてNAILBITERが解散したのか、その理由を教えてもらえますか?『The Bait』MLPがNAILBITERとしては最後のヴィニール作品ですよね?

C「実は、俺たちのドラマーがブラジルに帰国してしまったんだ。それでもうこれ以上続けることができなくなってしまった。それと、そうだね、『The Bait』はNAILBITERのヴィニールとしては最後となるレコーディング作品だよ。あとは、俺たちの友人が何人かでやっているAnother Nail In The Coffinからはカセットテープ・コンピレーションがリリースされていて、それにはANTI CIMEXのカヴァーが収録されている。そのテープはPunk Vortexディストロでチェックできるぜ」

G「実際のところNAILBITERは解散しちゃいないんだ。だけどドラマーのMarceloがブラジルに帰国してしまったからね。それ以前から、俺たちが一緒に演奏するのには困難がつきまとっていた。彼はベルギーに住んでいたし、イギリスへの入国を許可されていなかったから。そして今では単純に、一緒に演奏することが不可能になったってわけだ。だけど、将来何が起こるかは誰にも分からないからね!」

■そもそもブラジルからロンドンへと移住したのはなぜですか?2000年頃のことでしたか?併せてNAILBITERのバイオグラフィーも聞かせてください。

C「俺がロンドンにやって来たのは1999年のことさ。当時のブラジルのパンク・シーンは異なる多くのグループに分断されていて、それらのグループ同士はお互いに距離をとっていた。本当、心底気が滅入る状態だったよ。それで、今こそ違う何かをすべきときだと俺は考えたんだ。音楽も演奏したかったし、レコードを出したり、色々したかったのさ…。そして、そういったことはイギリスに渡ると可能になった。すぐに同じ趣味の奴らと出会えた俺は、バンドを始めたんだ。俺がブラジルで関わっていたシーンでは、見出すことができなかったサウンド、そう、スカンジと日本のハードコアから影響を受けたハードコア・パンクさ!NAILBITERはそうやって始まったんだ。2000年初頭の頃の話しだよ」

G「俺もブラジルから来たとみんな思っているけど、俺はイタリアの出身なんだぜ。ヨーロッパを旅して廻っていたら、ここロンドンに辿り着いた。だけどそのとき、お金が全然なくてね、それで働き始めたんだ。パンクに限らず、ありとあらゆるギグに通っていたよ。ここでの体験が気に入っていたから、帰国せずに暮らすことにした。そうしてCarlosとMarceloと知り合ったのさ。スクワットでビールを酌み交わしているうちにな」

■DEATH SIDEのような日本のハードコアやANTI CIMEXから多大なる影響を受けていると思いますが、どうやってこれらのバンドを知ったのですか?

C「俺がANTI CIMEXを知ったのは、『Afflicted Cries In The Darkness of War』という古いコンピを通してなんだ。CRUDE SSにFEAR OF WAR、ROVSVETTも収録されていて、OLHO SECOのFabioがブラジルで80年代にリリースしたんだ。その後から、俺はANTI CIMEXの音源を探し求めるようになった。そのコンピLPの中でも、ANTI CIMEXはお気に入りのバンドだったからさ。一方、DEATH SIDEに関してはCHAOS UKとのスプリットLPで初めて聴いたんだ。だけど他の作品、『Wasted Dream』や『The Will Never Die』、『Bet On The Possibility』とかを見つけたのはイギリスに来てからなんだよ。

DEATH SIDEのビデオを初めて見たときのことは今でも覚えているぜ。友達がVHSで持っていたんだ。俺は、"なんてこった!!信じられない!Ishiyaの声と巨大なモヒカン、Youの強烈なベースとクラシックなパンクのスタイル、そしてもちろん、偉大なるChelseaのビッグ・ヘアーと素晴らしいリフの数々。もう夢中になったね。今でもこのビデオを見ると心底震えるよ。NAILBITERを始めたあの日から、この両バンドからの影響を加味しようとしていたんだ」

G「たしか、CarlosとMarcelo、OsmaniがDEATH SIDEについて教えてくれたんだ。スクワットで一緒に暮らしていたときにね。何よりも、まずはシンガーのでかいモヒカンに衝撃を受けたよ!ANTI CIMEXについては覚えていないな。いつもずっと聴いていたような感じだよ」

■SPLIT VEINSはどのようにして結成されたのですか?

C「NAILBITERでプレイできなくなった後、ポルトガル出身の友達と一緒にバンドを組んだんだ。もっとベーシックなスタイルのハードコアをやりたくてね。議論の結果、A.I.D.Sというバンド名にした。そのバンドが解散すると、俺とGianluca(NAILBITERのベーシスト)で、無駄を削ぎ落としたハードコア・パンクをやってみようって話しをしたんだ。80年代初期の日本のバンド、KUROやLSD、EXECUTEとかから影響を受けたようなやつをね…。それが大体2年前のことさ」

G「Carlosが、俺たちがまだA.I.D.Sをやっていたときにアイデアを持ってきたんだよ。もっと、"noise-not-music"なアティテュードのバンドをやりたかったんだよな」

■SPLIT VEINSというバンド名にはどんな意味を込めているんですか?

C「最初のドラマーだったAaronが名づけたんだ。だから、俺はあいつがどこから着想を得たのか知らないんだけど、気に入ったから、これにしたんだよ…。このバンド名は自殺や絶望を想起させる。また、少なくとも俺にとっては個人的な意味もあるんだ…。そのことについて俺たちが話し合ったことは一度もないけどな…」

■SPLIT VEINSは、NAILBITERよりもプリミティヴなレイジング・ハードコアに感じます。NAILBITERはもっとメタリックでしたよね。自分たちではどう感じていますか?

C「そうだな、君が表現した通りだよ。プリミティヴなレイジング・ハードコア・パンクさ!ヴォーカルにディレイをかけまくったね、ハハハハ」

G「君が言った言葉で十分だ。特に、プリミティヴってところがね。ソリッドなリフとビートが基本で、時々不気味な感じさ。荒々しい原始的なヴォーカルを喚き散らすことによって、俺たちの憤怒を吐き出しているんだ。パンク・ロックはいつだって、俺たち自身を表現する媒体なんだよ。これが俺たちのやり方で、それが鳴り響いているのさ」

■ヴィニールでのリリースは何か予定していますか?

C「イエス。8曲ほど新曲をレコーディングしたところなんだ。全て予定通りに進めば、今年の終わりにはヴィニールの形になっているだろうね。まだフォーマットは分からないけど、恐らく7"EPかMLPになるだろうね」

■ロンドンのパンク・シーンはこの10〜15年くらいでかなり変わってきたように思うのですが、実際のところ変化は感じていますか?

C「この10年か15年で、ロンドンのパンク・シーンは大幅に変わってきたと俺も思うね…。正直に言って、今のロンドンはパンク・バンドやギグをやるにあたっては最良のときだよ。何年もの間、どのバンドも似たようなサウンドだったり、格好良い新しいバンドが見つからないような状況だった。だけど今は、信じられないくらい多様性があって、活動的なバンドが数多くいる。そしてそういったバンドの多くが、数年前からシーンに躍り出てきた新たな若者たちによるものなんだ」

G「ロンドンそのものと同様に、ここのパンク・シーンも変わったよ。ときには良くもなるし、ときには最悪にもなる。住宅地の高級化に伴い、いくつかの会場、スクワットを失ったよ。今やスクワットで暮らすのはより困難になっているから、多くの人たちが去っていった。だけど、新たなプロジェクトは常に始動しているし古くからの友人たちも残っている。音楽的な面で言えば、シーンは非常に良くなっているよ」

■新しい世代による素晴らしいバンドが数多くいますよね。今のロンドン・パンク・シーンに対する率直な感想を聞かせてください。

C「さっきの答えの続きになるけど、今のパンク・シーンは多彩だよ。どのジャンルにも素晴らしいバンドがいるしね。けどバンド名を挙げるようなことは本当、したくないんだ。名前を挙げ忘れるバンドが出て来るだろうし、それってフェアじゃないからね。だけどクラスト、初期のアメリカン・ハードコア・スタイル、エクスペリメンタル、ポスト・パンク、グラインド、Oi!、スラッシュ、メロディック、ポリティカル、ダーク等々で、たくさんの人たちが活動しているんだ。良くない傾向としては、それらのシーンがお互いに常に繋がっているわけじゃないってこと。そして時々、くだらない対立がロンドンのシーンの異なるセクション間で巻き起こるんだ。俺は普段からできる限り多くのギグに足を運ぶし、色んなシーンの連中と共演しているんだけどさ…。俺たちはどこにも属していないし、俺としてはそれは良いことだと思うんだけどな」

■ロンドンのパンク・シーンは分断されているということですか?

C「さっきも言ったように、シーンはいくつかのセクションに分けられているね。それぞれが勝手にやっていたり、何かを一緒にやることもたまにはある…。この数年間の、ロンドン・パンク・シーンの最大の功績についても言及したいね。それは新しい会場、DSFL(DIY Space For London)がオープンしたことさ。数多くのボランティアの助力によって、でかい倉庫の賃料を何とかまかなっているコレクティヴなんだけど、今は音楽のショーや、様々な活動をする会場として運営されているんだ。俺たちは既にそこで演奏したし、できるだけ関わっていこうと思う。この巨大な都市でパンクの活動をしている人間にとっては、すごく必要



とされている場所なんだ。間に仲介人が介在しているわけじゃなく、みんなの手で運営している場所だからね」

G「ロンドンは大きな都市だから、色んなシーンが存在しているのは当然のことさ。しかも、それぞれが結構クロスオーヴァーしているしね。ただ、みんなが一つのシーンにのめり込んでいくのは好きじゃないんだ、だってそれって流行りみたいなものだろ。まぁ、そんなもの大抵の場合、すぐに収束するんだけどさ」

■GBHやDOOMと共演したフライヤーを見ましたが、そういったベテランのUKハードコア・バンド、例えばGBH、DOOM、DISCHARGE、EXPLOITEDなんかとはよく共演するんですか?

C「俺たちは、誘われれば古くからのバンドともプレイするよ。いくつかのバンドは今でも格好良いからね。そうでもないバンドもいるけどさ。個人的に言うと、若くて格好良いバンドと一緒にやるほうが断然エキサイトするけどね。ただ、明らかにイギリスのパンクは高齢化している。全般的にね。俺たちは、昔からバンドをやってきた人たちとたくさん出会ったけど、みんな本当にナイスな人たちだったよ」

G「俺は、古いイギリスのパンク・バンドなら大体好きだよ。だけど、そんなに彼らとは共演しないね。大抵、現在の彼らはちょっと退屈だからさ。ただし、GBHは除くぜ。彼らはいつだって最高だからさ。DOOMも俺のお気に入りのバンドの一つだし、彼らを昔のバンドだと思ったことなんて一切ないよ。だからGBHとDOOMと一緒にできて素晴らしかった。実は最初は少しナーバスになっていたんだ。普段よりもでかい会場だったし。けど、結局、全ては順調にいったよ。サウンドも良好で、ビシッとした演奏ができたから、オーディエンスも俺たちを気に入ってくれたみたいだしね」

■メンバー全員、ロンドンに住んでいるんですか?普段の生活ってどんなものでしょう?"ロンドンでの生活にはメチャクチャ金がかかる"と言う人もいますが。

C「イエス、俺たちみんなロンドンに住んでいるぜ。そしてイエス、その生活には本当、金がかかってしょうがないんだ。特に家賃、酒、そして交通費がね。スクワットすることが違法になってからというもの、多くの人々にとっては、あらゆる面でより困難がつきまとうようになった。そしてロンドンの、昔からワーキング・クラスが暮らしていた地域の高級住宅化に伴い、この都市で手頃な価格の賃貸物件を見つけ出すことはほぼ不可能になっちまったんだ…。俺たちは物価の高騰についていくため、より働かなくてはいけなくなった。そうは言っても結局のところ、ロンドンは去り難い場所さ。生活するには、本当に活気に満ちた都市だからね。様々なカルチャー、食文化、芸術などなど…。色んな問題を抱えている現在ですら、どこか他の場所で暮らすなんて想像すらできないよ」

G「確かに高いが、抜け道は見つけ出せるぜ。メシだって、ゴミ捨て場を漁れば手に入るしな。それがイヤなら、残念ながらウンザリするほど働く他はないけどね」

■僕がもしロンドンへ旅行に行くとしたら、訪れるべきスポットは?オススメのレコード店や会場、スクワット、パンク・バーは?

C「普通の旅行者みたいな観光もオススメだが、最高なのはRat Records、Rough Trade、DSFL、All Ages Recordsなどでのレコード・ショッピング。ギグを見たいならパブやスクワットで見られるぜ。何軒かバーもあるけど、イマイチな店ばっかりだな…」

G「All Ages Records、Rat Records、DIY Space(DSFL)、Bonnington Cafe、56A Bookshopがオススメだ。俺たちがディナーを作ってやるぜ。そんで一緒に酔っぱらって、朝になったら二日酔いをさましにRock Steady Eddyへと繰り出すんだ!」

■将来的にはブラジルに帰りたいと思っていますか?

C「たまにだけど、ブラジルには行っているよ。だけどブラジルに帰るなんて計画はしていないね」

G「まっぴらごめんだね。ツアーや、カシャッサ(※ブラジルの酒)のためなら喜んで行くけどさ」

■最近の日本のバンドで、好きなバンドはいますか?

C「比較的最近の話しだけど、いくつか日本のバンドを見たし、どのバンドもかなり良かったぜ。SYSTEMATIC DEATHにZYANOSE、CLOWN、D-CLONEとかね。だけど、俺のお気に入りはSKIZOPHRENIAだな。彼らは最高だよ!」

G「好きな日本のバンドなんて大量にあるけど、新しいバンドに限ると少しばかり難しいね。俺ってレイジーだし、インターネットも好きじゃないから、少しだけここに名前を挙げるよ。SCUMRAID(※韓国のバンドです)、SKIZOPHRENIA、RAW DISTRACTIONS、DORAID、ABSURD SOCIETY、BATTLESCARD、LASTLY、BEER BELLYかな…」

■今後の予定や目標を聞かせてください。

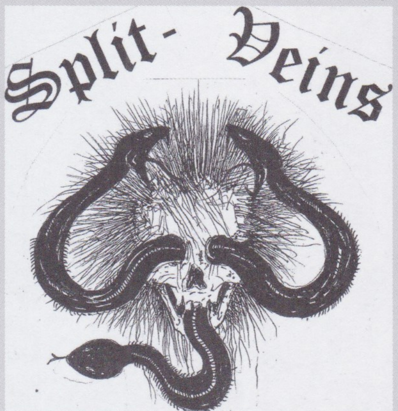
C「今の主な目標と言ったらアルバムをリリースして、もちろんジャパン・ツアーをすることさ!!!!だから、誰か俺たちのブッキングに興味があったら声をかけてくれよ!日本のレーベルで、もし俺たちの新譜の共同リリースに興味があるなら、もちろん大歓迎さ」

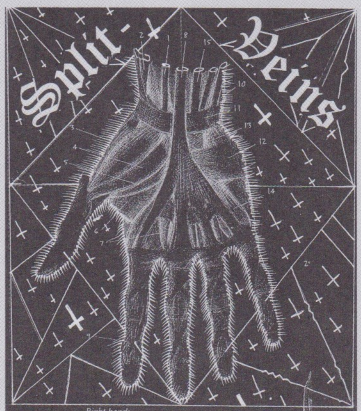
G「俺は次の夏か秋に、バルカン諸国へツアーに行きたいと思っているんだ。あそこの人々や気候、料理が好きだし、もっとバルカン諸国についても知りたいしさ。あとはリリースのためにもっと曲を作らなきゃね。一歩一歩進んで行くさ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。日本の読者にメッセージを。

C「読んでくれてありがとう。俺たちのデモを、ここで<https://split-veins.bandcamp.com/releases>聴いてみてもらいたい。すぐにみんなと会えるといいね、カンパイ!!EL ZINEとケンジもありがとう!」

G「日本は心底訪れてみたい国だし、パンクスと会ったり、素晴らしいバンドをそこで見てみたいよ。何かとお金がかかるって聞いたし、日本に知り合いもいないんだけどさ。それでもいつか俺と君たちが日本で出会うかもしれないね。それと、S.D.S.が再結成してくれるよう頼むよ!インタヴューしてくれてありがとう」









SNOB



LONDON PUNK NOW

GOOD THROBなどのメンバーを含む女性ヴォーカル・ハードコア・バンド、SNOB。ロウにして病的、そしてフリーキー且つパッション溢れるサウンドは、2015年の今を生きるバンドならではのユニークさ。今のロンドン・シーンを象徴し、その中核に位置しているのが彼女/彼らではないでしょうか。若者らしい、スマートさと誠実さを感じさせる丁寧な答えを寄せてくれました!
メンバーはFran(Vo/以下F)、Ellie(Gu/以下E)、John(Ba/以下J)、Oli(Dr/以下O)の4人です。

■SNOBの結成についてまずは聞かせてください。バンクーバーにも同名のバンドがいますが、存在は知っていましたか?

O「僕たちがバンド名をSNOBに決めたその一ヵ月後、バンクーバーのSNOBのデモを誰かが絶賛しているのを見かけたんだ。僕はそんなには困らなかったけどさ。だけど、バンドが同じ名前をシェアしているってことを、まるで重大事に捉える人も少しはいるんだよね」

E「2013年の冬に私たちは一緒に始めたの。以前にもOliとは、短命に終わったバンドを一緒にやっていたんだけどね。それに、私とFranはその2ヵ月前に、ふざけてメンバー全員女性のプロジェクトを試してみたところだったし。何かを始めてみるっていうのは、良いアイデアに思えたのよ。それでバンドというタチの悪いジョークを再開させて、同時に音楽を作り始めたってわけ!私は安いギターを買って練習を始めたんだけど、ワクワクしたわ。私たち全員とも、自分のパートの楽器を、それまで演奏したことがなかったの。だから面白かったんだけど、独学するのが当初はちょっと不安だったわね」

■メンバーはGOOD THROBやFAMILY OUTING、SKYLARKなどにも関わっていた(る)んですよね?

O「Ellieと僕はFAMILY OUTINGを一緒にやっていたんだ。彼女がヴォーカルで僕はギターを弾いていた。このバンドにはCharlieって奴もいたんだけど、彼は今、SKYLARKでベースを弾いているよ。あとBenはHUNGERやSEMIで活動している(この3つのバンドを、日本のパンクスは聴いてみるべきだよ)。それと僕は過去にはLICH、GAUNT、あとすぐに解散しちゃったけど、NITPICKERSとSULKでギターを弾いていたよ。SNOBは僕がドラムを担当した初めてのバンドで、今ではSARCASMというバンドでもドラムを叩いている。SARCASMはSNOBとは全然違うバンドなんだけどね(SNOBみたいにラウドじゃないんだ)。Johnと僕は最近別のバンドも始めて、それにはSKYLARKのBenとEFIALTISのAlexも関わっているんだ。そう、ロンドンのバンドって近親相姦的なんだよ。その最近始めたバンドってのもSNOBとは全然違っていて、バンド名をBODY BUTTERにしようって提案したんだけど、誰も賛同してくれないんだよね…」

E「うん、GOOD THROBは私が関わった初めてのバンドよ。5年くらい前に始めてね、私はヴォーカルを担当していたの。けどSNOBとは全くの別物!私は叫んだり歌詞を書くのが大好きなんだけど、ディストーションをかけたギターでパンクのリフを弾くと、パワフル且つよこしまな、また別の満足感を感じるわね、ハハハ。良い変化だと思うわ」

J「俺はSKYLARKで5年前から現在に至るまでギターを弾いてきたよ。新しいLPをレコーディングしたばかりでね、2016年には出せると思う!あとKINSHOTというバンドでは歌っていて、"BODY BUTTER"じゃベースさ。それに全然活動していない、と言うか多分解散しているファスト・ハードコア・バンド、MAN HANDSではヴォーカルを担当しているね。SNOBでベースを弾くのは本当に楽しいよ。けどもっと色んなバンドで演奏してみたいね!俺たちは、俺たちが50代になっても元気なままにSNOBを続けて行くつもりなんだ」

F「このバンドが私にとっては初めての、そして唯一のバンドよ!」

■最近のロンドンはメンバー全員が女性だったり女性ヴォーカルのバンドがすごく多いですよね。WOOLFやFRAU、GOOD THROB、EFIALTIS、PRIMETIME、TRASH KITなどなど。どうしてパンクをやる女性が多いのでしょうか?



E「ええ、そういったバンドの中で、私が初めて見たバンドがWOOLFよ。全身にショックを受けたわね。だって彼女たちは、それまでのロンドンとはまるで異なるサウンドだったんだから。最初はね、"これって一体何なの?"って感じだった。彼女たちの演奏はすごくロウでエネルギッシュだったし、どのギグでも違う一面が見られた。男の子たちがやっていることとは、似ても似つかなかったわ。当時のロンドンでは、パンクやハードコアをやっている女性の数はそれほど多くはなかったように思う。GOOD THROBが始動した頃から変わり始めたように感じているわ。多くの女性がギグでステージに立ち始めたのよ。ギグに足を運んだり、ジンを作ったり、ショーを企画していた女性はいつだっていたわ。だけど女性が多数派を占めている状態なんて稀だった。だけど今では全てが変わった!バンドをやっている女性がたくさんいるからね。多くの女性が活動している姿を見ることによる、その影響もあると思うわ。TRASH KITのRachel Aggsだったり、私の大好きなバンド、SHOPPINGだったりね。このバンドは素晴らしいわよ。そして、この都市の女性たちは"ANYONE CAN START A BAND"という古くからのメッセージを拡散し続けている。私の推測では、同様のことが世界中で巻き起こっているわ。男性の時代はもう終わっちゃったのよ、ハハハ!」

■クィアやフェミニズム、LGBT(レズ・ゲイ・バイ・トランスジェンダー)についてはどう思っていますか?

E「ええ、私はフェミニストだし、クィア・フェミニスト・ポリティクスにも関心がある。それって私にとってはとても重要なことよ。Franが書く歌詞には彼女のフェミニストとしての政治観も反映されていると思うの。でも、その件については彼女自身が語るべきよね!」

J「俺は自分がフェミニストだと自覚しているよ。できうる限り女性やLGBTコミュニティの人たちの味方であろうとしているからね」

F「確かにそうよ。歌詞を書くことが捌け口になっていることに私は気がついたの。金持ちの白人老人たちを擁護することによって、利益を得る奴ら(それが誰かは考えてみて…)に支配されているこの社会で、生活することのフラストレーションを表現する方法が、歌詞を書くことなのよ」

■SNOBはよく"RUDIMENTARY PENIの影響を感じさせる"と言われていますが、実際のところはどうでしょう?

O「僕はいつもそれをちょっと変な話しだなって思っていたんだ。だって彼らのサウンドとは似ても似つかないからさ。たしかに僕らのミドル・テンポのパートにはその手の気色悪いノリがあるけどね。極初期の頃、練習で"Rotten To The Core"のカヴァーをやろうとしたんだけど、全然うまくいかなかったよ、ハハハ!まとめると、彼らは大好きなバンドのうちの一つだから、無意識のうちに影響を受けているのかもしれないね」

J「Oliが言ったように、たしかにメチャクチャ好きなバンドの一つさ。だから何かしら常に、彼らから影響されているのは明らかだ」

E「初期のギグの頃には、フライヤーでよくそのバンド名を引き合いに出されていたわ。まだ私たちのサウンドが100パーセント確立されていなかったからだと思う。個人的には、RUDIMENTARY PENIみたいなゾクゾクするタイプのハードコアには魅了されていたわね。マッチョなハードコアなんてやりたくなかったし。TOZIBABE(私のギターでどうすればあんな音楽を作れるんだかサッパリ分からない!)みたいなゴスっぽいバンドやSiouxsie Siouxからの影響も強いんだと思うわ」

■では、昔から現在に至るまでどんなバンドを聴いてきましたか?

E「初めて音楽に取り憑かれたのは、若かったティーンエイジャーの頃。ダサいHellcat Recordsのパンクなやつ、RANCIDみたいなね。あとはMISFITSとか。両親のガレージから盗み出したチェーンや南京錠を身につけてね、ハハハ。私がもっとDIYなのに夢中になったのは15歳くらいのときかな。ギグに足を運ぶようになって、掲示板で色んな人たちとお喋りするようになっていったの」

J「ティーンエイジャーの頃、俺はインディー・ロックが大好きだったんだ。NIRVANA、RADIOHEAD、PIXIES、MANIC STREET PREACHERSとかね。当時のニュー・メタルにも関心を抱いていたな。それからポスト・ロックにもちょっとのめり込んでいたけど、入れ込んでいたのは極僅かな間だけ。学校の奴らはそういうのを聴いていなかったから、格好つけていただけなんだ、ハハハ。AT THE DRIVE-INへの情熱がきっかけとなって、エモやポスト・ハードコアをチェックするようになったんだと思う。THURSDAYやDischord Recordsのバンドだね。だけどそれもケント州の大学に通うまでのこと。Oliがマーゲイト(※ケント州にある街)で企画していたショーに行くようになると、俺はDIYとは何かをついに知ったんだ!その頃、UKやヨーロッパには数多くの格好良いスクリーモのバンドがいたんだ。BATTLE OF WOLF 359とかね。俺が心の底から熱中した、初めてのDIYシーンさ」

O「父が僕を音楽好きにさせようとしたんだ(母は僕にクラシック音楽を演奏させようとしていた。僕の意志に反してね)。それで、"イケてる"とも解釈可能なLou ReedやLED ZEPPELIN、Jimi Hendrix、STEPPENWOLF、Joe Walshといった音楽への情愛を叩き込まれた。結果、僕は父が毛嫌いしていたNIRVANAやTHE OFFSPRING、RAGE AGAINST THE MACHINEに夢中になったよ。そうして僕と友人のTimは、その少年時代をエクストリームな音楽の探究に費やすことになる。僕が初めて行ったギグはストレート・エッジ・ハードコアのショーだった(xCANAANxとTHIRTY SECONDS UNTIL ARMAGEDDONのね。どちらのバンドも、未だに僕にとっては特別なバンドさ)。ギグでのモッシュを目撃したとき、僕はみんなが喧嘩を始めたものだと思ったよ。当時、僕は13歳だったからすごく怖かった。手の甲に"X"をしている人たちがとても印象深くて、格好良く見えてね、それだけの理由でストレート・エッジになりたかったことを覚えている。けど、未成年の飲酒の楽しみを知っちゃったから無理だった。そのギグの翌週にはKORNを見に行った。全然違う(でもどこか妙に似ている)体験だったな。それからニュー・メタルを経て、ハードコアとメタルだけを聴くようになっていった。主にTHE DILLINGER ESCAPE PLANやBURNT BY THE SUNといったやつさ。で、ブラック・メタルやスクリーモ、Dischordモノにエモ、スラッジ、"エクスペリメンタル"と言われる音楽へ没入していく。最近じゃ、僕はジャズにレゲエ/ダンスホール、東南アジアのフォーク/ポップ、民族音楽、パンク、クラシックなヘヴィ・メタルやロックも聴くようになった。それって、父が聴かせようとして、僕が拒絶したものなんだよね(父さん、CREEDENCE CLEARWATER REVIVAL[※アメリカのカントリー・バンド]を嫌ってごめんよ)」

E「B-52sやSOFT CELLをよく聴いていたな。あと、地元のバンドも大好きよ。EFIALTISや

SEMI、FRAU、GLOSS REJECTION、もっともっといるけどね。あとはMOLOCHもね」

■自主で7インチをリリースしていますが、これはどうして?LVEUMのPacoなら、SNOBを気に入るんじゃないかと思うのですが。

E「そうね、自分たちでリリースしたのは、誰からもオファーされなかったからよ、ハハハ!けど実際、バンドが自分の手でリリースするのって大切なことだし、良いことだなって思うの。それがDIYなバンドであるってことだと思うしね。あと、Pacoはプレス方法について私たちに協力してくれたのよ。けど、私たちのアルバムは誰か出してくれないかしら…」

J「自分たちで2枚の7インチをリリースするのは、本当に楽しい共同作業だったよ!みんなにもオススメしたいね!もちろん、多くの人たちの協力や助言ナシにはできなかっただろうね。特にPacoにはすごく感謝しているよ!」

■"Send In The Mayor"という曲の歌詞は面白いですね。Boris Johnson(ロンドンの市長[※mayor])について僕は全然詳しくないですが…。

J「Boris JohnsonやDavid Cameron(※イギリスの首相)といったイートン校(※多くの政治家を輩出しているイギリス一の名門)の学友連中は、イギリスを苦しめる元凶そのものだよ。上辺は魅力的に取り繕っているけど、あいつらの利己的な政治によって、貧困に喘ぐ多くの社会的弱者が脅かされているんだ」

■最近のロンドン・パンク・シーンについてはどういう印象を抱いていますか?

E「落ちついて考えてみて、ここでどれほど多くのギグが行なわれ、どれだけバンドがいるかをね。この都市はモンスターみたいなもの。数え切れないくらいのシーンがあり、毎晩様々なことが起こっているわ!私の望みは、異なるジャンルの人たちがもっとパンクとハードコアに関わってくれることね。素晴らしいバンドがここにはたくさんいるけど、ときとしてそれは同じメンツ、同じグループの人たちによるものなの!ギグにしても、色んなジャンルがもっと混ざればいいんだけどね」

■シーンは細分化しているわけですね?

J「Ellieが話したことと似通っているけど、ロンドンのパンク・シーンは、その中に異なった小さなシーンが存在しているんだ。そこには厳然たる境界線があるなんてことは言いたくないけどさ。たくさんの人たちが交じり合えば、新たな何か、自分では気づいていない好きなものとかを見出せると思うんだけどね!」

■ロンドンのベテラン・パンク・バンド、THE DAMNEDやCOCKNEY REJECTS、999、THE BUSINESS、COCK SPARRER、THE VIBRATORSとかって、皆さんにとってはどうなんでしょう?ショーに行ったりしますか?それとも眼中にない?

O「僕はそういった類いのバンドはどれも大好きだよ。THE BUSINESSと999は聴いたことがないから除くけどさ。でもライヴには行ったことがないし、2015年の彼らのショーにお金を払うのはためらっちゃうね。多分、面白いんだろうけどさ。Ellieと僕はCOCKNEY REJECTSのフィルムを見るのが大好きだったんだ。"East End Babylon"や、特に彼らの活動初期はイカれていたよね。あの頃と較べると、今のライヴはひどいものさ。当時のフィルムはすごく面白いけど、危ない逸話も山盛りだった。"East End"のカヴァーをやろうかって話しもあったんだよ。僕たちは全員、マイル・エンド(※イースト・ロンドンの地区)に住んでいたからさ(※"East End"の歌詞には、"meet the Mile End Mob"という一節がある)。だけど、皮肉なことにその地区も今では高級住宅街へと変貌を遂げているんだ」

E「ええ、そういったバンドは好きよ。SNOBでの初練習のとき、私たちはTHE DAMNEDのカヴァーをしたくらいだしね!けど、今の彼らのライヴを見ようなんて気は起きないわね。彼ら



は、パンクがもっと巨大で、商業的に成り立つプロジェクトだった時代のバンドだし、彼らもまた商業的だしね!その手のバンドの、広いステージが設置された大規模なギグって楽しめないのよ。再結成バンドを見ると、大抵は落ち込んだりガッカリさせられるしね」

■皆さんロンドンに今でも住んでいるんですか?やはり生活費は非常に高いのですか?

E「その通りよ。ロンドンは進行形の問題が山積みなの。狂ったようにお金がかかるから、若者や普通のファミリーなんかはロンドンの中心地からどんどん遠くへと追いやられているわ。私たちは全員、レイトンストーンというイースト・ロンドンの地区に住んでいる。すごく近所同士よ。ここに引っ越してきた理由は、それまで住んでいた地区じゃ家賃が高くて払えなくなったから。今じゃここも気に入っているし、地元のパブに行ったり中華の点心を食べられるお店に一緒に行ったりしている。レイトンストーンは私たちの新しい7インチ・レコードのジャケットにもなっているわよ」

J「不動産業者と地主はこの都市を滅ぼそうとしているんだ。多彩で活気に満ちた場所になりうるのに、面汚しだよ!」

■"ヨーロッパ本土をツアーしても、イギリスには来ないバンドが多い"なんて話しを聞いたことがありますが、本当でしょうか?

J「ヨーロッパには行くのに、イギリスには来ないバンドがいるなんてことに、俺はこの何年もの間、全然気がついていなかったんだ。多分、イギリスへツアーに行くのはお金がかかり過ぎるって評判が立っていたからだと思う。それに、ビザを持っていないミュージシャンにとって、国境を渡るのは面倒がつきまとうしね。だけど演奏するには最高の会場や見所のある都市がたくさんあるから、イギリスに来ないバンドは損しているぜ!!!」

■では、僕がロンドンに旅行に行ったら訪れるべきスポットを教えてください。

E「ライヴができて、カフェにレコード・ショップ、コミュニティ・スペースも併設したDIY Space For Londonがオープンしたばかりよ。Franや他にも多くの友人が、その倉庫を完成させるため、一生懸命に頑張ったの。あなたも訪れるべきよ!」

O「レイトンストーンに来て、IRON MAIDENのメンバーたちが初めて出会ったパブで飲もうぜ(※レイトンストーンはメンバーの出身地)。そしてBlack Cat Cafeでロンドン一の朝食をとるんだ。DIY Spaceに行ったら、Joey's Kitchenでまた食べて、Tome Recordsで買い物をする(全部同じ建物にあるんだ)。あとはWood StreetマーケットにあるMike's Record Shopにも行かないとね!」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に日本の読者にメッセージを。

O「日本には美しい場所と美しい人たちがいる(EllieとJohn、そして僕は2年前に訪れたことがあるんだけど、それまでに訪れたことのあるどんなところよりも素晴らしかった)。だけど最近の日本政府は本当に最悪っぽいね。僕たちの国も、ファシストのナチ野郎が支配しているからさ。みんなが大丈夫ならいいんだけど、あんなファシストたちを勝たせちゃいけないよ。それともしSNOBで日本に行けたら(!!!!どうかどうかどうか誰か企画してほしい!!!!)、僕たちと一緒に楽しんでもらいたいね。おっとそうだ、GOOD THROBの新しいレコードも楽しみにしててね。"The Queen Sucks Nazi Cock"なんて曲も収録されるんだ。Hendrixの2015年版みたいな曲さ」



Punk Rock 2015 JAPAN

TEXT:IIJIMA TOSHIO(MANGROVE LABEL/RECORD SHOP BASE)
PHOTO:NORI except-LOUDMOUTH/UNSKILLED LAB

現行の日本のPUNK ROCKバンドについて書いて貰えませんか?と山路編集長からの依頼。余りに大雑把な括りだけど、自分に依頼するという事は、要は以下の系統のバンドについて書いて欲しいという事だったので駄文になるかとは思うが引き受けました。

PUNKの中でも、70年代の主流のPUNKは勿論、リリースの少なかったKILLED BY DEATH系等と呼ばれたりするバンドへの思い入れ、影響下にあるバンド達、具体的に言うと90年代、TEENGENERATE、REGISTRATORSからの流れを意識的/無意識的を問わず、感じさせるバンド達の現在、という事だ。以下に記載するのは自分が知りえる中での現在活動中のPUNK ROCKバンドの一断片としてご理解願いたい。また、GARAGEバンドと同様に捉える向きもあり、実際近い関係のバンドも居るのだが、日本には世界に誇る素晴らしいGARAGEシーンがあり、それを語るのは相応の方がおられるので今回は敢えて触れないでおきます。

本年(2015年)にMANGROVE LABELからリリースされた『SCRAP!』というオムニバスがある。レーベル側が選んだ関東、関西、九州のバンド計7バンドが収録された。東京からはBLACK AND WHITEとCAR CRASHの2バンドが参加。

まず現在の前述タイプのバンドを語る上で最重要、外す事の出来ないのがBLACK AND WHITE。先人達から続く活動の場の流れに乗らず、ヴォーカルのMICK SICKがライヴに足を運び、タイプに拘らずPUNKを感じるバンドとの交流を深めていった結果、PUNK/HARDCOREを交えた独自のスタンスを確立、自然にHARDCOREバンドとの共演も多く、episode sounds、HARDCORE SURVIVES、POGO 77 RECORDSというタイプの壁を飛び越えたレーベルからのリリースを果たし、自主企画"OCTOPUS"と共に台風の目的存在となっている。70s PUNKへの偏愛に満ちていながらサウンドを焼き直しするのでは無い、性急でアグレッシヴなPUNK ROCKを撒き散らかし、カオスとヘイト・アプローチが溢れたライヴを繰り広げている。セカンド・ギターに"NO"で活動するシゲルが加入、5人編成となり更に強力なサウンドへと進化を遂げる。

そしてCAR CRASH。2000年代からFIRE STARTER/REGISTRATORS等のライヴへ足を運んでいたメンバーが結成。流動的であったドラマーもex-ROMANESのチグが加入後、現在の完璧なメンバー構成となる。MANGROVE LABELから1st 7インチをリリースし、好評を得てHARDCORE/GARAGEバンドの企画と多方面に活躍中!正に現在のKBD　PUNKと呼べる粗くソリッドで疾走感溢れるPUNK ROCK!今後リリースされ



BLACK AND WHITE



CAR CRASH



XTITS



MANDES



WOTZIT



AGGRO



FRANTIC STUFFS



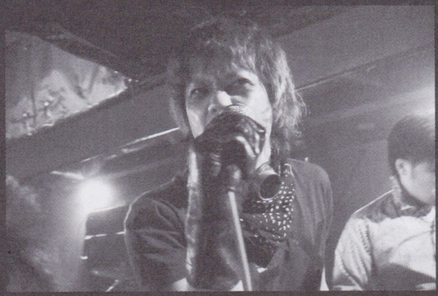
LOUDER



THE GEROS



CENTIPEDE



LOUDMOUTH



tv.orphans

るアルバムも期待!

現在東京で他の呼称(POWER POP、ROCK'N'ROLL等)と交わらない純粋にPUNK ROCKなバンドはこの2バンドが代表格に挙がるのではないだろうか。そして新たにそれに加わる勢いのピュアなPUNKバンドがXTITS。気怠く、クールな雰囲気の女性ヴォーカル/ギターの"YUKO"、HATEMANの"KIMONO"、KNOCKSの"440"の3人編成。シンプルな楽曲は、鋭く凶器的でもあるYUKOのギターが絡む事により素晴らしく昇華されている!曲のアレンジ・センスも抜群!自主制作DEMOとMANDESとのSPLIT 7インチをリリースしている。

そのMANDES、ex-SUPERSNAZZのKANAKOがヴォーカル/ギターで在籍。初期SUPERSNAZZを彷彿させるストレートに突っ走る曲はGARAGEというよりPUNK ROCK!ヴォーカルも凄く良い。2015年12月には1stアルバムをリリース!440在籍のKNOCKSもまさかの"CHLOROFORM"(90年代KNOCKS/REGISTRATORSメンバーによる企画。関連オムニバスをMANGROVEから96年にリリース)唯一の生き残りとして(笑)超マイペースに現在も活動中。SUPERSNAZZもメンバー・チェンジを経て現役活動中です!

バンドの意向でバンドの名前は出せないが、90年代から長らく活動していた某バンドに終止符を打ち、まったく新たなサウンドで結成されたのがWOTZIT。ライヴ/音源デビュー前からメンバーが口に出していたBIG BOYSやSCRATCH ACID、SSTやTOUCH & GO等80年代のバンド、レーベル、そして現行で発生し続ける海外の新たなひと癖有るバンド等から連想させた楽曲は想像以上の仕上がり!捻じれつつもストレートな曲構成、切れ味鋭い硬質ギターが印象的!世界の現行地下PUNKシーンと呼応したかのサウンドは今後も期待大!1st音源をカセットでリリース、即完売。その某バンドのベーシストZETTはTHE SLOWMOTIONSに加入。うねり捲るベースでバンド・サウンドをまた一段と強力にしている。

WOTZITでギターを弾くHATTORIがヴォーカルのバンドがAGGRO。PROTO PUNKを彷彿させるリフを主軸にした楽曲を凄まじいテンションとスピードで繰り出す。ブチ切れてるヴォーカルも強烈!デモCDRと2枚の7インチをリリースしている。PROTO PUNK影響下と言えば結成から15年、遂に1stアルバムをepisode soundsからリリースした大阪のFRANTIC STUFFS。大阪/関西シーンの一翼を担う存在で、アルバム・タイトルにも配した"LAST WAVE"を自主企画として行い続け着実にしっかりと活動を続けている。当初の70s PUNK志向からPROTO PUNK的サウンドへ移行して行きつつもPUNK ROCKの衝動を放出し続けている。演奏力に裏付けられたパワーとグルーヴに惹き込まれるライヴも必見!

ここで東京以外のバンド名が出たところで、他地域のバンドも紹介したい。まずは大阪。圧倒的なパワーと演奏力、噛みつくヴォーカルで存在感を示すLOUDER。HARD PUNKの呼び名がピッタリのアグレッシヴなサウンド。日本とアメリカからシングルを3枚、1stアルバムをアメリカのSORRY STATEからリリースしている。

PUNKの悪魔が憑依したかのヴォーカル、特に絶叫がインパクト大なTHE GEROS。GARAGEビートを下地にしたUS PUNK特有のサウンドをソリッドな演奏で現在に蘇らせている。デモCDRを経て1stシングルを自主レーベルからリリース。

『SCRAP!』に参加のCENTIPEDE。HARDCOREバンドを経てたどり着いた広義で純粋なPUNK ROCK!彼らのPUNKセンスには脱帽です。デモCDRを売り切り、POGO77から7インチ2枚組をリリースしている。ヴォーカルがフロアに乱入し、バンドのベースに持って行って、盛り上げるライヴは場をカオスと化す。PUNK ROCKとしか言い様がない!

九州宮崎のLOUDMOUTHも『SCRAP!』に参加。地元宮崎で10年以上活動を続けながらPUNK ROCKの攻撃性、衝動をピュアなまま持ち続ける奇跡のバンド!危険なルックスと狂犬としか言えないヴォーカルは脅威!同じく宮崎のRAW ACTIONSもデモCDRをリリース、今後に期待大!

福岡のXL-FITS。捻じれた特有のサウンドのバンドでこの流れで紹介されるのはメンバーにとって不本意なのかも知れないのだが、名前を出して置くべき重要/注目のバンド。tv.orphansも福岡で長いバンド歴を持つメンバーが在籍。70年代地下ROCKの怪しさとグルーヴを発する居そうで居ない、やれそうでやれないスタイル。乞う単独音源リリース!

POST PUNK的バンドとして活動していた



UNSKILLED LAB



MIDDLE EDGE



DIALS



THE RAYDIOS



BACK TO BASICS



LIQUID SCREEN

THE C-3sのメンバーが新たにバンド活動未経験者と結成した三重/四日市の女性3人組、UNSKILLED LAB。初バンドだからこそ出来る、しかも拙さなんて全く感じさせないピュアな衝動に溢れたPUNK ROCK!いきなり8曲入り!のデモ引っ提げ登場というのも良い!

再び関東に戻り、『SCRAP!』に2バンド参加の街、茨城/水戸。以前のPUNKの熱狂から比べると落ち着いてきたそうだが良質なバンド達がまだまだ活動中である。とはいえ本文の流れに沿うバンドは厳密には北関東エリア在住のメンバーで構成されていて、純然たる水戸のバンドは少ないそうだ。にも拘わらず、水戸のバンドと呼ばれるのはそれだけ水戸で活動しているイメージを持たれる程、街の名がPUNK ROCKとリンク、浸透している証のように思える。北関東エリアのメンバーで構成されながら"水戸"のバンドと呼ばれるのがMIDDLE EDGE。THE SNEEZE、PERFECTFORM、LATEKNOCKS等のバンド歴を持つメンバーも在籍。POST PUNK的冷やかさとPUNK ROCKの衝動が同居するサウンドで、曲の完成度も高い。自主で1stシングルをリリースしている。

そして2015年秋現在、メンバー・チェンジで惜しくもライヴ活動を休止しているのがDIALS。2005年結成と活動歴も長い。嗜好する音楽が多岐に渡るメンバー等が70s PUNK/KBD等の影響を強く打ち出した楽曲は、どの国のバンドにも似ない独特のグルーヴを持つ。切れ味の良いギター2本が絡むソリッドなサウンド!シングルを2枚と埼玉/熊谷のIDIOT VOXとのSPLIT 7インチをリリースしている。以上2バンドが『SCRAP!』に参加。

POST PUNK的ダークなサウンドのTVTVは、内に貯めこんだエネルギーを体内から漏らし散らかりまくしてる様なヴォーカルが印象的。シングルのリリース予定もある様なので期待大!現在も、水戸を拠点に若者を交えた新しいバンド達が出現してきている様なので、まだまだ目が離せない。

以上、ここ近年〜10年程に現れたバンドを紹介したが、彼らに影響を与え、リスペクトされたバンドのメンバー達も別バンドとして現在活動中である。

ex-TEENGENERATE/FIRESTARTERのFINK、ex-THE YOUNG ONESのAZUMI/SUZUKIが在籍のTHE RAYDIOS。7インチ・シングルをコンスタントにリリースし続け、毎月ライヴを行い精力的に活動中(FIFI率いるFIRESTARTERは残念ながら活動停止中。復活が切望される)。

京都のFIRST ALERTのメンバーはヴォーカルSHINTARO、ドラムZUNGがBACK TO BASICSで活動中(LOUDERのヴォーカル/ギターTOUMAもギターで在籍)。2枚のシングルをリリースし、いよいよ1stアルバムの準備中とか??同じくFIRST ALERTのギターIMAIはex-RADIO SHANGHAIのヴォーカルNANBU、SENSITIVE LIPSのKAOTIC、ex-THE NAILCLIPPERSのMISTAKE(THE SESSION OF PINKというMODSバンドでも活動中)と共にLIQUID SCREENで活動中。シングル、2枚のアルバムをリリース。

名古屋ZYMOTICSのTORU、AKIはNICFITのKENKENと3人でVODOVOを結成、ツイン・ベース!という編成でライヴ活動を開始。

ベテラン勢も世代の違い等関係無しに入り混じり、ライヴが行われている。また、近年、スタイル/サウンドの違うバンドとの交流も多く、同系統のバンドのみでのライヴというのがあまり無くなってきている様にも思える。

THREE MINUTE MOVIE、YOUR PEST BAND、PINPRICK PUNISHMENT、THE DEATH、BO!ROCK→1等は特に交わり深い。

またPUNKに影響を受けつつ、ロックンロール色の強いバンドも数多く、共に頻繁にライヴを行っている。RANGSTEEN、THE THUNDERROADSの熱く炸裂するライヴは必見!ROCKBOTTOM、BABYBLUEはPOWER POPと呼ばれ、自覚していながらそのライヴはPUNK ROCKの衝動と双璧をなす程強力!

THE BROKEN HEARTS、TRIPLE JUNK、SUNSETT(ex-THE YOUNG ONES)も注目。日本語PUNKのザ.ノウ、平成に生きる昭和のロックHIGH LIFE、ブライテスト・ホープHATEMAN、横浜のSTAIRS、浜松のFLORIANS、神戸のBOYS ORDER(ex-PRAMBATH/RADIO SHANGHAI、ZERO NUMBERS)、金沢のP.C.2、BEATGENERATION、鹿児島のRAY BURNZ等々当然この場で全てを書ける訳も無く、また自分が知らないバンドもいる訳だし、あまり紹介される機会が無いだけで知名度は低いのかもしれないが、まだまだ全国でバンドは活動中!そしてこれからも結成されて行くと思う。

ピンポイントな情報は得やすいが、無関係なバンドの情報に触れる機会が少なくなった様に思える今日、この記事をきっかけに興味を持ってくれて、そして聴いたり、ライヴに足を運んで貰えたら嬉しく思います。



V.A./SCRAP!
(CD)MANGROVE LABEL

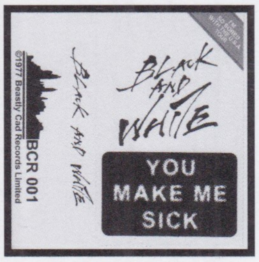


BLACK AND WHITE/
MORTAL SIN
(7s)episode sounds


BLACK AND WHITE/
WE LIKE NOISE
(7s)HARDCORE SURVIVES



BLACK AND WHITE/
BRAIN WASH
(7s)POGO 77



BLACK AND WHITE/
YOU MAKE ME SICK
(CASSETTE)Beastly Cad Records


CAR CRASH/
BRIGHT FUTURE?
(7s)MANGROVE LABEL



XTITS/UNDO SESSIONS
(CDR) 自主



MANDES//XTITS/SPLIT
(7s) 自主



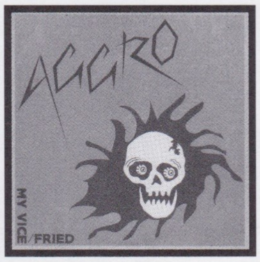
MANDES/MANDES
(CD)BUY-SUE RECORDS



WOTZIT/TAPE 1
(CASSETTE)TAPEDROME



AGGRO/MAELSTROM
(7s)BEER DROP RECORDS



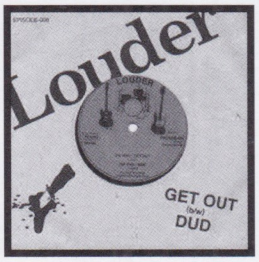
AGGRO/MY VICE
(7s)BEER DROP RECORDS



FRANTIC STUFFS/
LAST WAVE
(LP)episode sounds



LOUDER/IDIOT MIND
(7s)LOUDER



LOUDER/GET OUT
(7s)episode sounds



LOUDER/TEAR ME UP
(7s)SECRET MISSION



LOUDER/LOUDER
(LP)SORRY STATE



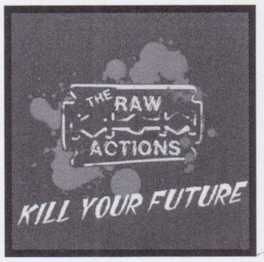
THE GEROS/
genocide or suicide
(7s)KILLER BOY RECORDS



CENTIPEDE/PUZZLE
(7s X 2)POGO 77

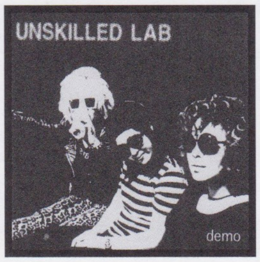


LOUDMOUTH/
DOWN TO TEMPTATION
(CD)SNOTTY



THE RAW ACTIONS/
KILL YOUR FUTURE
(CDR) 自主

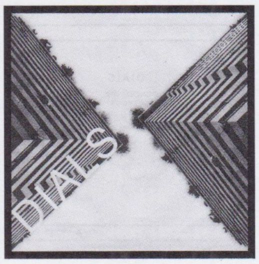

XL-FITS/COWBOY
(7s)SIDVICIOUS RECORDS



UNSKILLED LAB/demo
(CDR) 自主



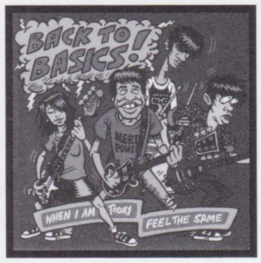
MIDDLE EDGE/
EMOTION FREEZE
(7s)BALLOON ON THE PAN



DIALS/SCHOOL GIRL
(7s)MANGROVE LABEL



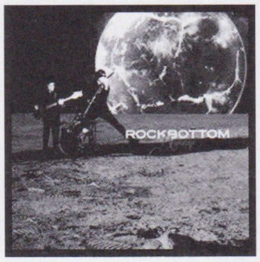
THE RAYDIOS/CRAPS
(7s)SECRET MISSION



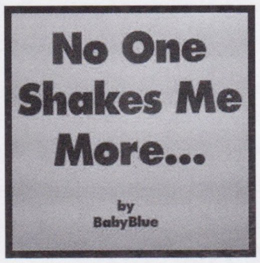
BACK TO BASICS/
WHEN I AM TODAY
(7s)FINE TUNING



LIQUID SCREEN/
VIRGINAL SECRETIONS
(CD)TIMEBOMB



ROCKBOTTOM/REVENGE
(CD)TARGETEARTH



BABYBLUE/
NO ONE SHAKES ME MORE...
(LP)BABYBLUE



CRIS interview

(ETNIKO BANDIDO INFOSHOP)

フィリピン・パンク・シーンのアクティヴィズムについて

2013年の9月にフィリピンに行ったときマニラで出会った、痩身長髪、クールないでたちのパンクスが、今回インタヴューしたマニラのインフォ・ショップ、Etniko Bandidoのクリスだ。そのときは一緒にいる時間もなく、数言話しただけだったが、その直後にフィリピンを襲った台風の支援を通してよく連絡をとるようになり、その素晴らしくオーガナイズされた支援活動には、私もいろいろと勉強させてもらった。

このインタヴューでは、実践的なアナキズムを地道に行っている彼らのコミュニティが、普段どんな活動をしているのか、またフィリピンのパンク・シーンにおける、パンクスと政治性との関わりにはどんなものがあるのかなどを聞いてみた。クリスが語る、フィリピンのパンク・シーンの一部で行われている活動は非常に多岐にわたり、日本では見られないものもあるので、興味のある人は記事の一番最後に載っている彼のメール・アドレスにコンタクトして、フィリピンに実際に行ってみたらいいと思う。そこには数々の刺激的なアクションとともに、あふれんばかりのホスピタリティと、カラマンシーたっぷりのおいしいフィリピン料理が待っているのだ!　　文:鈴木智士　(焔と煙霧:http://tower.void-server.net/)

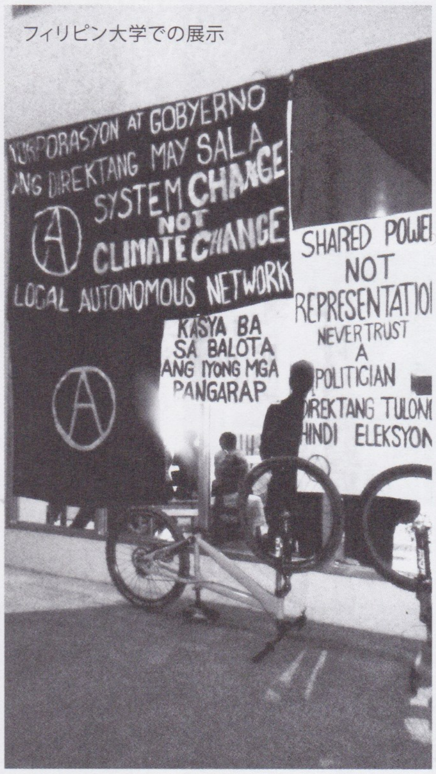
■ではまず自己紹介を。クリスがやっているEtniko Bandido Infoshopの歴史や活動、また2013年の台風支援のプロジェクトについても教えてください。

「こんにちは。クリスといいます。仕事はトライシクル(フィリピンの主要な交通手段の一つである、三輪タクシー)の運転手をやっています。前にURBAN CHAOSやCONFLICT OF INTERESTというバンドをやっていました。今はLiberationというニュース・レターの配信をやったり、Etniko Bandido Infoshopを仲間と一緒にやったり、Mobile Anarchist Schoolと、Mindset Breaker Press/Distroというプロジェクトにも関わっています。

Etniko Bandido Infoshopは、2010年9月に始まった、寄付金ベースのプロジェクトで、ラディカルな意識を広げるための自治スペースです。そこではオルタナティヴな情報やリソースを提供しています。また会議、ワークショップや映画の上映、勉強会、セミナーなどにも利用できます。この現代の、システマティックに洗脳された状態に対抗するアイデアのための場所というわけです。

私にはJueyというパートナーがいて、彼女はカラマンシー・ジャムや、編み物のかばん、ブレスレットや他の手芸品を作ったりしながら、地域経済を支えることを目指した活動をしています。

Etniko Bandidoはまた、警察の暴力に反対するキャンペーン、反APECO(Aurora Pacific Economic Zone and Free port ※1)、ルネタの行商人排除への反対運動(※2)、反選挙キャンペーン、オキュパイ・ウォールストリートへの連帯行動、公平な温暖化対策、Food not Bombsなど、様々な社会政治や環境に関する行動やキャンペーンなどに関わっています。あとはパンクのライヴや展示、またフィリピン大学やフィリピン工芸大学で行われたAnarkiya Festivalなんていうのも開催しています。



フィリピン大学での展示

2013年11月にフィリピンを襲った超巨大台風ハイエン(ヨランダ)についてですが、私と友人たちで、台風の被災地に行って支援を行いました。最初は、たくさんの人たちが既に食糧や飲料水、薬や毛布などを与える支援を行っていたのもあって、どのような支援をすべきかアイデアがありませんでした。なので、他に何ができるかをきちんと考えた結果、友人からの助言もあり、代替となる電力の供給を行うことにしました。そのアイデアを実行することに決めてから、地元や海外の友人たちに向けて、このソーラーパワーとインターネット/電話利用のためのミッションについてアピールを行いました。地元や海外との連帯のおかげで、このプロジェクトを開始することができ、Solar Guerilla Autonomous Respond Teamが生まれました。

私たちの友人の一人がその地域の人を知っていたので、レイテ島のサン・ミゲールを救援場所として選びました。最初は友人のBas、Mhel、Jueyと私の4人で現地に向かいました。ただソーラーパワーの機材や支援物資を

Etniko Bandido でソーラーパワーのワークショップ中のクリス



持っていくのに4人では足りず、大変でした。マニラからバスで30時間行ったところにあるのですが、現地ではBasの親戚のところでキャンプをはり、そこで携帯電話やライトの無料充電の方法や薬、救援物資の提供、Food not Bombsのような食事の提供、ストレス軽減の活動などについて相談しました。現地では、被災者は家族などへのメールや電話のために1〜2時間の移動を必要としていました。また支援活動を行いながら、ボランティア、自己管理や相互協力などのアナキズムの理念や価値を現地の人々に伝えました。また記録も行い、政府の杜撰な支援や救援物資の提供の計画性のなさなどを目の当たりにしました。ミッションは合計で1ヵ月の間に3回行いました。友人やボランティアにお願いして、毎週違うメンバーで現地へ行きました。

現地でのリアクションは好意的なものばかりでした。現地の先生たちが、私たちがいつも黒いTシャツを着ているのに気付いて黒い服を着てくれていたこともありました(笑)。また被災して大変な目にあっているにもかかわらず、貧しい家族が料理を作ってふるまってくれたこともあって、そのときは感極まりましたね。そこにはある種の相互扶助があったと思います」

■私が2013年にTHE HAPPENINGの手伝いでフィリピンにツアーに行ったとき、各地の多くのパンクスやハードコアの人たちが、Food not Bombsのような活動に参加していることや、インフォ・ショップが各地にあることが印象的でした。フィリピンではパンクスがこういった活動に関わるのは一般的なことですか?現在のフィリピンのパンク・シーンにおける政治的な動きについて教えてください。

「すべてのパンクスやハードコアの人が政治的な活動に関わっているわけではないですが、例えばFood not Bombsは政治的なアクションのきっかけになるような活動になっています。ただすべてのFood not Bombsが献身的に活動を継続できているわけでもありません。

インフォ・ショップや自治スペースは現在勢いを増していて、興味を持ったり影響を受けている人も多いです。自分たちの場所を創造することを考えているわけですね。個人的には、ムーヴメントの新しい動きとして"The New Age of Territorialities(場所所有の新時代)"という見方をしています。現在の社会状況で、家族ベースの実用的なアクティヴィズムを実践し、生活するための新しいスペースや場所を創造する、ということです。フィリピンのそういった場所の多くは、カップルや子持ちの親、または同じ志を持った人々のグループによって運営されています。私にとっては、このスペースは政治的社会的スペースであると同時に、自宅でもあるわけです。

ただ、この場所をどのように維持していくかは引き続き考えなくてはなりません。この種のスペースでは、常に自分の理想や行動、政治性がどのように実現されるかを学ぶプロセスが存在します。責任や感受性、また敬意は、社会の一般常識から離れるための鍵となります。ただインフォ・ショップや自治スペースは、フィリピンの一般の人々にとってはとても新しいものなので、彼らの興味が遠ざかっていっているのも感じます。近所の人たちからは良いも悪いも混ざった反応がありますね。

また現在フィリピンでは、別の生き方、新しい生き方や理解を模索するような、新しい反権力的な環境運動の波が来ています。家庭でソーラーパワーを使用している人もいますし、ガーデニングやパーマカルチャーを実践する人や、伝統的なハーブの薬について学んでいる人もいます。

昨年と今年に、私たちはフィリピン大統領の一般教書演説に対する"Sining, Kalikasan, Aklasan(アート、エコロジー、抵抗)"を企画しました。これは創造的なデモで、パンクスやアナキストだけではなく、福音派やアーティスト、庭師、マハリカン(※3)、適正技術のデザイナー、環境活動家、ライターや詩人なども参加しました。来年は他の地域で行う計画をしていますが、ボランティアで参加してくれる、信頼できる人を今探しているところです」

■そのフィリピンのツアーで感じたのですが、特に若い人の間ではニューヨーク・ハードコアのスタイルが人気のようです。マニラにはどのようなバンドがいますか?

「僕の知る限り、80年代から2000年くらいにかけては、フィリピンのパンク・シーンは一つでしたが、今は分裂しています。今はクラスト/グラインドに比べると、ハードコアのシーンが大きくなっています。古いパンク・バンドもまだ有名で、活動しているバンドも多いです。一緒に普段の活動などをやっているバンドを紹介すると、GOOD MORNING TOWELS、DISBAND、EYES OF FIRE、EXECUTION OF TERROR、VEX、REPUGNANT、BEFALL、TOXEMIA、DISABUSE、CANNABI CRUST、5TH OF NOVEMBER、CRAWLING CHAOS、TKNK、FLASH ELORDE、RUNSUCK、COMMIT ARSONなどがいます」

■現在のフィリピン政府について、政治的状況について教えてください。

「フィリピン政府はいつも同じ家族によって支配されている、腐敗の温床でしかない少数独裁体制です。そして政府は多くの活動家、学



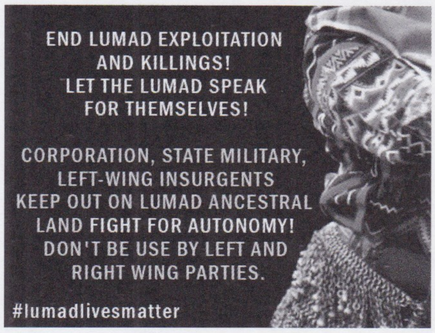
Juey お手製のジン・ホルダー

生、農民、先住民などを違法に殺したり、強制失踪させたりしています。

先日フィリピンの大統領は、石炭発電所を増設することを決定しました。また政府は土地のない農民に土地を与えることになる農地改革法をまだ実行していません。またこの国では就労の機会が増えないので、人口の12%の人たちは海外で働いたり、仕事を探しています。政府は大企業や投資家と手を取り合いながら、新しいショッピング・モールやデパートを建てるために、スラム地域や都市の貧困エリアを排除しています。政府から得られる社会福祉や援助は十分ではありません。貧乏人はますます貧乏になり、金持ちはますます肥えていくのです。

また今、私が関わっているルマド民族の支援活動についても少し話させてください。先住民族であるルマド民族は、ミンダナオでのNPA(New Peoples Army、新人民軍)と政府との戦いの犠牲になっている民族です。政府はルマドがNPAや、左翼組織の一部だとの疑いでルマドのコミュニティを攻撃したり、逆にNPAはルマドが反革命的な動きをしていると、ルマドの人たちを殺しています。現在ルマド民族を救うために、Manilakbayan行進キャンペーンというのがミンダナオからマニラまで行われていますが、これはフィリピン共産党/NPA/NDA(民族民主戦線)や、その同盟であるBAYAN、GABRIELAなどが先頭に立って行っているものでした。彼らはルマドの問題を加熱する選挙熱に合わせて政治的利益に結び付けようと利用しているわけです。逆に政治家もこの問題を政治利用しようとしています。私たちが考えているのは、別の観点に立ったルマドの支援です。「ルマド虐殺を止めろ!自治のために立ち上がれ!左翼政党にも右翼政党にも利用されるな!」をスローガンに支援をしています。

ルマド民族支援のスローガン



■このEL ZINEの過去の記事で、フィリピン・シーンについての記事があったのですが、そこに、フィリピンでは80年代の終わりにライオット・ガールのムーヴメントがあったと書いてありました。これについて何か知っていますか?またフィリピンのシーンにおける、政治的ムーヴメントの歴史について教えてください。

2013年の台風支援の際に用意した支援物資



「そのライオット・ガールのムーヴメントについては聞いたことはありますが、詳しくは知りません。フィリピンのパンク・シーンにおける政治的ムーヴメントについて説明すると、80年代のパンク・シーンは既にポリティカルで、歌詞の内容のほとんどは政府に対するものばかりだったそうです。当時はマルコス独裁政権下で、とても抑圧的でした。

90年代になると少し状況が変わり、西洋のアナキズムやアナーコ・パンクが入ってきて、たくさんのバンドや個人がこの政治的アイデアに興味を持ち、影響を受けました。マニラのC.O.R.、NOT FOR SALE、ALCOHOLOCAUSTというバンドや、ルセナのANTIPHATY、またダバオにもバンドがたくさんいました。これらのバンドは、音楽以外にもFood not Bombsをやったり、Earth FirstやAnimal Liberation Frontなどの活動にも関わっていました。ベジタリアンやヒッチハイク、DIYのシャツ作りなど、ライフ・スタイルにも影響を与えました。

21世紀に入って以降は、より政治性を深めて、社会闘争に参加するパンクスも増えてきました。先述のように採鉱反対、GMO(遺伝子組み換え作物)反対、先住民の支援、公平な気候変動対策、開発反対、警察の暴力への反対など、環境や社会、政治的な様々な問題に取り組んだり、サポートをしたりしています。またマクドナルドに反対したり、無買日(Buy Nothing Day)などのアクションをしているパンクスもいるし、農業やパーマカルチャー、インフォ・ショップや自治スペースの運営など、より長期的なプロジェクトを行っているパンクスもいます」

■フィリピンのパンクスがそういった政治的な行動に関わるのは、どういった動機だと思いますか?あまり気にしないパンクスや、ポリティカルでいることをダサいと思うパンクスもいると思いますが。

「なぜパンクスが政治的な行動に参加するのかは、個々人にそれぞれの理由があるだろうから、これといった答えがあるわけではないと思います。私の個人的な理由で言えば、日々の生活に抑圧を感じ、それを味わっていたからです。私の家族は、十分な権利もない下層階級にカテゴライズされていて、そのなかで私は常に、貧困や環境などについてのさまざまな残酷さを見たり読んだり聞いたりしてきました。これが自分のキャパシティで何かやろうという私自身のモチベーションとなっています。他のパンクスの中にも、私と似たような理由で政治的に活発な人もいるかもしれません。私にとってパンクでいるということは、不平等、不正義を生み出すシステムへの怒りや不満を表現する方法なのです。パンクは私には、単なるサブカルチャーやファッションだけの話しではなく、それはカウンターカルチャーであり、政治的に異を唱えることです。単に社会や政府に反対する曲を作るだけでは、この破壊的なシステムに対抗する姿勢としては十分ではなく、生活に直結する社会政治的な問題に取り組むことが必要なのだと思います。他のパンクスや人たちも、自らの生活が脅かされるようなことが起きれば、そういった社会的政治的問題にもっと目を向けるようになるのかもしれませんね」

■話しは変わりますが、第二次世界大戦中、日本軍がフィリピンを占領していた時期に、数々の蛮行を行ったことは周知のことだと思います。一般的に、フィリピンの人々はそれについてどのように思っているのでしょうか?また現代において、日本の企業などが「投資」と銘打ってフィリピンで開発を行っていますが、これについてはどういう状況があるのでしょうか?

「日本の占領時代を経験した年配の人に聞けば、特に女性は日本軍の行った冷酷な事実を伝えるのではないでしょうか。その時代の女性たちはご存じのように「Comfort Women(慰安婦)」と呼ばれ、性奴隷となり日本軍の

兵士にレイプされていました。またそれは女性だけではなく、「Comfort Gay」という同じ被害を受けた男性もいました。そのような「Comfort Women」の多くは依然として日本政府に謝罪と補償を求めています。ただ同じ質問を若い人にすると、彼らの多くは日本に行って仕事をして、家族を支えたいと答えるのではないでしょうか。

現在日本企業が行っていることについては、問題になっている破壊的なプロジェクトをひとつ例に挙げます。それは「サンロケ多目的ダム・プロジェクト」と言って、BOT方式(※4)で開発され、サンロケ電力会社に譲渡されました。それは日本の丸紅(42.45%)、アメリカのSITHE(50.05%)、そして日本の関西電力(7.5%)の、100%海外資本による共同事業で行われました。総額11.9億ドル(約1,300億円)のこの破壊的プロジェクトは、日本輸出入銀行(現・国際協力銀行:JBIC)や、その他の民間銀行との共同事業として出資されていました。

このルソン島北部のアグノ川で建設されているサンロケ・ダムは、925以上の家族を強制的に立ち退かせ、土壌の浸食による漁業の破壊のために、下流に住む何万もの人々の生活が影響を受けます。このダムは、2万人のイバロイ(フィリピンの農耕先住民)の人々や、ダムの下流に住む78の町、およそ150万人の人々の生活を脅かすことになるのです。サンロケ・ダムは、人工的な惨禍を、現在、未来に残すことになるでしょう」

■私が日本の友人たちに、フィリピンをツアーしてきた、と伝えると、ほぼ必ず「危なくなかったの?」と言われます。それは残念ながら、フィリピンに対してニッポン人が持つ一般的なイメージのようです。私はツアー中、一度も危険を感じるようなことはなかったですが(常に現地のパンクスといたからかもしれませんが)、このイメージについてどう思いますか?

「この「フィリピンは危険だ」というイメージは、主要なメディアによって作られているものではないでしょうか。ただ私の考えでは、一般的な意味での「危険」というのはどこにでもありうることで、それはどのような種類の「危険」を意味するか、ということだと思います。フィリピンのすべての場所が危険だとは言えませんし、またそれは、経済的、文化的、政治的文脈で異なると思います。泥棒やスリなどが「危ない」と言うのなら、マニラのような大都市ではよくあることかもしれませんが、すべての人がそれをするわけではありません。その裏には、不平等や飢餓、仕事や家がないなどの問題があり、それらを経験している何百万という人々がいるわけです。またもしミンダナオ島の一部での外国人の拉致が「危ない」と言うのなら、なぜその外国人は、複雑な問題がある紛争地帯へわざわざ行くのかと聞きたくなります。もちろんミンダナオのすべてで拉致が起きるわけではありません。個人的には、この島国には、たくさんのいい人たちがいると思いますよ」

■最後に日本のパンクスに一言どうぞ!

「インタヴューの機会をありがとうございます。このジンで私の考えや経験をシェアできてとても嬉しく思っています。フィリピンと日本のパンクスがもっと交流しあって、関係を深めていけたらいいですね」

Etniko Bandido Infoshop
http://ebinfoshop.surestepintegral.com/
コンタクト　etnikobandido@riseup.net

注

1.APECO:フィリピン北部のアウロラ州におけるリゾートや貿易港などの開発事業で、そこで生活を営んでいる先住民や農家、漁師などが土地を奪われている。

2.ルネタの行商人排除:マニラのルネタ公園における、個人の行商人の排除。行政主導で排除が行われ、貧しい人たち(同公園には行き場を失った多数の野宿者たちが住む)の唯一の生活費獲得手段である行商を禁止し、中には逮捕者も出ている。

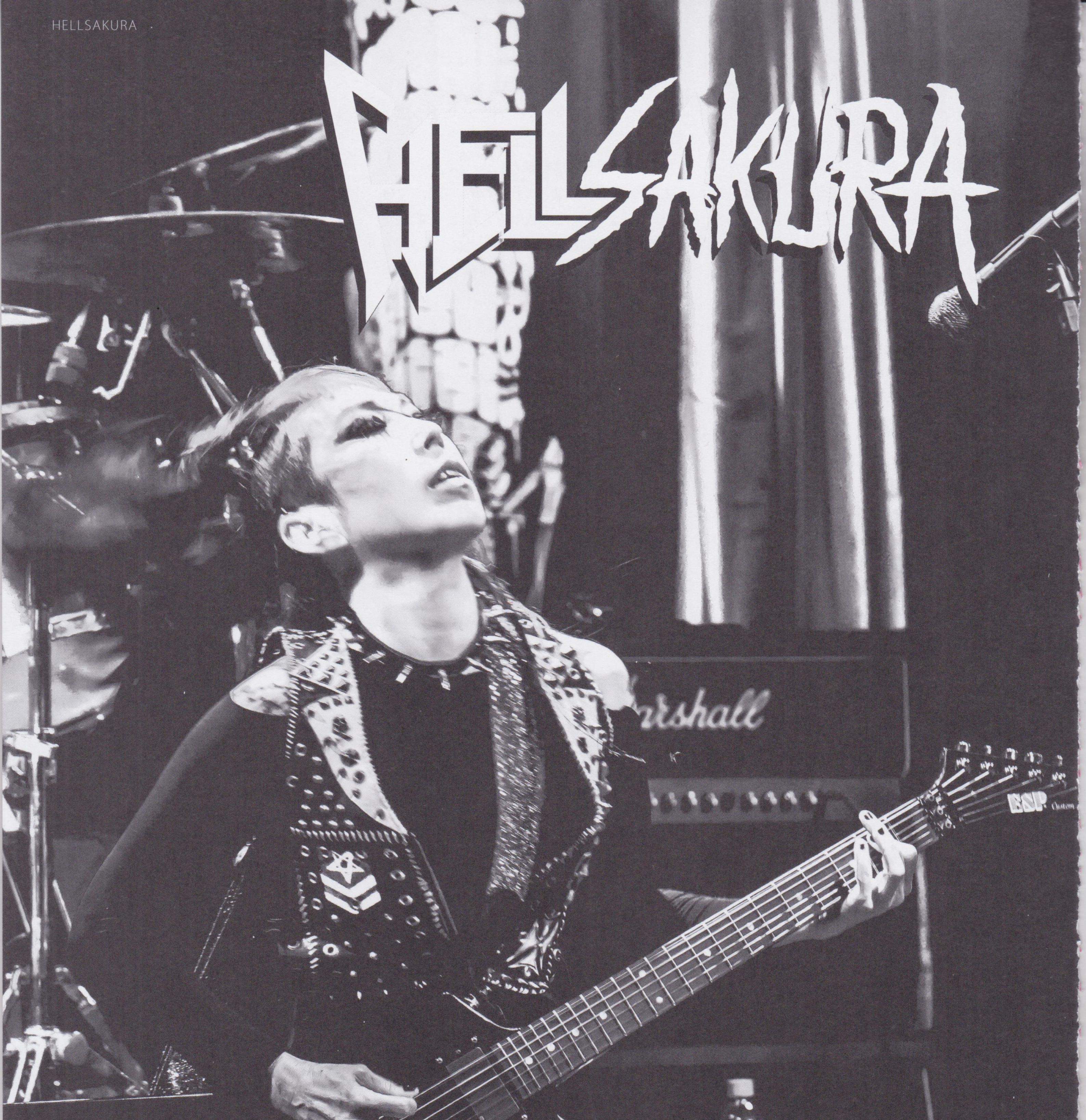
3.マハリカン:「フィリピン」という名前は、16世紀にスペインによって植民地化された際に、当時のスペインのフェリペ皇太子(後のフェリペ2世)にちなんでつけられた名前なので、独立した今その名前を使うのではなく、先祖が使っていたマハリカンを使用する人たち、またその運動。時としてナショナリスティックな運動でもあるらしいが、環境問題においてはクリスたちも一緒に活動を行うことがあるとのこと(議論はしたが、やはりまったく政治的立場が違うらしい。いわゆる「シングル・イシュー」というやつか。ちなみにこの運動には、インド起源のスピリチュアル団体、アナンダ・マルガも関わっているとか)。

4.BOT(Build-Operate-Transfer)方式:PFIの事業(公共施設等の建築、運営などを民間企業が行う事業形態)方式の一つで、民間事業者が自らの資金で対象施設を建設し(Build)、維持管理・運営を行い(Operate)、事業終了後に所有権を公共へ移転する(Transfer)形式のこと。



Etniko Bandido Infoshop

HELLSAKURA



HELLSAKURAは2009年にKarasu Killerから『Sakura Fubuki』CDを日本でリリースした。同時に敢行されたジャパン・ツアーのラインナップは、Murochin(ABNORMALS)がドラム、Tadafumi Yamagami(GAS/COP)がゲスト・ギター、Rafael Yaekashi(DARGE/N.E.K.)がベースという、素晴らしいミュージシャンで構成されていたわ。

ツアーは素敵な体験になったし光栄だった。日本のシーンで名の通ったミュージシャンとツアーを共有しフレンドシップをより強固なものにできたからね。それに名古屋や三重県の四日市、東京といった各都市の優れたバンドと出会い、共演できたことも嬉しかったな。少しだけ名前を挙げるならKAMISORIにVIVISICK、DARGE、N.E.K.、ROBIN、ACROSTIXといったバンドね。

ツアー後には『Sakura Fubuki』をカセット・テープで出さないかという誘いがあったから、「Live in Japan」をボーナスとして追加したの。それはインドネシアからリリースされたわ。この作品はHELLSAKURAのリリースの中では最もレアね!

Karasu Killerの協力のおかげで良い思い出ができたけど、今度はHELLSAKURAのニュー・アルバム『Venömrizer』が、1983年から活動している日本のMCR Companyと、日本とブラジルを股にかけて12年間活動しているKarasu Killerの協力によってリリースされるわ!HELLSAKURAが2015年にお届けするこのニュー・アルバム、『Venömrizer』は生と死の儀式。耳から血が噴き出すわよ!

INTRODUCTION:Cherry(HELLSAKURA)　INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■やぁ、Cherry!Genki desuka?
「Konbanwa Rafael, Watashi wa genki desu arigatou.とっても元気だけど、すっごく忙しくて慌ただしいわね」
■昨日、2009年に行われたHELLSAKURAのジャパン・ツアーについて考えていたんだ!初めての日本はどうだったのかな。気に入った?
「私たちが日本でやってのけたギグと同じくらいに強烈なエナジーを、目の当たりにできたのは最高だった。それに新しく友達を作ったり、ファミリーに会えたのも最高だったわね」
■あの頃から何か変わった?
「サウンドがよりヘヴィーになって、円熟味を増しているわ。ヘヴィーで強烈なサウンドにするため、ギタリストにも加入してもらったの。Donidaっていうんだけど、彼が私の横でギターを弾いてくれているわ。彼はTumba Recordsからリリースされた『Blood To Water』という作品でも一曲参加してくれてて、以前から見知った仲なのよ」
■HELLSAKURAの現在のメンバーを紹介して。
「Denis Okumaがドラム、Donidaがギター、Napalmがベース、そして私がギター・ヴォーカルよ」
■もうすぐリリースされる『Venömrizer』CDについて聞かせてよ。
「自宅やスタジオで8ヶ月もの間練習を繰り返した後に、レコーディング作業をLoud Factory Prodで行なったの。それからSerpenth(※オーストリアのデス・メタル・バンドBELPHEGORのメンバー)やBob Vigna(※アメリカのデス・メタル・バンドIMMOLATIONのメンバー)、NERVOCHAOS(※ブラジルのデス・メタル・バンドでCherryも在籍)のメンバーやJoãoを誘ってギター・ソロを弾いてもらったり歌ってもらったりしたのよ!CDはもうできあがっているわ!ブラジルのKarasu Killer Recordsと日本のMCR Companyのおかげでね。私たちは彼らとパートナーになれてとても光栄よ!」
■このアルバムの歌詞のテーマは?どんな過程を経て書いているのかな?
「死、生、力、そして毒におかされる恐怖。Serpenthが描いてくれたバイオ・シックなアート・カヴァーが手掛かりを与えてくれるはずよ。歌詞を書く過程は長いわね。でも病的なインスピレーションを得たときに書くの。そして曲が私たちにフィットするように、何度も何度も演奏する。でも2曲だけ、スタジオで歌詞を書いた曲もあるわね。説明するのに適した言葉が分からないんだけど、何というかスタジオでの"時間の感じ方"がとても重要なの。セッションをしている途中で、色んなことが変わっていくからね」
■HELLSAKURAの全音源は2007年以降、日本でもリリースされているよね。KAMISORIとのスプリットではパンク・ロックの雰囲気で、ポルトガル語の歌詞だった。2枚目のCDにしてツアーのためのアルバム『Sakura Fubuki』では、MOTÖRHEADの影響が感じられて歌詞は英語だった。そして『Blood To Water』やDARGEとのスプリット7インチ『Tropical Mud』ではもっとアグレッシヴでヘヴィーなサウンドになっていた。君はこのニュー・アルバム『Venömizer』をどう評価している?
「このアルバムは私たちのベストを示しているわ。新しいメンバーで多くの時間を費やしたからね。日本のバンドやレーベル、友人たちから素晴らしいサポートを得られたことをとても感謝しているわ」
■バンドで生活しているの?それとも仕事をしている?ブラジルでバンドをやる上で最も大変なことは?
「そうね、もしあなたがバンドをやっていて、自分でレコードやCDを出したり、ギグなんかをするなら、それは大変だけど楽しいことでもあると思うの。そして私はすごく真剣にそれらに取り組んでいるわ。ええ、メンバーのうち何人かは音楽やアート、映画に関わる日雇いの仕事をしているわね」
■バンドは最近ショーをしている?ブラジルや海外へのツアーの予定は?
「ブラジル・ツアーを計画したいのよ。2ヶ月間、オフの日なしでプレイしまくるの。だけどそれは難しいし、不可能なところもあるのよね。都市間の距離の問題もあってね。だけどいくつかギグをやるつもりだし、海外ももちろんね!」
■現在のブラジルのアンダーグラウンド・シーンについて、どんなところが良くて、どんなところが悪いと思う?何かサポートは受けられる?
「あるときはストロングでクールだし、あるときは極端に貧弱よね。幸運にも私たちはインディペンデント・レーベルやレコード会社からサポートしてもらえている。Karasu KillerやMCR Company、Tumba Records、Loud Factory Prod、Shinigami Records、Sick Mind、アメリカのManic PanicやElixir Stringsとかね」
■今のブラジルからは新しいバンドがたくさん出てきているけど、この復興についてどう思っている?この事実について何か思うところは?
「復興とは思っていないわね。昔からのバンドも前線復帰しているし、クラシックなメタル・バンドもこれまでより活動的になっている。だけどリオデジャネイロのHATEFULMURDERについてだけは言わせて。彼らは素晴らしいわ。実際に、私のもう一つのバンドNERVOCHAOSの南米ツアーで彼らと会ったこともあるのよ」
■ブラジル以外の国のバンドでは、どんなのが好き?何か挙げられるかな?
「チェコのKRABATHORを聴いていたわね。日本のSACRIFICEやNEUROTICOSも。あとはアルゼンチンのコルドバで見たNEMORISに、チェコのNASTY RATZはウェブでチェックしているわ!」
■読者にメッセージは何かある?
「サポートしてくれてどうもありがとう。Keep the flame burning!」

hellsakuratv@gmail.com
www.facebook.com/hellsakura

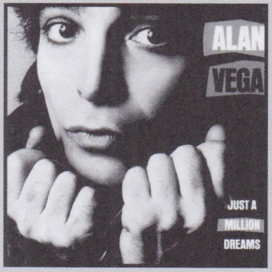


LASHING SPEED DEMONS VOL.21

はい、今回は、前回の続き…EL ZINE誌上の記事やインタヴューの中で名前が登場するハードコア以外のバンドその他を紹介する特集、その4であります。前回は本誌VOL.8以降のバックナンバーからピックアップしましたが、今回はVOL.0からもう一度見直しました。改めて「こんなバンドが、フェイヴァリットだの影響源だのとして、あんなバンドの名前を挙げている！」みたいなのが多くて、かなり興味深かったです。読者の皆様にも興味深いと思っていただければ幸いですが。

TEXT:大越よしはる

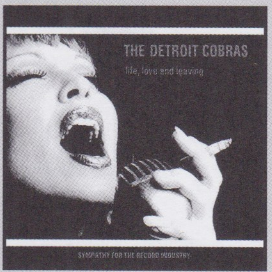
ALAN VEGA/JUST A MILLION DREAMS



本誌VOL.4、SEXDROMEインタヴューより。アラン・ヴェガといえばSUICIDEの片割れだが、ソロ・アルバムもたくさん出している。コレは1985年のアルバムで、一部をTHE CARSのリック・オケイセクがプロデュース。時代を反映してというか、多分本人たちは売れ線のエレポップをやっているつもりだと思うが、全然そうはなっていないところが恐ろしい。この人がメロディを追おうとしても、結局いつの間にやら呪詛になっている。

(ELEKTRA 9 60434-1) LP 1985年

THE DETROIT COBRAS/LIFE, LOVE AND LEAVING



本誌VOL.8、CAROLINE AND THE TREATSインタヴューより。90年代以降のガレージ・パンクの中でも最重要バンドのひとつ、コレは2ndアルバム。ソロモン・バーク、アイク・ターナー、クライド・マクファター、オーティス・レディング…とR&Bを中心に、比較的オブスキュアな楽曲ばかりを掘り起こしてはワイルドでタイトなサウンドと姐御風のヴォーカルで最高にカッコよく料理してみせた奇跡的なバンド。デトロイトはやっぱり違う。

(SYMPATHY FOR THE RECORD INDUSTRY SFTRI 635) CD 2001年

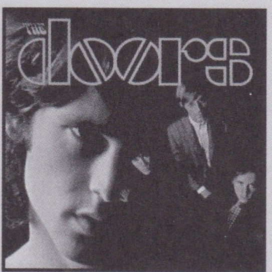
THE BEATLES/PLEASE PLEASE ME



本誌VOL.18、FILTHY HATEインタヴューより。パンク・ムーヴメントの頃、ジョン・レノンは「僕らもかつてはパンクだった」と発言した。ジョン・ライドンはその発言を知って「じゃあ死んだ時の奴は何だったんだ?」と発言した（確か音楽評論家の水上はる子さんがそんな話を書いてた）。では今のジョン・ライドンは?…ともあれ、パンクによる革新が必要なかった、ロックがそのまま革新だった時代の記録（しかも名曲ぞろいときた）。

(EMI 46435) CD 1963年

THE DOORS/THE DOORS



BROTTSVÅG!（本誌VOL.3）、NIGHT FEVER（VOL.5）、ラファエル・ヤエカシ（VOL.7）、T-55'S（VOL.15）他、あちこちでフェイヴァリットとして名前が登場するバンド。そりゃそうだよね、あのイギー・ポップが歌い始めたきっかけが、ジム・モリソンだったっていうぐらいだし。元祖パンクに影響を与えた、元祖・元祖パンクというワケだ。他にもXなど、本誌に名前が出てくる多くのパンク・バンドがこの人たちに多大な影響を受けている。

(ELEKTRA EKS-74007) LP 1967年

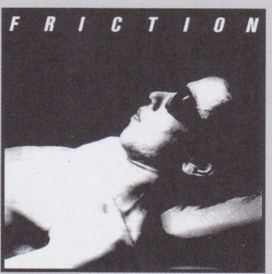
BLUE ÖYSTER CULT/SECRET TREATIES



本誌VOL.8、デンマークのレーベル、アダルト・クラッシュのオーナーのお気に入りはとんでもなく雑多だが、その中にこのバンドが。アメリカでは知らぬ者のないバンド（?）だが、マニアックなファンは北欧にも日本にも。"世界最初のヘヴィ・メタル・バンド"とかいいつつ、ニューヨーク・パンクにも通じるサイケデリックのしっぽを引きずった怜悧なサウンド。ラヴクラフトとピンチョンの影響を感じさせる悪夢のような3rdアルバム。

(ソニー MHCP 1353) CD 1974年

FRICTION/FRICTION



本誌VOL.19、死んだ方がまし・インタヴューより。日本のパンク史上では絶対に外すことの出来ないバンドだが、EL ZINE誌上ではそれ以前に名前が出たことはなかったと思う（本誌の性格を考えれば当然とも言えるが）。死んだ方がましのメンバーが言うとおり"冷たい雰囲気"というのが初期から通底したムードとしてあったバンド。メンバーがこのバンド以前にロンドンではなくニューヨークのシーンで活動していたことは大きかったと思う。

(徳間ジャパン 32WXD-106) CD 1980年

血と雫/雲を掴む



本誌VOL.8では、VOL.0でのREALIZED亀谷氏のフェイヴァリットのひとつである高橋幾郎…の参加作品として光束夜のアルバムを紹介したが、その高橋幾郎が現在参加しているバンドの、現時点での最新作がコレ。森川誠一郎（Vo：Z.O.A.）、山際英樹（G：割礼）とのトリオによる、ミニマルにしてあまりにも緊密なサウンドが展開する。高橋は楽曲をグルーヴさせるのではなく分断するようなドラムに加え、独特過ぎるピアノも披露。

(Grand Fish/Lab GFL1205) CD 2014年

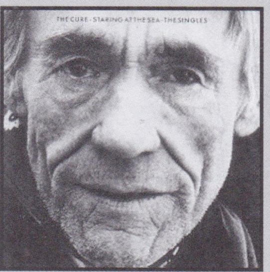
GUNS N' ROSES/LIVE ERA '87-'93



EL ZINE的にアリかナシかといったら、まあナシの方のバンドじゃないかと思うんだけど、IRON LAMB（本誌VOL.2）をはじめとして、SEXDROME（VOL.4）、T-55'S（VOL.15）なんかがフェイヴァリットに挙げている。まあ本誌VOL.17のLAメタル特集でも書いたとおり、旧来のLAメタル勢に較べるとパンク度が異常に高いバンドではあったんだけど。コレはタイトル通りのライヴ音源寄せ集めで、一種のベスト・アルバムとして聴ける1枚。

(GEFFIN 0694905142) CD 1999年

THE CURE/STARING AT THE SEA-THE SINGLES



MOSTROS（本誌VOL.5）、CHILDREN OF TECHNOLOGY（VOL.8）、デイヴィッド・オデール（VOL.12）、DORNATA（VOL.16）…と、少なからぬバンドやアーティストがフェイヴァリットに挙げている。80年代が青春だった人（の一部）には絶対的な存在だが、もっと若い世代にも影響を与えていると思うと感慨深い。コレは初期のシングル集で、ニューウェイヴィーにしてゴスでポップだったこのバンドの音楽性を知るにはちょうどいい。

(ポリドール POCP-1880) CD 1990年

岩明均/寄生獣



本誌VOL.11、nü-klè-er blast suntanインタヴューより。ここのヴォーカリスト、アミが本当に日本の漫画やアニメに入れ込んでいるということは、インタヴュー中に列挙される漫画のタイトルを見ても思い知らされる。クールジャパン恐るべし…。中でも『寄生獣』は、実写映画にもなったんで特に有名だろう。岩明均の代表作だが、この人の作風は他の作品でも透徹した哲学のようなモノを感じさせる。それはSFでも時代劇でも一貫している。

(講談社 アフタヌーンKC) コミックス 1990〜95年

JURASSIC JADE/帰天



本誌VOL.19、イタリアのF.O.A.D.レコーズのインタヴューより。本誌でこのバンドを取り上げるのは3回目(のはず)だが、コレは2014年9月にリリースされた、現時点での最新作。今世紀に入ってからの作品中では最もスラッシュ・メタルに回帰した、スピーディーでアグレッシヴな作風を聴かせる一方で、どこかしらポップな感触もある1枚に仕上がっている。しかし東日本大震災を経てのアルバム、HIZUMIの歌は真摯にして重い。
(BxTxHx BTH-056) CD 2014年

LEUZEMIA/LEUZEMIA



DISCHAKA(本誌VOL.17)に限らず、南米のパンク・バンドやアメリカのラティーノ系パンク・バンドに多大な影響を与えたらしい、ペルー最初期のパンク・バンド(1983年結成)。2008年に再発されて、界隈(俺含む)に衝撃を与えた。レンガ塀をバックにしたジャケットは嫌でもRAMONESを思わせるが、リヴァーブ中毒気味なサウンドはむしろジョニー・サンダースに近い。ところでバンド名はLEUSEMIAなのかLEUZEMIAなのか…。
(Lengua Armada Discos LA-54) LP 1985年

THE MICHAEL SCHENKER GROUP/ROCK WILL NEVER DIE



これまでこの連載では基本的に黙殺してきたマイケル・シェンカーだが、「METAL PUNKやろうぜ!」をはじめとして、この人の名前を出さないと誌面が成り立たないのではないかと思われるほど(?)重要性が高いギタリスト。80年代のいわゆるメタルコアでも、この人の影響を受けたギタリストは多かったと思われる(代表格はGASTUNKのTatsuか)。コレはライヴ盤で、最後にSCORPIONSのクラウス・マイネが出てきて全部かっさらう。
(東芝EMI CO32-5094) CD 1984年

MOTÖRHEAD/ORGASMATRON



本誌VOL.10、INEPSYインタヴューより。MOTÖRHEADの作品中でも、このアルバムを推すというケースはかなりレアでは、と思われる。歴代アルバム中では多分かなり評価の低い方じゃないかと思うのだけど、ビル・ラズウェルによる奇妙な音作りやグルーヴに乏しい演奏を差し引いても、実は随所に名曲が。タイトル曲は長いことライヴのレパートリーだったし、「Mean Machine」は日本のメタル・バンドOGREがカヴァーしている。
(ESSENTiAL! ESM CD 557) CD 1986年

MURDER JUNKIES/KILLING FOR CHRIST SAKES



本誌VOL.19より、M.F.G氏曰く、アメリカ人とかの血に流れているR&RというのはG.G.アリンやMURDER JUNKIESみたいなのだ、という…少々極端なような、凄く納得出来るような。ともあれコレは現時点での最新作(のはず)。マール・アリンは相変わらずヘンなヒゲ面で、ディーノ・セックスは相変わらず全裸で、ズルーンとしたR&R。で、なんとこの人たち、2016年1月に来日してしまうのでありました。入国出来るのだろうか…。
(MVD audio MVD6550A) CD 2013年

ORANGE SUNSHINE/HOMO ERECTUS



本誌VOL.7「METAL PUNKやろうぜ!」より。以前やったストーナー・ロックの特集で、何故このバンドを取り上げなかったんだっけ?…と思わざるを得ない、ストーナーの権化…というか、国内発売された時の"贋作ライナーノーツ"のせいで、このアルバムが1969年作の再発だと本気で信じた人が続出したという…。本当は21世紀のバンドだが、"オランダのBLUE CHEER"というのが実に相応しい怒涛のヘヴィ・サイケデリック絵巻。
(LEAF HOUND LHR 006) CD 2005年

PINK FLOYD/THE PIPER AT THE GATES OF DAWN



本誌VOL.5、「サカタルイードのとびっきり対談・タコ部屋編」より、ORdER/CAZU氏曰く、「シドバレット時期のピンクフロイドをね、初期の!今でもファースト・パンクじゃねーか、って思ってるくらいだからさ」と。そうですね、その後のPINK FLOYDはパンクと縁もゆかりもないが、シド・バレット在籍時の初期はパンクに直結だった(カヴァーしてるパンク・バンドがたくさんある)。シドの極彩色の脳波をそのまま音盤化した1st。
(東芝EMI EMS-50104) LP 1967年

THE POP GROUP/FOR HOW MUCH LONGER DO WE TOLERATE MASS MURDER?



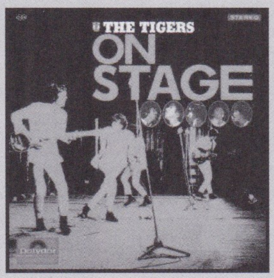
本誌Vol.16、例の(?)対談より、行川和彦さんにとっての"神"がこのバンド…というかマーク・ステュアート。それまでのロックの文脈をパンクのアティテュードで完全に解体して、ダブ以降の音響的な試みを全部突っ込んだ上で再構築する…という、当時のニュー・ウェイヴ/ポスト・パンクの究極を実践し尽くしたのがマーク/THE POP GROUPの試みだったと思う。とにかく当時としては限りなく先鋭的な音だったのは間違いない。
(TDK TDCN-5152) CD 1980年

SOCIAL DEVIANTS/GARBAGE



本誌VOL.3、BROTTSVÅG!インタヴューより。PINK FAIRIESの前身バンドとなったTHE DEVIANTSのそのまた前身バンド。音源はないはずで、唯一SOCIAL DEVIANTS名義のコレはDEVIANTSの1stアルバムから4曲抜粋しただけの、半ばインチキ商品。ここでの4曲含め、DEVIANTSのオリジナル・アルバムが入手可能だと思うんでそちらを聴いて下さい。MOTÖRHEADに至るノッティングヒルゲイト人脈の起点となった存在。
(TOTAL ENERGY NER3007CD) CD 1996年

ザ・タイガース/オン・ステージ



本誌VOL.11、LAS SEÑORASインタヴューより。スペインのロック(基本的にメタルが強い)を日本で聴いている人がいるように、スペインの人たちも日本のグループ・サウンズを聴いていたりするワケですね。コレはザ・タイガースにとって初のライヴ・アルバムで、レパートリーの大半がTHE ROLLING STONESをはじめとする洋楽カヴァー。演奏はかなりたどたどしく、彼らのアルバム中でもパンクな(?)突進力は一番だと思う。
(ユニバーサル UPCH-9016) CD 1967年

THE VELVET UNDERGROUND/WHITE LIGHT/WHITE HEAT



THE DOORSと並んで絶対的なルーツであるはずが、本誌ではVOL.9のLUCIATIONインタヴューで言及されているぐらいで、意外と名前が出てこない。ともあれここでは彼らの作品中最もダークでノイジーでヘヴィなコレ(ジャケットから真っ黒)を載せておこう。それにしてもLUCIATION…ブラック・メタルでありながらフェイヴァリットがMX-80 SOUNDやらキャプテン・ビーフハートやらTHE RESIDENTSやら…かなりディープ。
(ユニバーサル UICY-2335) CD 1968年

V2/V2



本誌VOL.19、マヨルカのDESENTERRADASインタヴューより…メンバーがフェイヴァリットに挙げているV2って、このV2だよね?…RAPEDと並ぶ70's英国グラム・パンクだが、活動中にリリースしたのはシングル2枚。このCDは未発表曲多数のコンプリート音源集だが、今では入手困難か。RAPEDと違うのはハード・ロック色が強いところで、結成が2年遅かったらNWOBHMのGIRLみたいなバンドになっていたのでは、とか思う。
(OVERGROUND OVER55CD) CD 1996年

ES GIBT KEIN WERT

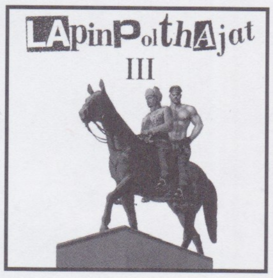
下記のKNAVEのレヴューで、「脳味噌が沸騰し全身の穴から流血必至の加虐の宴」ってありますけど、ちょっと意味分かんないですよね。自分で読み返してみたら、あまりの意味不明っぷりに驚きました。けどそう感じたのだからしょうがない。意味も道理も通じない、それが音楽、それが人生だ!(…これも意味が分かんねぇなぁ)

ARMS RACE/GOTTA GET OUT



"LONDON PUNK NOW"でも触れましたが、いや本当に格好良いんですって!悪党っぽいNickのイーヴィルなヴォーカルに、ゴリゴリ&ストロングな拳の如き楽曲。初期UKHC〜NYHC〜Oi!が好きな人のハートをまとめて撃ち抜く、現代ロンドン最強のバンドです!「じゃあインタヴューしろよ」って話しなんですが、Nick曰く「LPのレコーディングで忙しいから、それが済んだら答えるわ」ってことでして…(泣)。
(Quality Control HQ QCHQ015)7"

LAPINPOLTHAJAT/III



トナカイ髑髏でお馴染み、フィンランドのパンク・バンド"ラピンポルタヤト"。今作はタイトルそのままな3rdアルバムなワケですが、完全にツボにハマりました!Trallパンク〜欧州メロディック・パンクまではギリギリ"イカない"、絶妙なラインで突っ走るFinnish Raw Punk砲弾10発が炸裂。初期の頃よりもメロディーに磨きがかかっているし、最高の出来映えです!アッパレ!
(Vox Populi Records VOX009)CD

KIELTOLAKI/VAPAUDEN ILLUUSIO



こちらもフィンランドの現在進行形のハードコア・バンド"キエルトラキ"(直訳すると"禁酒令")、その2ndアルバム。この"Russia Bombs Finland"ヨロシクな80's直下のピュア・ハードコア・パンクを聴いて燃えない奴は不能だぜ!これぞFinnish Hardcore!な魅力満載。ブックレットにはフィンランド語の歌詞とその英語&日本語訳も掲載されている。そう、ラット・レースは続いているんだ!
(Vox Populi Records VOX008)CD

VAASKA/TODOS CONTRA TODOS



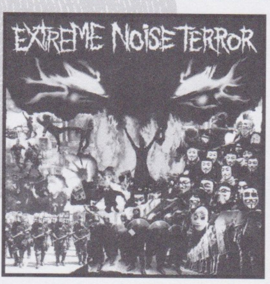
vol.3とvol.14でインタヴューさせてもらったEddie(DESKONOCIDOS、CRIATURAS、Todo Destruido etc)が率いるテキサス発のスパニッシュD-Beatバンドの2015年のアルバムに、2枚のスプリットEPの楽曲を追加した編集盤。一気呵成のスピード・ナンバーからR&Rの旨味タップリのミドル・テンポまで、凡庸なD-Beat系とは一線を画すこの奥深さは、秀逸なソング・ライティングがあってこそ。歌詞の日本語訳付き!
(Vox Populi Records VOX007)CD

BLACK BREATH/SLAVES BEYOND DEATH



vol.4で表紙を飾ってもらった米国シアトルのバンドの3rdアルバム。初期の頃は"デス・クラスト・ロックンロール!イェーイ!!"って感じでしたが、作品を重ねる毎に、徐々にロックンロールの爽快感(ヤンチャ感)が薄れて、よりシリアスでダークネス、モダーンな楽曲がメインに…。そうなると"ちょっとなー"というのが正直なところ。完成度の高いメタル・コアを求めている人には、今のほうが良いかもです。
(Southern Lord LORD208)CD

EXTREME NOISE TERROR/ST



Philの死を乗り越え、遂にENTの最新アルバムが投下された!!OUTOの"I Like Cola"のエクストリームなカヴァー含め、結成から30年目のリリースに相応しい、そしてセルフ・タイトルである意義に充ちた渾身にして極限の一枚。不安要素だったDeanの新たな相棒Benも、素晴らしい仕事(スクリーム)っぷり。グラインド/デス・メタル・バンドのGOREROTTEDやTHE ROTTEDで活動してきた人のようです。
(MCR Company MCR279)CD

KNAVE/DISCOGRAPHY OF DARKCORE-X



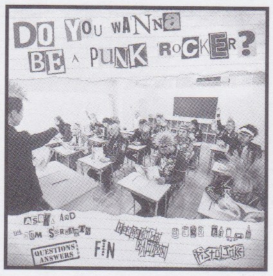
ENTと同じくらいにコチラも極限。Oita City Darkcore:KNAVE(vol.16にインタヴュー掲載)の、海外向けに作られたディスコグラフィーCD(アメリカではカセット・テープでもリリース)。もちろんこのバンドのことなので、既発曲をまとめただけ、なんてことはしない。全曲新たにレコーディングし、より先鋭化。脳味噌が沸騰し全身の穴から流血必至の加虐の宴。パッケージも無慈悲に豪華だ。
(自主 KNAVE003)CD

THE SAVAGES/TOMORROW'S VIEW



前号でデモCDを紹介させてもらったのですが、その後すぐに3曲入りの1stシングルがHardcore Survivesからリリースされたので即ゲット!より蒸溜・抽出され、"何々系"という枠を取り去って己の高みを目指しているかの、淀みなき悲哀のパンク・サウンド。そしてやっぱりこの日本語詞がグッと胸に突き刺さる。静謐なアートワークも秀逸でアリキタリじゃない。けれども"今を生きる"パンク以外の何物でもないのだ。
(Hardcore Survives HCS057)7"

VA/DO YOU WANNA BE A PUNK ROCKER?



Pogo77がお送りするオムニバス。収録バンドは後述のASUKA AND THE BUM SERVANTSに、九州〜90年代ノイズ・コアの申し子RECONSIDERATION、ポゴ・パンクの未来を一身に担うBEER BELLY、UK82直撃なQUESTIONS AND ANSWERS、洒脱な日本語パンク・ロックのF.I.N、そして新潟ノイズ・ポゴ・マスターPISTOL JOKEと多種多様。拘りのブックレットにポスター込みで、大切にずっと持っていたくなる作品です。
(Pogo77 Records POGO68)7"

ASUKA AND THE BUM SERVANTS/ST



そして噂のASUKA〜の1stシングル!初期VICE SQUADをロウ&ノイジーにしたかのサウンドに、"Fuck"を多用しまくるプリミティヴな歌詞。本作こそ、パンクを聴き始めたばかりの若人に聴いてもらいたい。10代でこんなパンクと出会ったら、その後の人生が間違いなく(良くも悪くも・笑)激変するハズ!もちろん90年代のポゴ・パンク直撃世代にとっては涙なしには聴けない一枚であります。
(Pogo77 Records POGO71)7"



VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13 ARE SOLD OUT! THANKS FOR READING! FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

vol.20というわけでこれまでのEL ZINEを振り返ってみますと、「…本当、色々あったなぁ」とシミジミ&シンミリ思ったりもしますが、それでも一応vol.0の後記で書いた「みんなでつくらねばならない　みんなでつくってはならない」というスタンスは保つことができた、そんな気がします。こんな時代だからこそ、「自主独立」と「偏愛」を大切にしていきたいな、と。ただ、"気になる話題のあのバンド"みたいなのをほとんど弊誌ではスルーしてしまっているので、こんなファンジンにお付き合い頂いている読者の方々には、感謝の気持ちしかありません。
マニアックすぎたり、時流に沿っていない感は承知していますが、それでも読者の方々の期待だけは裏切らないよう、今後もノンビリ&テキトーに頑張ってまいります。
…なんて言いつつ、次号はメジャーなバンドが表紙で広告が入りまくりだったら面白いんですけどね(笑)。ほんじゃ、よいお年を〜。

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.20　2015年12月24日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます

脳不安 & FOMO=FAVEL



EL ZiNE VOL.20 600 YEN

the [international] kvlt conspiracy EL ZiNE KEEP PUNK ALIVE & STRONG! VOL.20



the [international] kvlt conspiracy EL ZINE KEEP PUNK ALIVE & STRONG! VOL.20

EL Z

LONDON PUN

ESKORBUTO Punk R

TOM AND BOOT BOYS フ ア

脳不安 釧路パンク・ロック 1981

BEER BELLY

MUTANT ITCH KORROSIVE



YOUNG PUNK